

つるおやま  
鶴尾山城跡・深戸遺跡

東海北陸自動車道建設に伴う緊急発掘調査報告書

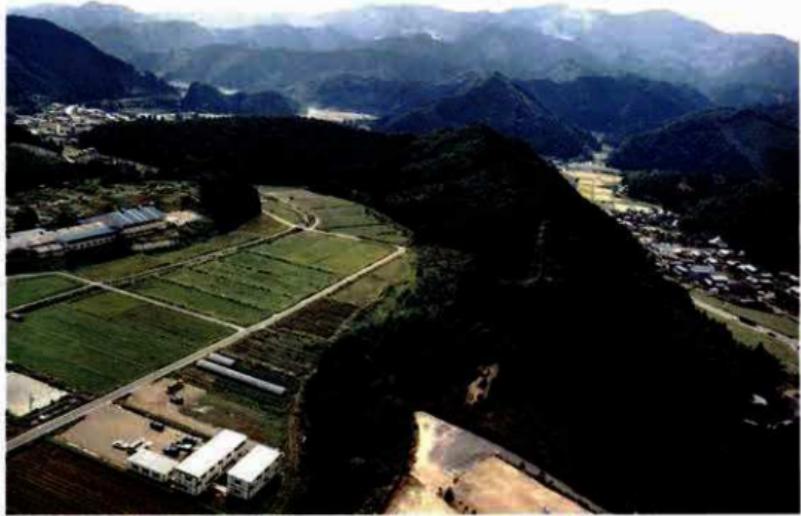
1992

日本道路公団

財團法人 岐阜県文化財保護センター



鶴尾山城跡 調査前遠景



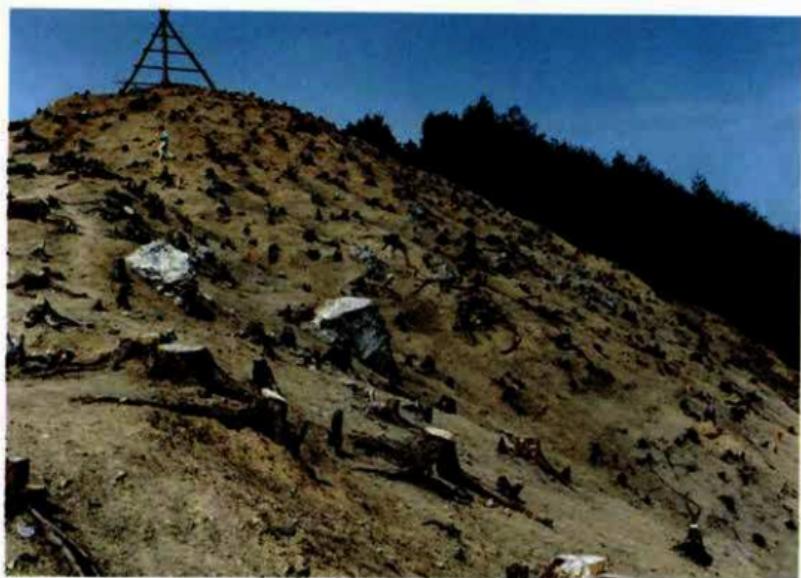
鶴尾山城跡 調査前近景



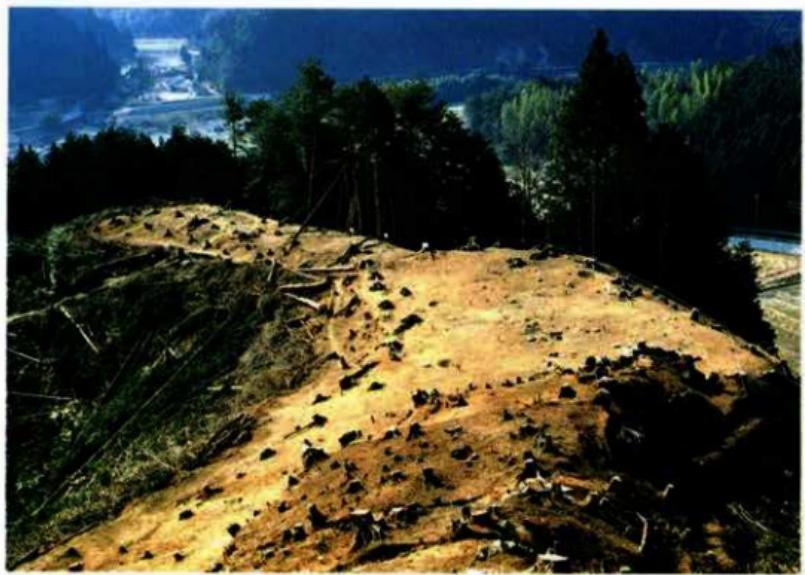
鶴尾山城跡 調査後全景（西から）



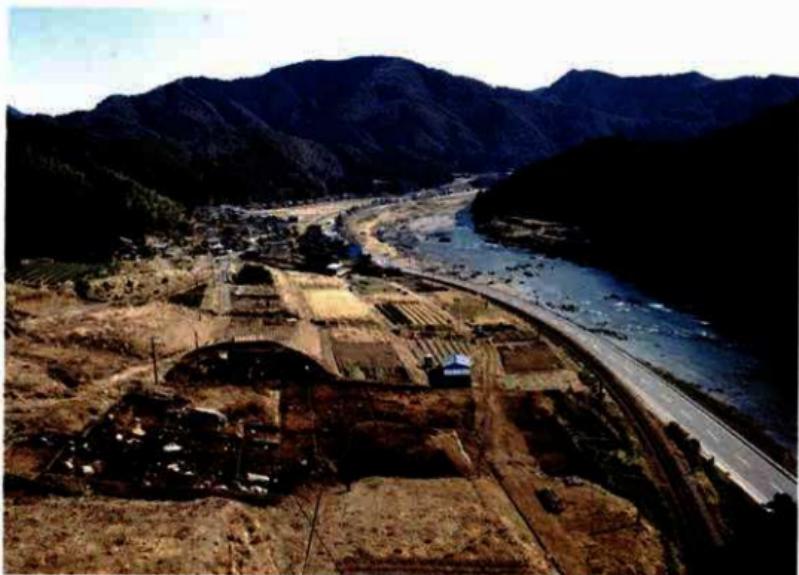
鶴尾山城跡 調査後全景（東南から）



鵝尾山城跡 略状空堀群



鵝尾山城跡 西曲輪



深戸遺跡 調査後全景



深戸遺跡 出土遺物

## 序

重なり合った奥美濃の連山の間を蛇行しながら流れる清流長良川。昔から「山高く水清し」といわれる自然豊かな郡上の地には縄文時代から現代に至るまで人々の生活が連綿と営まれ、その足跡が埋蔵文化財として各地に残されています。

この地に、東海北陸自動車道が建設されることとなり、建設路線内にかかる遺跡については記録保存を図ることとなりました。平成3年度から財團法人岐阜県文化財保護センターが発掘調査を実施し、現在も継続して調査しております。平成3年度は美並村の3遺跡の発掘調査を実施しました。

本報告書は、東海北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告の第2集であり、平成3年度に実施した「鶴尾山城跡」と「深戸遺跡」の調査成果をまとめたものであります。「鶴尾山城跡」は戦国時代の山城で、ほぼ全面的な発掘調査になりました。上下2段の主郭部と階段状の15の曲輪と8本の敵状空堀群をもち、いくつかの礎石建物がたつ山城で、戦国期の山城の防御施設の様子が明らかになりました。こういった遺構の調査は全国的にみても珍しいものであります。また、「深戸遺跡」では中近世の陶磁器片が多数出土し、貴重な資料を得ることができました。本書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、中世山城研究や中世土器研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまで暖かいご理解とご協力を賜りました日本道路公团名古屋建設局美濃工事事務所、美並村教育委員会ならびに関係者各位、そして発掘調査、整理作業に携わってくださった多くの方々に深く感謝申し上げます。

平成5年3月

財團法人 岐阜県文化財保護センター

理事長 吉田 豊

## 例　　言

1. 本書は、東海北陸自動車道（美濃～八幡間）建設工事に伴う建設予定地内にある「鶴尾山城跡」と「深戸遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団と岐阜県が委託契約を結び、財團法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
3. 「鶴尾山城跡」は、岐阜県郡上郡美並村大字白山字城下・上野・上町並・弁在に所在する。本遺跡の発掘調査は、平成3年10月8日から平成4年3月5日まで実施した。  
「深戸遺跡」は、岐阜県郡上郡美並村大字三戸字ツクゼ・坂東海津・石原・ドヤに所在する。本遺跡の発掘調査は、平成3年5月1日から平成4年2月7日まで実施した。
4. 調査にあたっての組織は次の通りである。

**平成3年度（調査年次）**

理事長 秋本 敏文 (平成3年4月1日～平成3年10月15日)

" 岩崎 忠夫 (平成3年10月16日～平成4年3月31日)

副理事長 篠田 幸雄

調査指導 岐阜県教育委員会

指導調査員 千田 嘉博 (国立歴史民俗博物館)

伊藤 秋男 (南山大学)

調査課長 西村 覚良

調査係長 只野 正知

調査担当者 川部 誠 各務 光洋 佐野 康雄

補助調査員 大澤 格子 和田 房枝

事務局長 岩砂 仁

事務局 小林 酷夫 岩手 正実 岩谷 美里

**平成4年度（報告書刊行年次）**

理事長 吉田 豊

調査指導 岐阜県教育委員会

指導調査員 八賀 智 (三重大学)

調査課長 西村 覚良

調査係長 北洞 勝臣

調査担当者 川部 誠 安江 祥司 各務 光洋 長屋 幸二

補助調査員 和田 房枝

事務局長 山崎 春夫

事務局 小林 哲夫 原田東支夫 岩手 正実 岩谷 美里

5. 遺物の整理・報告書作成にあたっては、上記の調査担当者のほか下記のセンター職員に協力を頼った。

宇野 治幸 武藤 貞昭 上嶋 善治 鈴木 昇 千葉 克彦  
藤田 英博

6. 本報告書の執筆は、第3章第3節は各務が、第5章第3節の1は長屋が担当し、その他は川部が担当した。

7. 本発掘調査にあたって、日本道路公团名古屋建設局美濃工事事務所・岐阜県教育委員会・美並村・郡上県事務所・美濃教育事務所には、多大な協力を得た。また、下記の県内外の研究者諸氏には、調査及び報告書執筆にあたって、ご指導・ご教示をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。  
(敬称略 順不同)

須田 勉 (文化庁文化財保護部)	村田 修三 (奈良女子大学)
吉岡 康暢 (国立歴史民俗博物館)	大熊 厚志 (岐阜県教育委員会)
藤澤 良祐 (瀬戸市埋蔵文化財センター)	中井 均 (米原町教育委員会)
田口 昭二 (多治見市文化財保護センター)	内堀 信雄 (岐阜市教育委員会)
若尾 正成 (多治見市社会教育センター)	山上 雅弘 (兵庫県教育委員会)
伊藤 達也 (豊田市教育委員会)	中島 勝国 (可児市立南帷子小学校)
橋詰 佳治 (岐阜県考古学会员会)	福島 克彦 (愛知県立知多高校)
見崎 関雄 (静岡古城研究会)	水野 茂 (静岡古城研究会)
鈴木 東洋 (静岡古城研究会)	高田 徹 (大阪府警)

8. 発掘調査作業及び整理作業には、下記の方々の参加・協力を得た。  
(敬称略 順不同)

坂井由賀子・藤井 定彦・竹内登喜夫・後藤 彦司・矢島ゆり子・長瀬 定一・古宮富七郎
須田すみゑ・須田そとゑ・西部あさゑ・水川 五月・藤田 玉子・川島 種・藤川 さだ
小平 陽司・河合 二喜・末松富士明・山中 寛一・馬場 義憲・日置 正次・村瀬 正夫
高橋 猛・藤田 優・美甘 典夫・大塚 昭三・佐田 進・古川 巍・高瀬 爽子
山田あさ子・粥川 茂子・孝森 小好・深沢さだ枝・高山 花子・清水 文枝・村井 誠一
山下 豊三・野々村政治郎・増田 登・藤原 久司・勝水 泰二・佐藤 一夫・高垣 三松
直井 宗吉・河合千代子・鈴木トミエ・和田やゑ子・勝水八重子・松井 都・澤谷 緑
石田 定雄・多田 一雄・蓑島 正雄・正者力之助・曾我 巍・曾我三千代・谷合 一美
田中 治雄・中島 学海・平田敬三郎・那須 利夫・金尾 はな・吉田美一郎・北原 絵美
野々村みどり・村井 美代・桜井 美樹・三島美奈子・河尻みち子

9. 本書に報告した遺跡の記録類及び出土した遺物は(財)岐阜県文化財保護センターで保管している。

## 凡　　例

1. 鶴尾山城跡の名称は苟安城跡、林廣院山城跡ともいうが、本書では鶴尾山城跡とした。
2. 鶴尾山城跡の各曲輪の名称については、頂上の曲輪を主郭（上段と下段の2段になっている）、三方の尾根の南側の曲輪を南曲輪1～9、西側の曲輪を西曲輪1～4、東側の曲輪を東曲輪1～2とした。また、南側の堀切を南堀切、南曲輪1と東曲輪1の間の堀切を東堀切とした。
3. 遺構については検出順に一連番号を付している。なお、本文中で使用した記号は以下の通りである。
 

SK—土壤、SX—性格不明の遺構、P—ピット
4. 本書で使用した土色名については、「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所監修）を使用した。
5. 本書に掲載した遺跡位置図、周辺遺跡分布図、城跡分布図、鶴尾山城跡周辺地形図は建設省国土地理院発行50,000分の1の「美濃」「八幡」「白鳥」、25,000分の1の「苟安」「郡上八幡」を複製した。
6. 遺物に付した番号は通番で、本文・遺物実測図・写真図版とも同一番号を付している。
7. 遺物（陶磁器）の編年については次のものを参考にした。
 

山茶碗	田口昭二氏・若尾正成氏編年（均質手のもの）
古瀬戸	瀬戸市史陶磁器編第2巻（藤澤良祐編集）付図2
大窯	藤澤良祐氏編年「瀬戸大窯発掘調査報告」
連房式登窯	柄崎彰一編年「尾呂」

## 目 次

### 巻頭図版

### 序

### 例言・凡例

### 第1章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境.....	9
第2節 歴史的環境.....	10

### 第2章 調査の目的と方法

第1節 調査に至る経過.....	16
第2節 鶴尾山城跡の発掘調査の経過.....	17
第3節 深戸遺跡の発掘調査の経過.....	21

### 第3章 鶴尾山城跡の調査

第1節 基本的層序.....	23
第2節 遺構.....	25
第3節 遺物.....	57

### 第4章 鶴尾山城跡の考察.....

### 第5章 深戸遺跡の調査

第1節 基本的層序.....	67
第2節 遺構.....	70
第3節 遺物.....	78

### 第6章 深戸遺跡の考察.....

### 註・参考文献 .....

### 写真図版

## 挿図目次

第1図	遺跡位置図	9
第2図	周辺遺跡分布図	11
第3図	城跡分布図	13
第4図	鶴尾山城跡周辺地形図	14
第5図	鶴尾山城跡周辺の字図	15
第6図	東海北陸自動車道と文化財	16
第7図	鶴尾山城跡縄張り図	17
第8図	鶴尾山城跡調査前地形図	19
第9図	深戸遺跡地形図及びグリッド設定図	22
第10図	基本的層序	23
第11図	土層模式図（1）	23
第12図	土層模式図（2）	24
第13図	鶴尾山城跡横断図・縦断図	26
第14図	鶴尾山城跡縄張り図	27
第15図	鶴尾山城跡調査後地形図	29
第16図	主郭・南曲輪1	31
第17図	主郭上段 SK1～3	34
第18図	主郭集石造構1	35
第19図	主郭集石造構2	35
第20図	主郭石垣状遺構	36
第21図	主郭土壘断面図	37
第22図	南曲輪2～5、敵状空堀群	39
第23図	南曲輪2 SK1・2	41
第24図	南曲輪2 碇石建物	42
第25図	南曲輪4	43
第26図	南曲輪5～9	44
第27図	南堀切	46
第28図	縦土塁	48
第29図	西曲輪1	49
第30図	西曲輪1 土壘断面図	50
第31図	西曲輪1 SK1～3	51

第32図	西曲輪 2・3・4	53
第33図	南曲輪 1 東、東曲輪 1	54
第34図	南曲輪 1 東土壘断面図	55
第35図	東曲輪 1 土壘断面図	56
第36図	東堀切面図	56
第37図	鶴尾山城跡出土遺物（1）	59
第38図	鶴尾山城跡出土遺物（2）	61
第39図	鶴尾山城跡出土遺物（3）	63
第40図	主郭下段トレンチ断面図	66
第41図	基本的層序	67
第42図	H区北壁土層模式図	67
第43図	4区東壁土層図（1）	68
第44図	4区東壁土層図（2）	69
第45図	SK 1 実測図	70
第46図	遺構分布図	71
第47図	SK 2・SK 3 実測図	72
第48図	SK 4 実測図	73
第49図	ピット群遺構実測図	75
第50図	SX 1～3 実測図	77
第51図	深戸遺跡出土遺物（1） 土器	79
第52図	深戸遺跡出土遺物（2） 石器	81
第53図	深戸遺跡出土遺物（3） 打製石斧	82
第54図	深戸遺跡出土遺物（4） 打製石斧	83
第55図	深戸遺跡出土遺物（5） 山茶碗	85
第56図	深戸遺跡出土遺物（6） 山茶碗・瀬戸美濃陶器	87
第57図	深戸遺跡出土遺物（7） 瀬戸美濃陶器	89
第58図	深戸遺跡出土遺物（8） 瀬戸美濃陶器	91
第59図	深戸遺跡出土遺物（9） 瀬戸美濃陶磁器他	93
第60図	深戸遺跡出土遺物（10） 土製品・金属製品・銅錢	95
第61図	深戸遺跡出土遺物（11） 石製品	97
第62図	深戸遺跡出土遺物（12） 石製品	98

## 付表目次

第1表	鶴尾山城跡 出土遺物観察表	64
第2表	遺構内出土遺物一覧表（深戸遺跡）	72
第3表	層位・種別遺物出土点数（深戸遺跡）	78
第4表	深戸遺跡 出土銅錢一覧	96
第5表	深戸遺跡 石器計測表（1）	99
第6表	深戸遺跡 石器計測表（2）	100
第7表	深戸遺跡 石器計測表（3）	101
第8表	深戸遺跡 陶磁器観察表（1）	102
第9表	深戸遺跡 陶磁器観察表（2）	103
第10表	深戸遺跡 陶磁器（3）・土製品観察表	104
第11表	深戸遺跡 金属製品・石製品計測表	105

## 図版目次

巻頭図版 1～3	鶴尾山城跡 全景・遺構
巻頭図版 4	深戸遺跡 全景・遺物
図版 1～17	鶴尾山城跡 遺構
図版 19～22	鶴尾山城跡 遺物
図版 23～27	深戸遺跡 遺構
図版 29～36	深戸遺跡 遺物

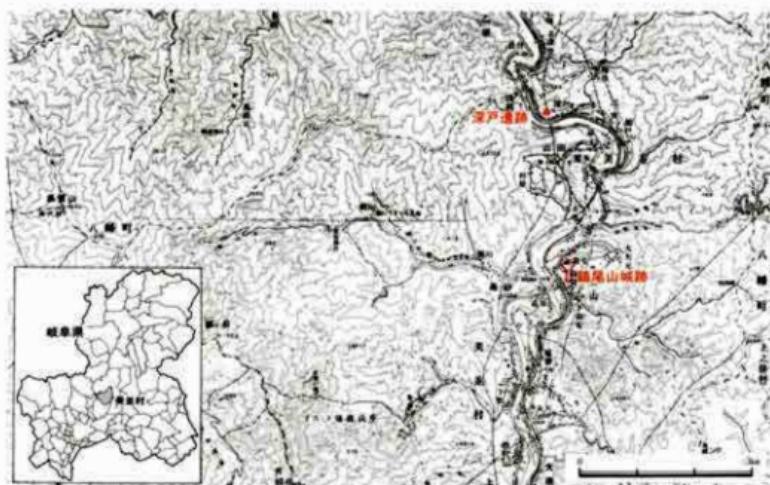
## 第1章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

遺跡の所在する岐阜県郡上郡美並村は標高600m前後の定高性の山なみの中にあって、奥美濃とよばれる郡上郡の南端に位置する山村である。村のはば中央部を長良川が北から南へ蛇行しながら流れ、周囲の山から谷川が合流し、それらに沿って河岸段丘が形成され、集落と耕地が集中している。また、南北の標高差が大きく、国道沿いの木尾から深戸新田まで約14.5kmで70mある。

鶴尾山城跡は美並村大字白山字城下・上野・上町並・弁在に所在する。美並村のはば中央部に位置し、長良川左岸の標高231mの三方に尾根を張った独立した山の上に立地する。麓の国道との標高差は約80m、山の下にある林廣院（城館推定地）との標高差は約60mである。長良川の対岸の山の尾根（標高299m）には高原城跡が立地する。

深戸遺跡は美並村大字三戸字ツクゼ、坂東海津、石原、下ヤに所在する。美並村の北端の深戸地区に位置し、長良川左岸の標高448mの山の山麓緩斜面上に立地する。遺跡の南北の標高差は18mである。



第1図 遺跡位置図

## 第2節 歴史的環境

鶴尾山城跡・深戸遺跡の位置する長良川上流地域の歴史（埋蔵文化財）については、以前はほとんど明らかになっていたなかった。しかし、ここ数年来の圃場整備事業や今回の東海北陸自動車道建設に伴う発掘調査において、遺跡の状況が明らかになりつつある。

以下、鶴尾山城跡と深戸遺跡との関係上、歴史時代以降を中心に当地域の歴史的環境について概観してみたい。

### 古代以前

美並村においては数多くの遺跡の存在が明らかになっているが、大部分の遺跡が表掲による断片的資料しかないのが現状である。縄文時代早期・前期に属する遺跡として宮原・吉原・田代遺跡、中期に属する遺跡として崖田・松本・淡野倉・稻葉遺跡があげられる。このうち、稻葉遺跡は調査によって、中期後半から後期にかけての堅穴住居址12基、土壙18基が検出されている（註1）。後期に属する遺跡としては松本・石亀社・町並・崖田・淡野倉遺跡、晚期に属する遺跡としては多量の土器が出土した石亀社遺跡がある。なお、弥生時代に属する確実な遺跡は確認されていない。

古墳時代の遺跡としては、6世紀後半と考えられる釜石古墳が1基存在する。直径10mくらいの円墳と考えられ、石室は長方形でコの字形の土壙の上に構築されたものである（註2）。

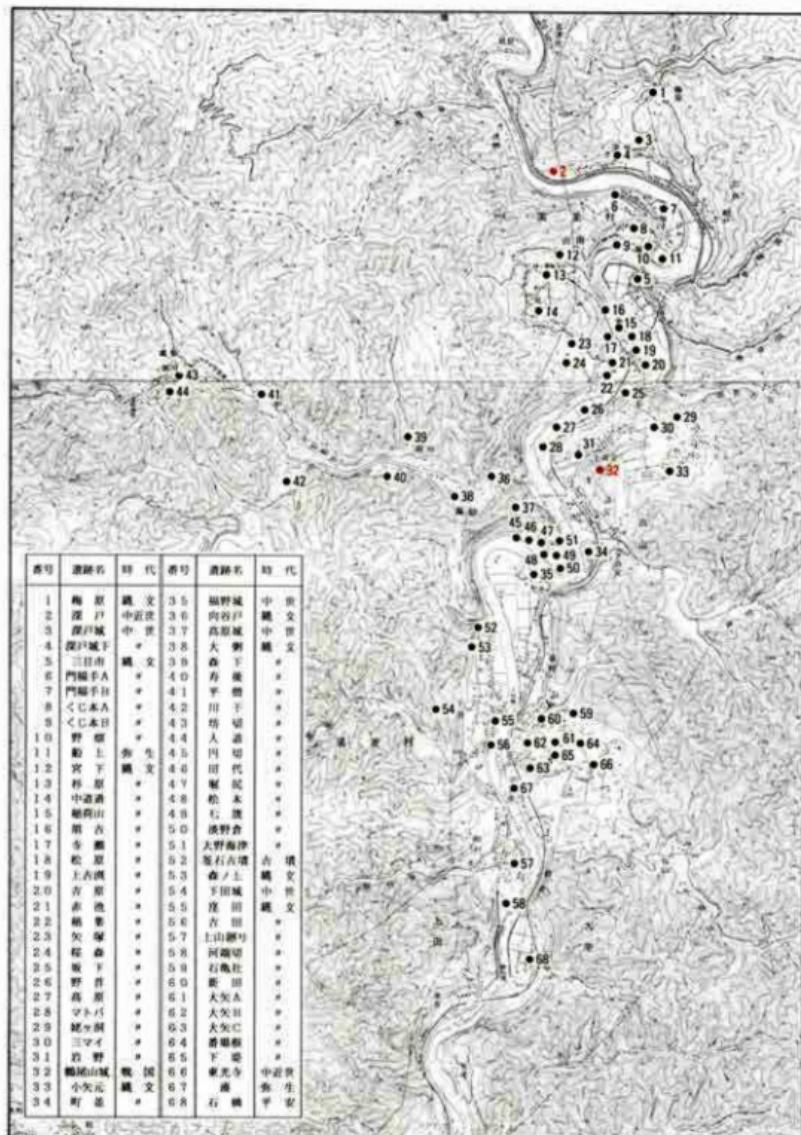
### 古代

律令制に基づき美濃国務義（牛義・武義）郡に編入される。大化の改新後、牛義郡国造であった身毛郡君氏が郡領として長良川と支流の津保川の氾濫原盆地（現美濃市・閇市）に本拠をもち、長良川に沿って上流に移住開墾が行なわれたものであろう。

郡上郡の始まりは、文徳実録に「齊衡二年間四月巳卯朔丁酉分美濃國多芸武義兩郡為多芸石津武義群上凡四郡」とあり、齊衡2年（855）からである。群上郡は倭名類聚抄によると、群上（郡上）郷・安都郷・和良郷・栗原郷の4つの郷に分かれていた。美並村は群上郷に含まれる（註3）。この時代の遺跡としては石橋遺跡があげられる。住居跡が発見され、須恵器がまとまって出土した記録がある（註4）。

### 中世

この時代になると、美並村は摂関家（近衛家）領（のちに実相院領）の吉田荘に組み込まれていたと考えられる。また、郡上郡北部では、鷺見氏が鷺見郷（現高鷺村）の地頭として力をもち、向鷺見城を本拠に勢力をのばしていた。また、承久3年（1221）、下總国（千葉県）に勢力を張っていた東氏が山田荘（現大和町とその周辺）を加領されて大和町刻に阿千葉城を築き、勢力をのばしたとされる（註5）。



第2図 周辺道路分布図 (S=1:50,000)

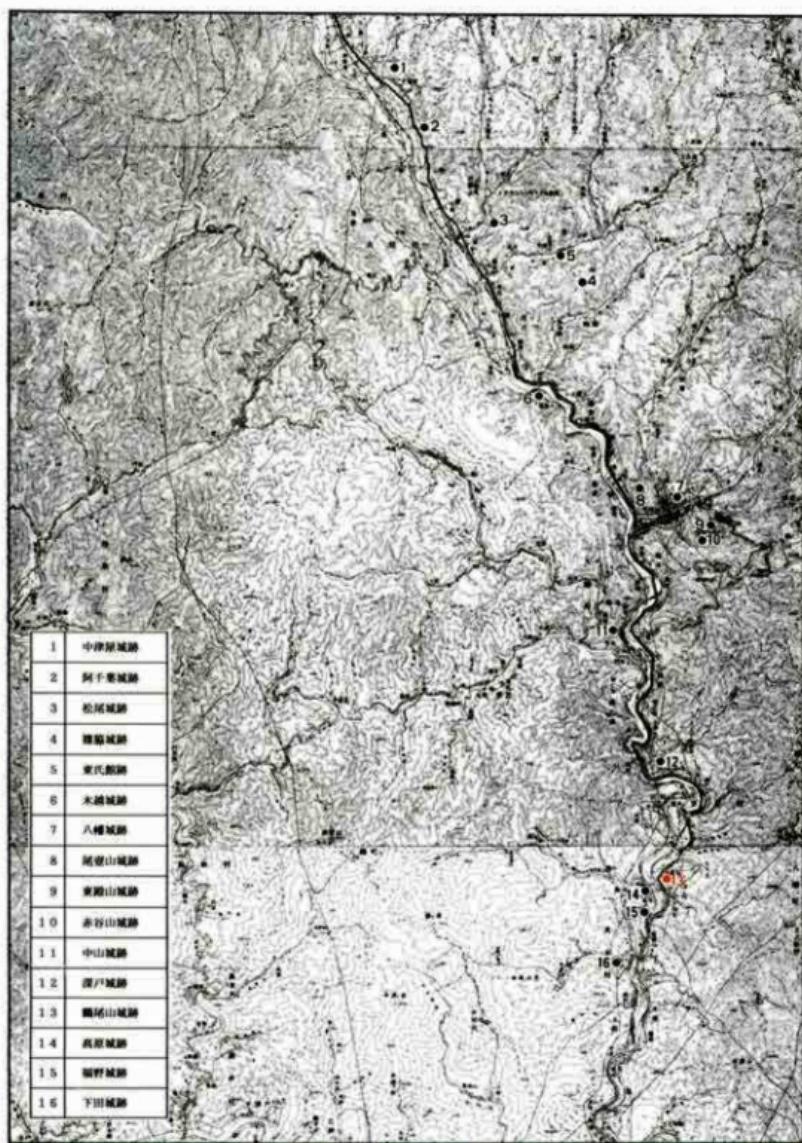
### 鶴尾山城をめぐる歴史的環境

鶴尾山城について記載された中世の文書は今のところ見つかってはいないが、江戸時代に書かれた遠藤家御先祖書(註6)・遠藤記(註7)・郡上古日記(註8)・濃北一覧(註9)等から鶴尾山城跡について知ることができる。以下、これらの文献をもとにして鶴尾山城跡をめぐる歴史的環境を記しておきたい。

14世紀中頃になると、東氏(氏村)は北の鷺見氏に備えて、畝状空堀群で有名な篠脇城(大和町)を築き、阿千葉城(大和町)から移った。室町時代になると鷺見氏の勢力は衰え、郡上では東氏が全盛をきわめる。東氏は室町幕府に仕える一方、郡上に勢力をのばし、7代目益之は下川筋(現美並村)・氣良莊(明方筋・現八幡町と明宝村)・和良筋(現八幡町と和良村)を手中に入れる。鷺見氏や長瀧寺に対する押さえとして二日町城(白鳥町)を築き、氣良・和良・下川筋の押さえとして赤谷山城(八幡町)を築いた。9代目常縁は古今伝授で有名であるが、応仁の乱に際して、美濃守護代齊藤妙椿に一時篠脇城を落とされる。戦国時代に入ると東氏の勢力にかけりが見られる。郡内に散在する東氏の支族が力を持つとともに、下川筋へ齊藤氏の勢力がのび、越前の朝倉氏も郡上へ勢力をのばし始める。天文9年(1541)・天文10年(1542)朝倉氏が郡上へ米襲し、篠脇城に大きな被害を与えた。そのため、11代常慶は東殿山城(八幡町)を築き、篠脇城から移った。

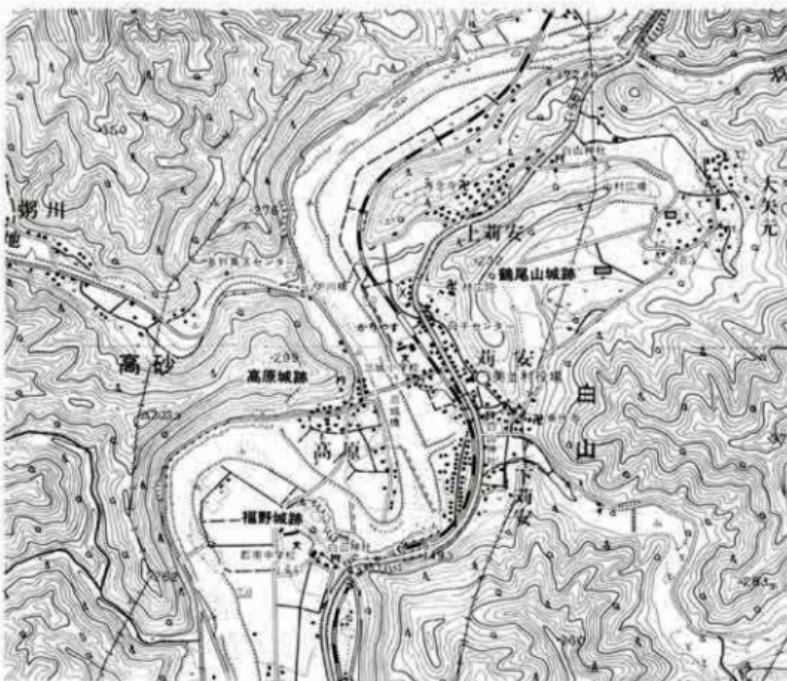
その後、朝倉氏との戦いで功があつた木越城の遠藤胤縁の弟盛数(東氏の支族)は、常慶の命で福野城(美並村福野)にあって下川筋に力をもっていた河合氏を打倒するため、天文21年(1552)に福野城を攻め、河合氏を倒した。盛数は下川筋に領地を得て、河合氏攻めの陣地とした鶴尾山(美並村薺安)に鶴尾山城を築いた。鶴尾山城は東殿山城の南の押さえとしての支城の役割を果たしたと考えられる。永禄2年(1559)東氏によって盛数の兄胤縁が殺されると、盛数は宗家を倒すため兵を挙げ、東殿山城を攻め、東氏を滅ぼした。盛数は八幡山に城を築き、鶴尾山城から移った。盛数が八幡城に移ると、鶴尾山城は下田城主(美並村下田)稲葉氏の家臣名和氏が城主となる。永禄12年(1569)名和氏が滅ぶと、遠藤氏の家臣粥川氏が鶴尾山城となり、八幡城の支城としての役割を果たす。2代遠藤慶隆の家臣で功があつた粥川甚右衛門がなくなると、林廣院が建てられ、鶴尾山城は廢城になったとされる。

その後、八幡城の遠藤氏は郡上郡全域に力をのばしたが、織田信長・武田信玄・豊臣秀吉等の大勢力の中で揺れ動く。信長に従って郡上を支配したものの、信長の死後、柴田勝家に属し秀吉に立花山(美濃市)で反抗したため、天正16年(1588)郡上の所領を没収され、加茂郡小原へ転封される。遠藤氏の後、稲葉氏が八幡城に入り、中山城(八幡町)を支城にした。しかし、関ヶ原の戦いで、遠藤氏は東軍につき、八幡城を攻め、八幡城に復帰した。徳川家康が江戸幕府を開くと、郡上藩は遠藤氏の所領になった。

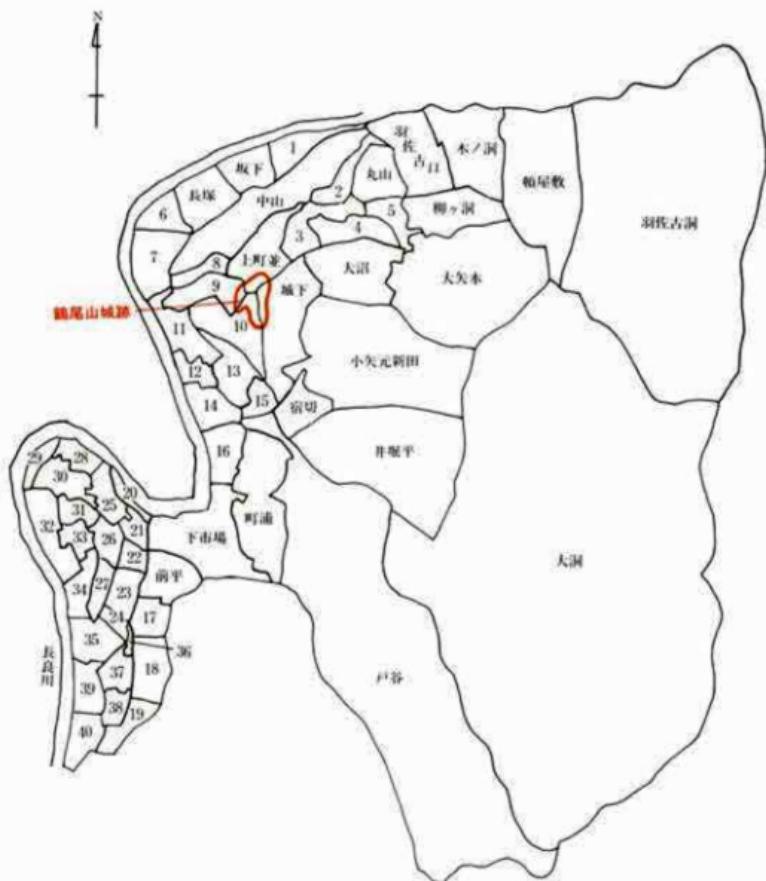
第3図 城跡分布図 ( $S = 1:150,000$ )

また、鶴尾山城周辺には前述の福野城、下田城の他に高原城がある。高原城は天文年間に粥川氏（のちの鶴尾山城主）によって築かれたとされる（註10）。深戸には天文年間に飼取氏の深戸城があったとされる（註11）。

鶴尾山周辺は、字図（第5図）によると、中市場・下市場といふ「市」のつく字名、町並・上町並などの美並村で唯一「町」がつく字名がある。明和2年（1765）の下田文書には巡檢使が下荷安で泊まったことが記され、郡上街道の中で大きい集落であったと考えられる。郡上街道は鶴尾山の南側を通り、大矢元から羽佐古谷へぬけていた。江戸時代の記録ではあるが、鶴尾山周辺に古くから集落があったことがわかる。



第4図 鶴尾山城跡周辺地形図 (S = 1:20,000)



1 佐本	11 委下	21 城山	31 口新羽根
2 火ウチ	12 中通	22 穴口新田	32 新羽根
3 森本	13 大坪	23 堀内	33 西通
4 三マイ	14 中市場	24 野木	34 一本木
5 織ヶ洞	15 宮会津	25 堀平	35 中切
6 高原	16 町並	26 穴口	36 福
7 尾崎	17 天狗岩	27 大道	37 街道東
8 西ヶ野	18 野水平	28 夜懸	38 山懸
9 弁在	19 道急	29 西林	39 下切
10 上野	20 楼山	30 貴新羽根	40 野尻

第5図 鶴尾山城跡周辺の字図 (美並村大字白山)

## 第2章 調査の目的と方法

### 第1節 調査に至る経過

鶴尾山城跡・深戸遺跡は東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査の一貫として、平成3年度に発掘調査を実施した。

東海北陸自動車道は、愛知県一宮市において名神高速道路から分岐し、岐阜県を南北に貫き富山県小矢部市で北陸自動車道に連絡する延長185kmの高速自動車道である。この自動車道は、東海地域と北陸地域間の輸送時間の大幅短縮、交通緩和、輸送コストの低減を通じて、生産物の市場拡大など経済の活性化等を目的として計画され、昭和61年3月に岐阜各務原ICから美濃IC間、平成4年3月に福光ICから小矢部砺波JCT間が開通した。

東海北陸自動車道に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、岐阜県内においては昭和56年度から実施され、杉ヶ洞古墳、重竹遺跡（1）櫻ノ木遺跡（3）上巾上日遺跡（2）等4遺跡が岐阜県教育委員会と地元市町村教育委員会で実施されている。岐阜県教育委員会では、平成3年度より



第6図 東海北陸自動車道と文化財

国・県事業に伴う埋蔵文化財発掘調査等について財団法人岐阜県文化財保護センターを設立し対応することとし、平成3年度から当文化財保護センターが引き続いて実施している。

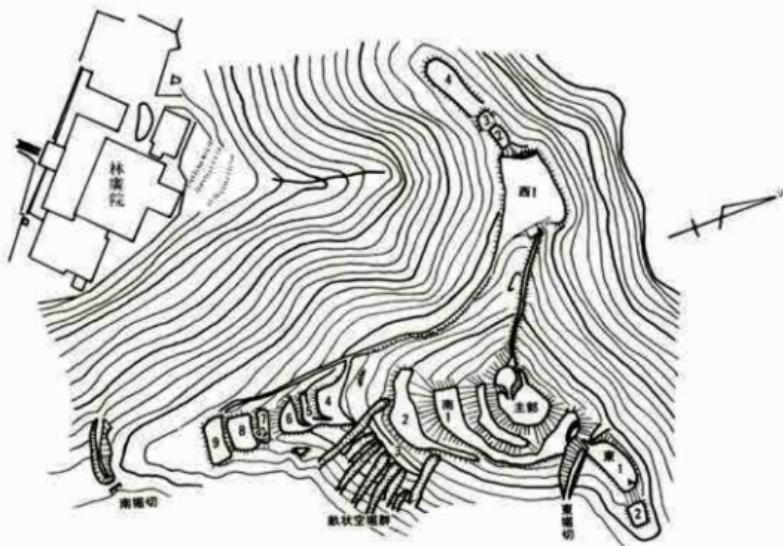
日本道路公团名古屋建設局美濃工事事務所管内の美濃ICから八幡町までの延長31.5km区間においては、昭和56年度に岐阜県教育委員会が実施した遺跡分布調査で9遺跡が路線内に含まれることが判明している。平成3年度は、美並村の深戸遺跡（7）5,000m<sup>2</sup>、宮下遺跡（6）600m<sup>2</sup>、野首遺跡（5）250m<sup>2</sup>、八幡町の赤谷遺跡（8）1,000m<sup>2</sup>の4遺跡6,850m<sup>2</sup>が発掘調査の対象となり、平成3年4月1日付で岐阜県教育委員会と日本道路公团名古屋建設局が委託契約を結び、同日付、当文化財保護センターが再委託を受け調査を開始した。しかし、同年8月、日本道路公团名古屋建設局から工程変更に伴う美並ICの建設工事の早期化の協議を受け、

深戸遺跡が当初の予定の5,000m<sup>2</sup>まで遺跡の広がりがみられないことを考慮し、美並IC建設予定地内に所在する鶴尾山城跡（4）の発掘調査を赤谷遺跡・深戸遺跡の一部に換えて実施することとした。赤谷遺跡については平成4年度の調査とし、野首遺跡については高架設計となり遺跡の大部分が破壊を受けないことが判明し、工事に際して立ち会いすることとした。このうち、宮下遺跡については平成3年3月31日に発掘調査報告書を刊行している。なお、平成4年度は赤谷遺跡、西乙原遺跡（9）、勝更白山神社周辺遺跡（10）の発掘調査を実施した。

## 第2節 鶴尾山城跡の発掘調査の経過

現地での発掘調査は平成3年10月8日 начиная, 平成4年3月5日に終了した。現地での発掘調査に入る前に縄張り調査と地形測量を行い、国立歴史民俗博物館考古学部門助手の千田嘉博氏に縄張りの確認と発掘調査の方法についての指導を受けた。

縄張り調査から、頂上の主郭部（上下2段）を中心に南へ9つの曲輪と堀切、東へ2つの曲輪と堀切、西へ4つの曲輪が確認でき、東南斜面に敵状空櫓群も確認できた。当初、樹木の伐採が行われておらず、また調査が冬期に及ぶことからトレント発掘を考えていたが、城跡のはとんどが調査区域の範囲内であること、地山までの土層が薄いことから、全面発掘に切り替え



第7図 鶴尾山城跡縄張り図

て行うこととした。また、曲輪と曲輪の間の斜面部分もできるかぎり調査することにした。遺物の注記には鶴尾山城跡の頭文字をとったTYの略語を用いた。

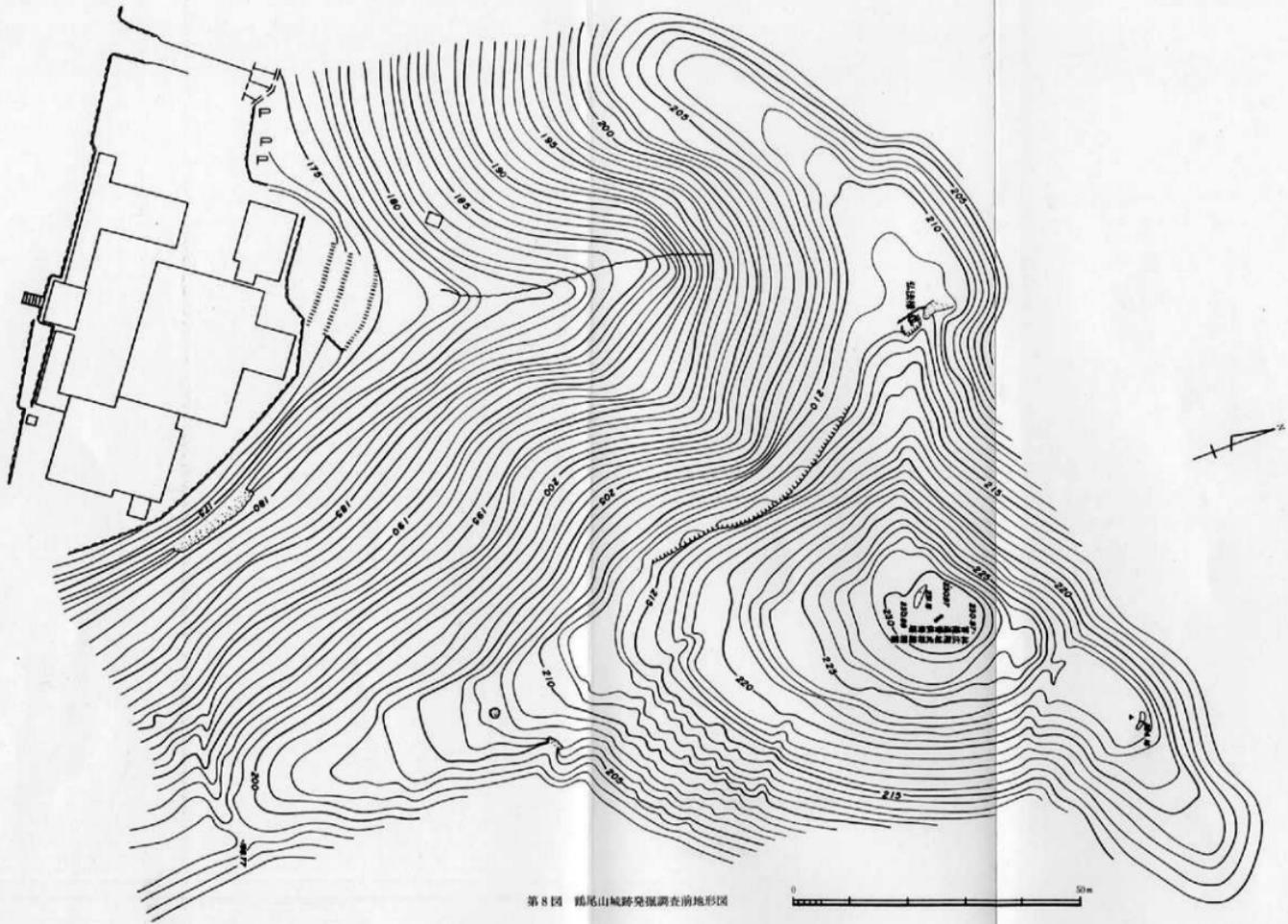
調査は伐採業者の伐採計画に合わせて行うことになり、まず西曲輪から開始した。西曲輪1は曲輪のなかでいちばん広い面積を持ち、 $4 \times 4\text{ m}$ のグリッドを設定して第1層から注意深く掘り下げていった。10~20cmで地山層になり、瀬戸・美濃の大窯期の小杯（鶴尾山城跡唯一の完形品）や擂鉢・皿の破片が出土した。また、十数個の礎石と考えられる河原石（径40~50cm）を検出し、礎石建物の存在が確認された。ただし、西曲輪1の東側に弘法様を祭るための石垣が組んでおり、西曲輪1にあった礎石が使われたと考えられる。西曲輪1の西端に土墨を確認した。西曲輪2~4は、1m幅のトレーナーを設定して、その後両側に広げ掘り下げたが、遺構は確認されなかった。

10月下旬から主郭部と南曲輪1の掘り下げを開始した。主郭部は上下2段に分かれ、上段から集石遺構が2基とピット、上段から下段の間に石垣状遺構、下段の曲輪の端に並んだ7個の河原石（径40~50cm）を検出した。また、虎口北側の土墨を立ち割ったところ、刻名入りの有耳壺が出土した。南曲輪1は主郭部を取り巻く帶曲輪になっており、東側で土墨を確認した。

11月上旬から東曲輪1、11月中旬から南曲輪5~9の掘り下げを開始したが、遺物の出土は少なく、遺構も検出されなかった。また、11月中に伐採の80%が終了したが、伐採した樹木の搬出や稚木の整理に手間取り、調査は難行した。12月に入り、南曲輪2~4の掘り下げを開始した。南曲輪2からは、数個の河原石（径30~50cm）が検出され、礎石建物の存在が確認された。南曲輪4からも3個の河原石（径30~40cm）が検出された。

1月になり、東南斜面の竪状空堀群の掘り下げを開始した。南曲輪2につながる外側2本の竪堀の内側に南曲輪3の下に6本の竪堀が確認された。1月下旬に高田徹氏、中井均氏、須田勉氏、中島勝国氏に現地で指導を受けた。2月に入り、南堀切や土墨の掘り下げと土墨の断ち割りを行なった。また、主郭部の西側斜面は調査期間とのかかわりから全体を調査することができなくなり、縦土墨に3ヶ所トレーナーを設定して掘り下げた。その後、全体を精査し、2月21日にヘリコプターによる航空測量を実施した。2月24日・26日に美並村立吉田小学校5・6年生と同三城小学校5年生約90名の発掘体験学習を実施した。さらに地山にトレーナーを何本か入れ、曲輪の築成の様子を調査した。

以上、調査の概略を述べたが、樹木の伐採が計画通りに進まなかったこと、排土を調査区域外に落とさなければならないことで非常に苦労しての調査であった。しかし、暖冬で晴天の日が多くなったことで、予定どおり平成4年3月1日に調査納め式及び現地説明会を行ない、3月2~5日に若干の補足調査をし現地調査を終了した。



第8図 雷鳴山城跡発掘調査前地形図

### 第3節 深戸遺跡の発掘調査の経過

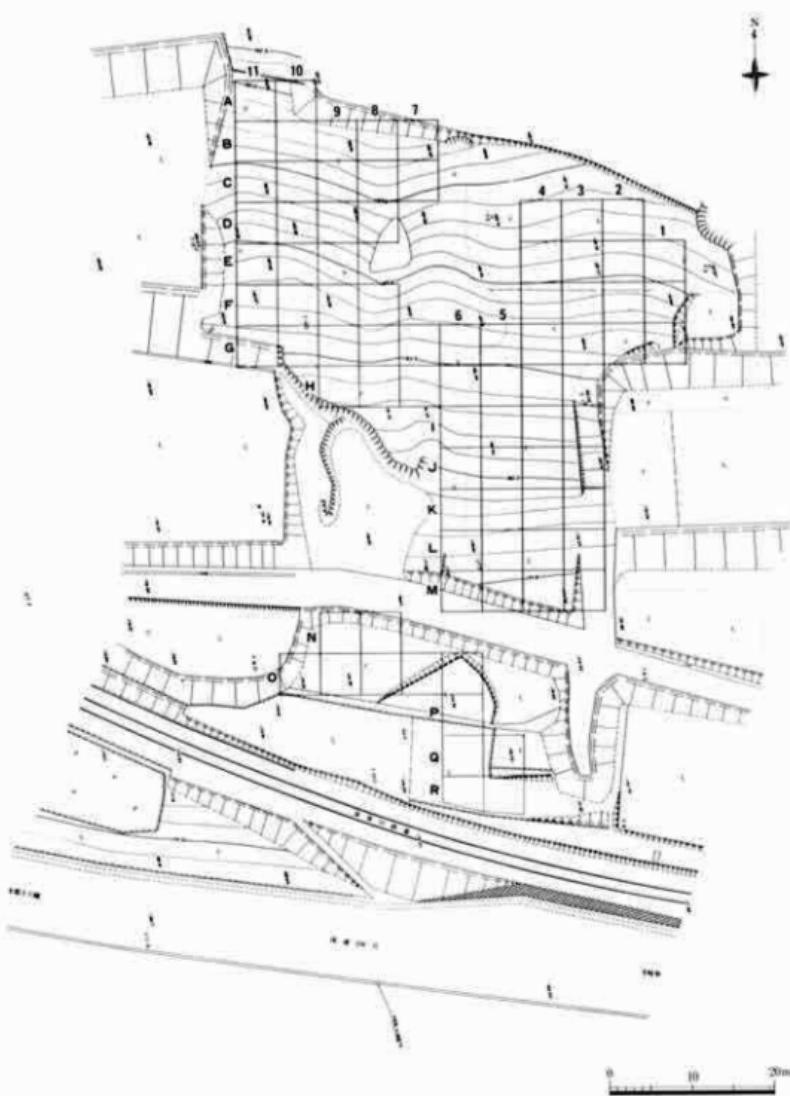
現地での発掘調査は平成3年5月1日から開始し、平成4年2月7日に終了した。調査区域は畑、道路、山林に利用されており斜面状に広がっていた。トレント掘りの調査の結果、山林部分に遺跡の広がりが見られないこと、圃場整備事業により一部擾乱を受けていることから、当初の調査面積を縮小して行なうこととした。グリッドは磁北に主軸を合わせ5m四方として、北から南へA～R、東から西へ1～11の呼称を付してグリッドナンバーとした。排土は山林部分や圃場整備による擾乱部分に置くことにした。なお、遺物の注記には深戸遺跡の頭文字をとつてFDの略語を用いた。

調査は、土層の状況や排土等を考慮し、D～M～3～5区からグリッドごとに掘り下げるにした。まず、重機によって表土（第I層耕作土）を20cm程掘り下げ、その後、土層観察用の畦を確認しながら、注意深く掘り下げていった。遺物は第I層下部から出土し始めた。K～M～3～5区の黒色土（第II層）から、中近世陶磁器・土錘等の遺物が多数出土し、褐色土（第III層）上面から土壤やビット等の遺構が確認された。しかし、他のグリッドからは遺物の出土は少量あったものの遺構は確認できなかった。

6月に入り、D～G～1・2区と道路下のN～P区の掘り下げを開始した。D～G～1・2区は盛土がなされており圃場整備の際に擾乱されたものと考えられ、地山まで深く、黒色土から打製石斧や少量の繩文土器、山茶碗等の遺物が出土した。N～P区は30cm程で地山まで達し、中近世陶磁器等の遺物が出土した。

7月末から8～11区の杭打ちを行ない、第I層から掘り下げを開始した。深いところで地山まで2m近くあり、排土等で苦しめられ調査は難行した。8～11区では遺物の出土はほとんどなく、遺構も確認できなかった。第I層下部から大きな岩がいくつか現れ、崖崩れによる堆積とも考えられる。また、東西南北に残した土層観察用の畦の掘り下げも開始した。

9月末から11月初めにかけて、宮下遺跡の発掘調査が継続中であること、鶴尾山城跡の発掘調査も始まることで深戸遺跡の調査を一時中断した。11月は検出した遺構のSK1～3、SX1～3、ビット1～45の精査・記録に入った。12月に入り、6～7区に置いた排土を重機によって除去し、第I層から掘り下げを行った。1月にはQ・R区の掘り下げを行ったが、多数の山茶碗の細片が出土し、SK4を検出した。2月に入り、発掘完了後の空撮のため最後の清掃作業を行い、平成4年2月6日に空撮を実施し、2月7日に若干の補足調査を行い、現地調査を終了した。



第9図 深戸道路地形図及びグリッド配置図

## 第3章 鶴尾山城跡の調査

### 第1節 基本的層序

本調査区域は、調査前は樹木に覆われていて、ほぼ安定した状況で堆積していた。全体的に非常に薄い堆積である。本遺跡における基本的層序は下記の通りである。

#### 第1層（表土）

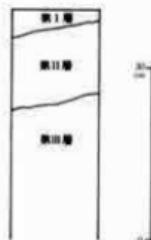
腐植土であり、黒褐色土に木の根や葉等が腐植して混入している。非常に軟質である。厚さ2~5cmを測る。

#### 第2層（黒色土）

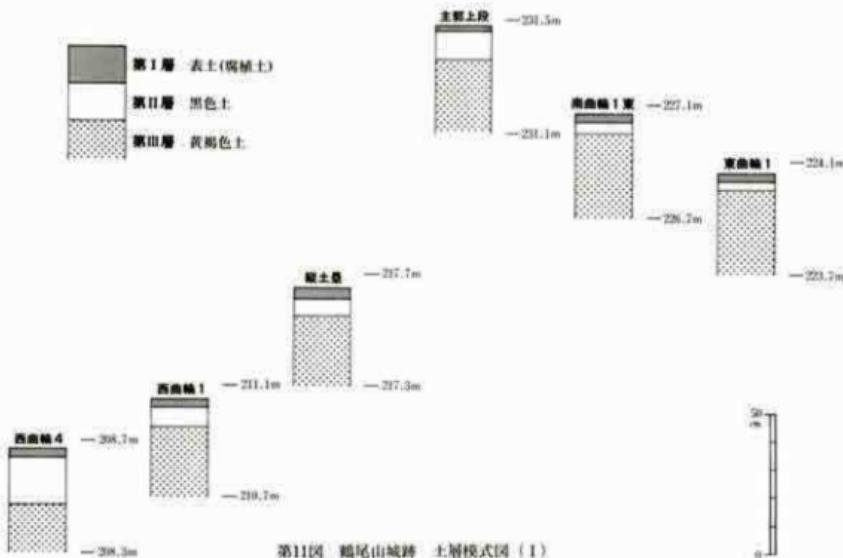
黒色または暗褐色で、粘性がある。混入するものではなく、厚さ2~15cmを測る。第3層から遺物が出土している。

#### 第3層（黄褐色土）

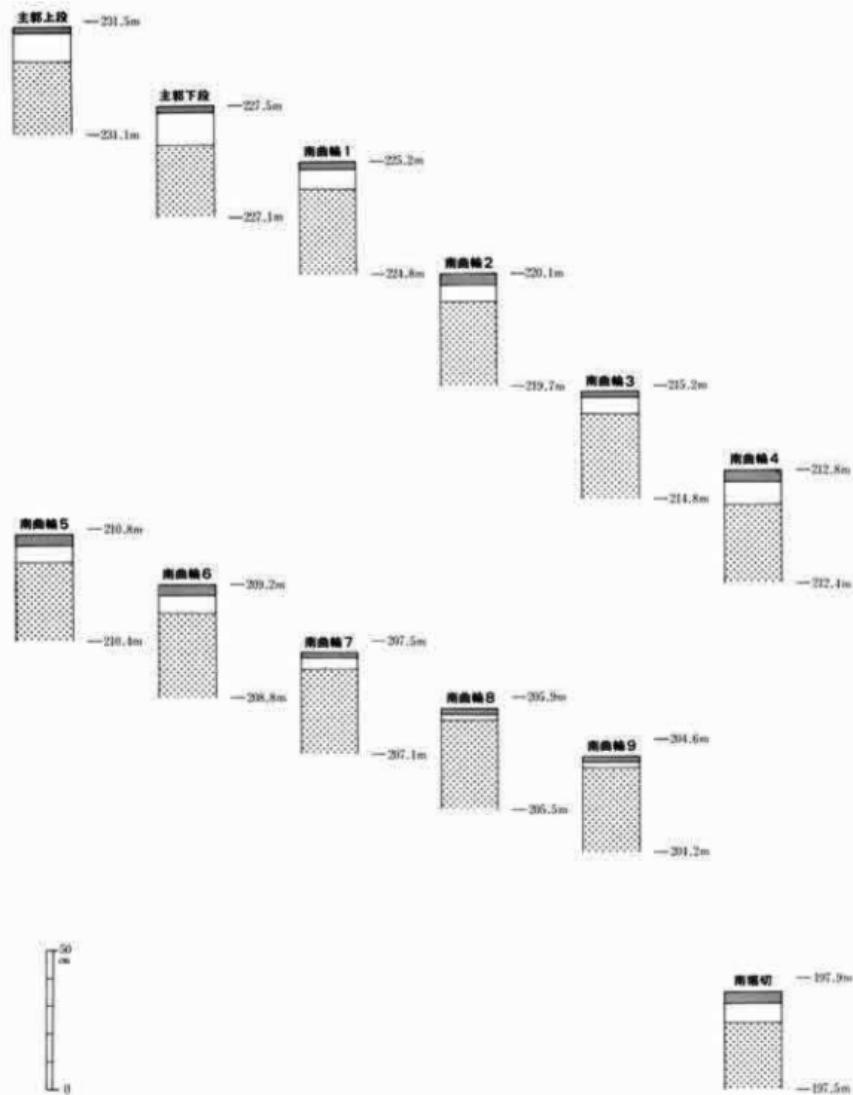
この城跡の地山層と考えられる。第3層上面から遺構を検出したが、礎石等は第1層から見えていたものもあった。城構築のために再堆積の部分もあるが視覚的に分層することができなかった。



第10図 基本的層序



第11図 鶴尾山城跡 土層模式図(1)



第12図 鶴尾山城跡 土層模式図（2）

## 第2節 造 構

### 1. 城の構造

鶴尾山城跡は鶴尾山と呼称される標高231mの三方に尾根を張った独立丘陵に立地する。山頂と平地の集落との標高差約80m、鶴尾山の西側山麓の林廣院（城館推定地）との標高差約60mを測る。前述したように、現国道は鶴尾山の山麓を西から北へと走っているが、江戸期の郡上街道は鶴尾山の山麓を南から東へ通っており、鶴尾山城は南から東南に向いて構築されたものと考えられる。

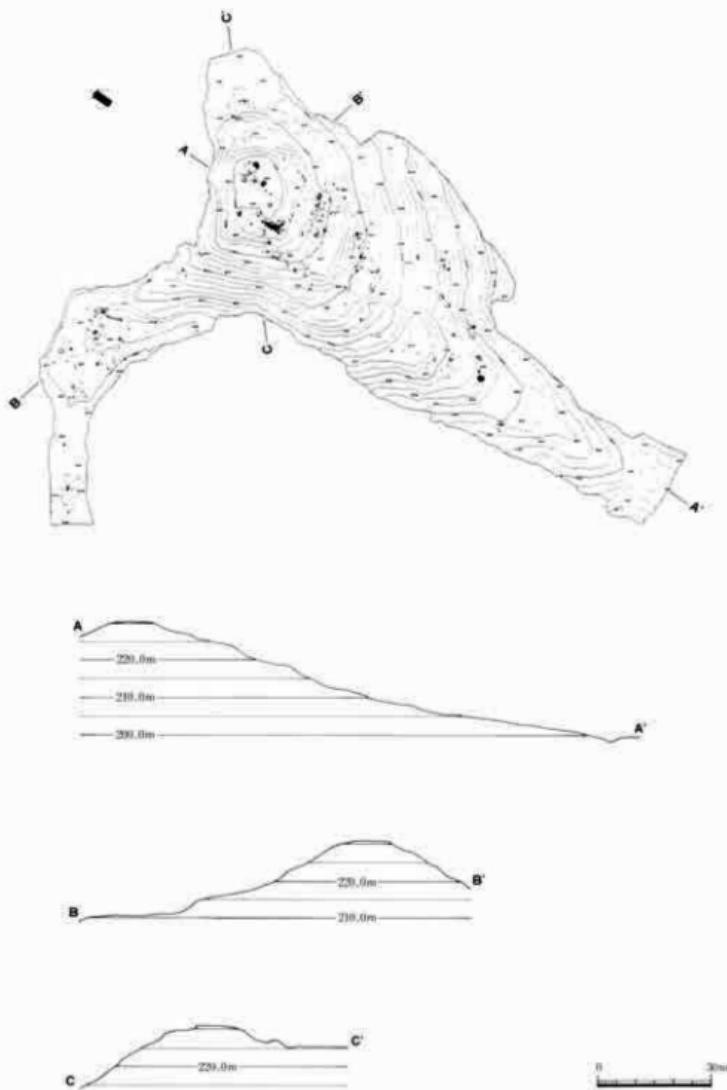
鶴尾山城は、山頂部に2段になった主郭部が造られ、その主郭部を取り巻くように南曲輪1が造られている。曲輪は、三方の尾根の南側に南曲輪2～9、西側に西曲輪1～4、東側に東曲輪1～2が階段状に造られている。防衛施設としては、東南斜面に8本の敵状空堀群、南曲輪9から下りたところに南堀切、主郭から西曲輪1に至る斜面の北端に櫛土塁、主郭虎口の北端・西曲輪1の西端、南曲輪1の東端、東曲輪1の西端に土塁、南曲輪1と東曲輪1との間に東堀切が造られている（第14図参照）。鶴尾山の北側は急斜面になっており、三方の尾根がある鶴尾山の立地条件を生かして構築された、規模は小さいが防衛機能の高い構成であるといえる。

城館の推定地である西側山麓の林廣院からの通路は、南堀切の南側と西曲輪4に至る2本が考えられる。また、林廣院裏手の山の中腹に現在も使われている湧き水があり、南曲輪8から下りれるようになっている。西曲輪1と南曲輪4、南曲輪4と南曲輪9は通路でつながっている。推定される城跡内の通路は第14図に点線で示した。

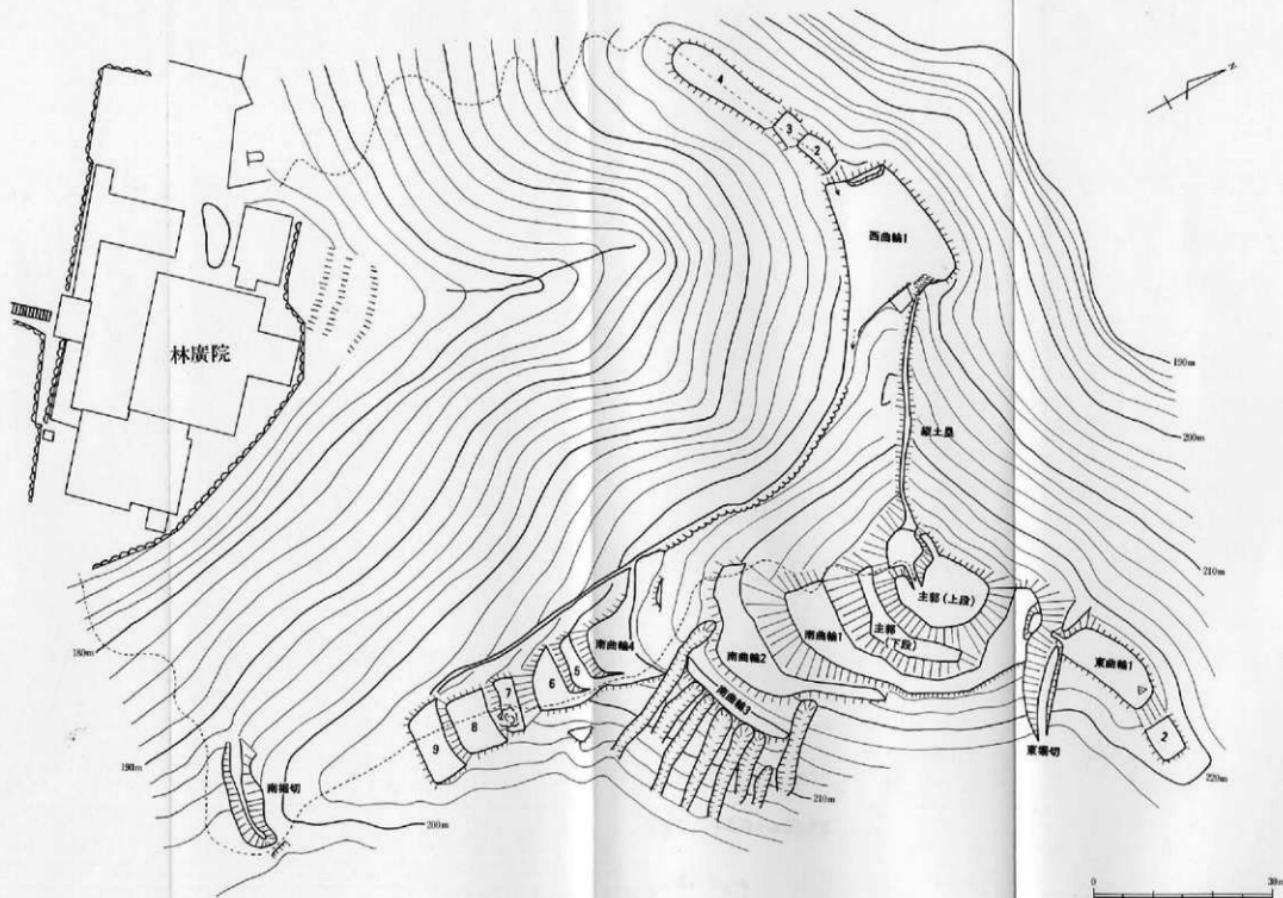
地形測量図によると、主郭上段は南北13m、東西12mを測り、西側に樹形虎口が造られている。西曲輪1は鶴尾山城で最も広い曲輪で南北15m、東西21mの長方形を呈する。主郭上段と西曲輪1との標高差は約20m、主郭上段と西曲輪4との標高差は約23m、主郭上段と東曲輪1との標高差は約7m、主郭上段と南曲輪9との標高差は約27m、主郭上段と南堀切の上の土橋との標高差は約32mを測る。

今回の調査範囲は鶴尾山城跡のほぼ全城であるが、南堀切の一部、東曲輪1の一部、東曲輪2は含まれていない。また、調査期間の都合で主郭部から西曲輪1への斜面は3ヶ所トレンチを入れた部分を除いたほかは調査できなかった（第15図参照）。

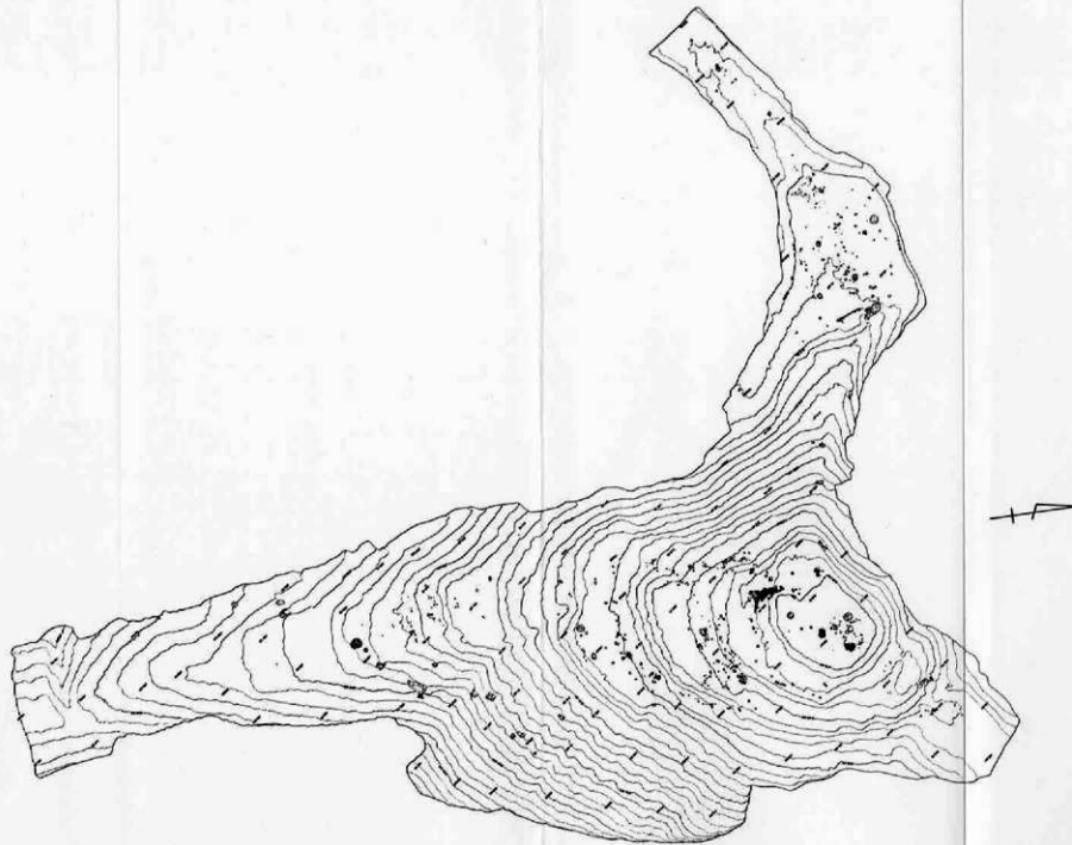
以下、各曲輪ごとにその内容を報告する。



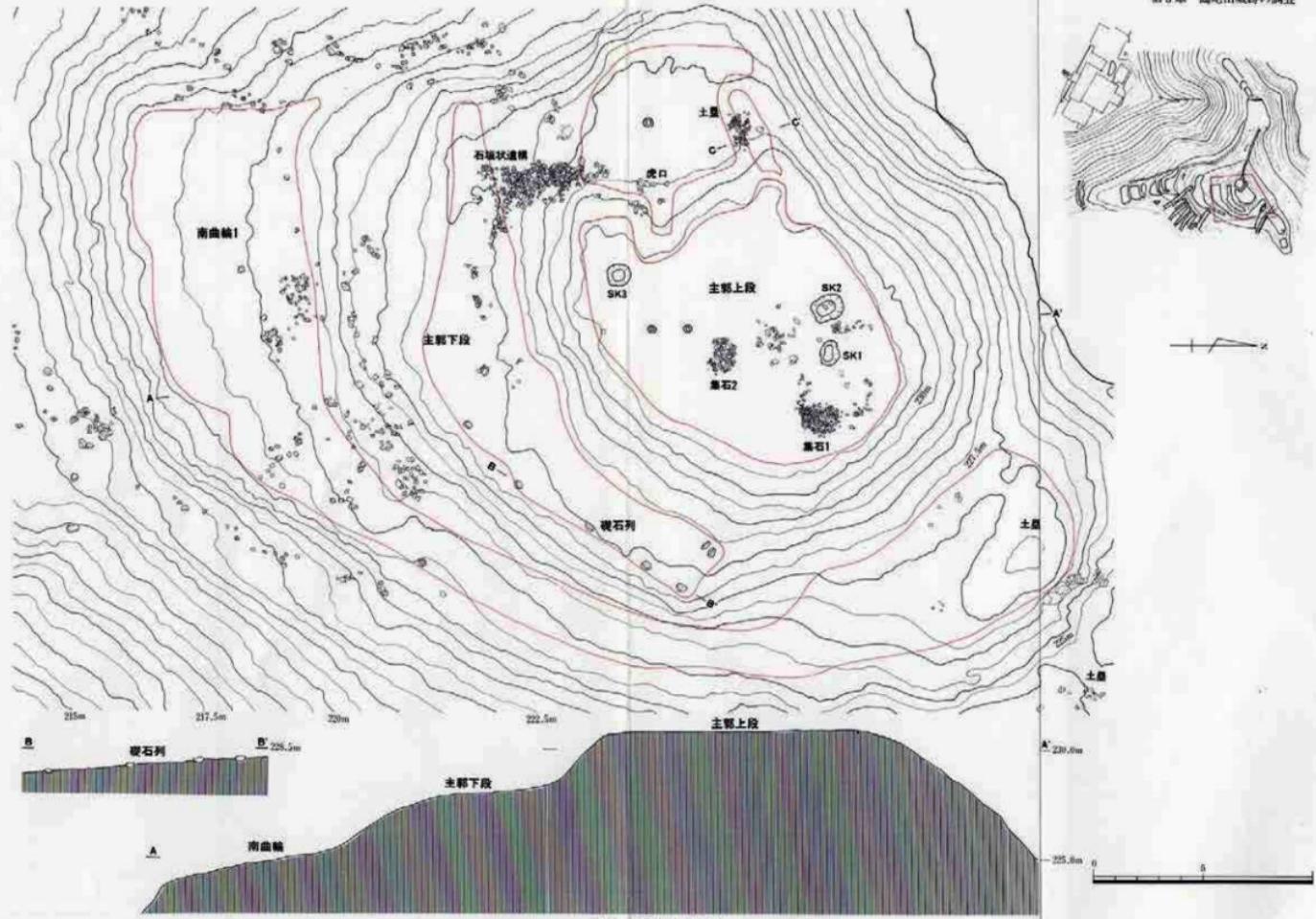
第13図 鹿尾山城跡横断図・縦断図



第14図 鶴尾山城跡網張り図



第15図 鶴尾山城跡調査後地形図



第168図 [主郭・南曲輪]

## 2. 主郭部（第16図）

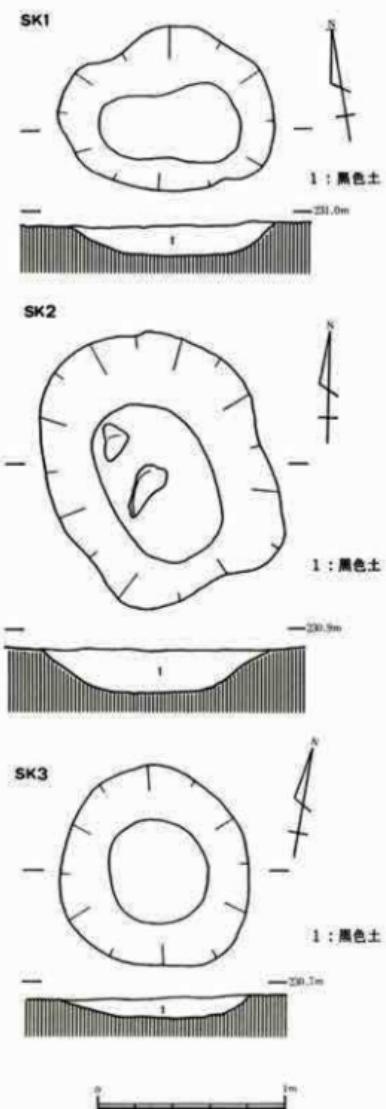
主郭部は鶴尾山の山頂の鶴尾山城跡の中で最も高所に位置する上下2段に分かれた曲輪である。主郭部の北側は急斜面になっており、西側は約20m下に西曲輪1、南側は階段状の曲輪が並び、東側は約7mに東曲輪1がある。主郭上段からの眺望はよく、高原城跡・福野城跡・平地の集落がよく見渡せる。主郭上段の曲輪は、山頂部分を削り、平坦部を広げて造成された曲輪である。調査前には中央部に林廣院の供養塔が建てられていた。南北約13m、東西約12m、面積約122m<sup>2</sup>を測る。主郭上段の西側の一段下がった所に虎口部分がある。虎口は樹形虎口になっている。面積は約42m<sup>2</sup>である。主郭下段は主郭上段の南斜面を削り、南側に盛り土して造成された曲輪で、虎口部分とつながっている。南北約5m、東西約25mの細長い曲輪で、面積約80m<sup>2</sup>である。主郭上段の標高は曲輪の中央部で231m、虎口部分は229m。下段の中央部で227.9mである。主郭上段の南端と主郭下段の北端との比高は2.3mである。主郭上段からは、土壙3基、集石造構2基、柱穴と考えられるピットを検出した。虎口部分の北側には土塁が造られ、虎口から下段に至る通路から石垣状の造構を検出した。また、主郭下段からは径40~50cmの河原石を7個検出した。

出土した遺物は、鶴尾山城跡の中で最も多く、破片数にして上段で60点、下段で45点出土した。主な遺物は、上段では天目茶碗・皿類・染め付け皿・擂鉢・有耳壺・常滑製品・土師皿・銅鏡等で、下段では山茶碗・天目茶碗・皿類・擂鉢・有耳壺・土師皿等が出土した。

以下、主な遺構について報告していく。

## 虎口（第16図）

主郭上段への通路は主郭下段の西側からやや上に登り、平坦な虎口部分に出る。虎口部分は北側が土塁によって囲まれている。虎口は樹形虎口で、1折れで主郭上段に至る。虎口の幅は1~1.2mである。虎口の平坦部と主郭上段との比高は1.8mである。この虎口部分を、主郭下段からのつながりととらえるか、虎口空間ととらえるかは今後の検討を要する。構築年代は規模と形から天正年間（1573~1591）の前半と推定される（註12）。虎口部分からは北側の土塁とピットが検出されたが、その性格等については後述する。



第17図 主郭上段 SK 1~3

**SK 1 (第17図)**

主郭上段の中央北で第III層上面から検出された。長径115cm、短径90cmの不整形な長方形を呈し、中央部の確認面からの深さは16cmを測る。埋土は黒色土で、遺物の出土は認められなかった。

**SK 2 (第17図)**

SK 1の西隣に位置する。第III層上面から検出され、長径140cm、短径120cmの不整形な長方形を呈する。中央部の確認面からの深さは22cmを測る。埋土は黒色土で角礫を含む。遺物の出土は認められなかった。

**SK 3 (第17図)**

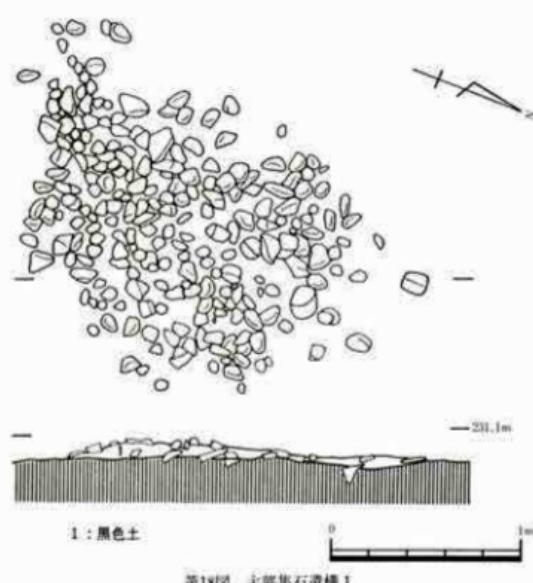
主郭上段南西隅で第III層上面から検出された。径約105cmのはば円形を呈し、中央部の確認面からの深さは10cmと浅い。埋土は黒色土で、遺物の出土は認められなかった。

**柱穴 (第16図)**

主郭上段の中央南の2ヶ所、虎口の西側の1ヶ所で検出しているが、いずれも検出面からの深さは浅いもので、その性格を明確にすることはできなかった。

**集石遺構 1 (第18図)**

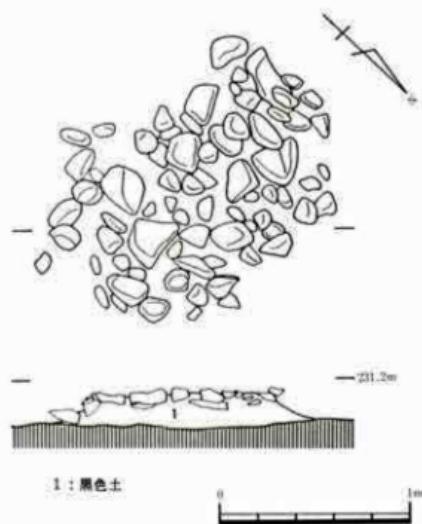
主郭上段の北東隅で検出された。表土で数個の角礫が確認され、その下から約2m四方の範囲で径5~15cmの角礫が多数検出された。確認面からの深さは約10cmと浅く、石と石の間に第II層があり、地山(第III層)への掘り込みは認められなかった。炭化物、焼土、焼礫はなく、火を受けた様子は認められなかつた。本遺構の性格は明確ではないが、投石用の集石とも想定される。



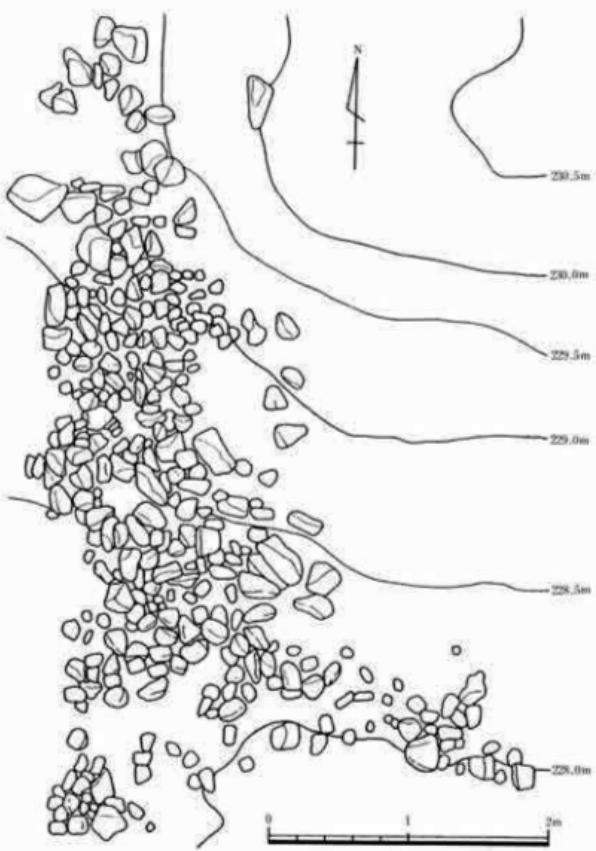
第18図 主郭集石遺構 1

**集石遺構 2 (第19図)**

主郭上段のはば中央部で検出された。表土で数個の円礫と角礫が確認され、その下から径1mの範囲で径5~20cmの破碎した河原石が多数検出された。角礫は円礫に比べて少なかつた。確認面からの深さは約20cmで中央部が塚状に高い。石と石の間に第II層があり、地山(第III層)への掘り込みは認められなかつた。また、火を受けた様子も認められなかつた。本遺構の性格は明確ではないが、集石遺構 1 と同様投石用の集石とも想定される。



第19図 主郭集石遺構 2



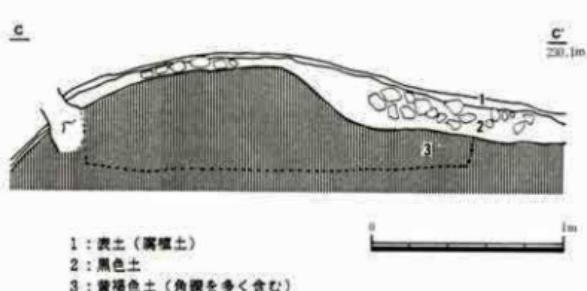
第20図 主郭石垣状造構

**石垣状造構**

(第20図)

主郭下段から虎口に至る通路や主郭上段の斜面に表土(腐植土)の下から径5~40cmの角礫や円礫が多数検出された。土の崩れと流出を防ぐために石垣状に張りつけられたものと考えられる。第Ⅲ層からも角礫を検出し、石を張りつけた上に土を叩きしめて構築されたとも考えられる。主郭上段に至る通路に一部階段状に角礫が敷かれているが、主郭上段の斜面から崩れた石かどうかは不明である。

また、主郭下段から南曲輪1に至る斜面にも土の崩れと流出を防ぐためと考えられる角礫が多数検出された。中には円礫が数個含まれていた。一部トレンチを入れてみたが、地山から径20~40cmの角礫が検出され、石を張りつけた上に地山の土で叩きしめたものと考えられる(第40図)。いずれも、主郭へ至る唯一の通路になっており、主郭部を強化するための石垣状の造構であると推定される。



第21図 主郭土塁断面図

**土塁 (第21図)**

主郭虎口部分の北端に位置する。土塁と虎口部分の平坦部との比高は約40cmで、断面形は蒲鉾形をしている。

土塁の断ち割り調査による断面観察の結果によると、表土(腐植土)の下に角礫

があり、地山は径10~15cmの角礫を多く含むしまりのない黄褐色土で、第21図の点線部分まで掘り下げたが分層できなかった。周辺を削いで、その上に石や土を盛って叩きしめて、土塁が築かれている。

土塁の断ち割り部分から底裏に刻名のある有耳壺(遺物番号18)と瀬戸美濃大窯2段階の擂鉢の破片(遺物番号22)が出土した。同一個体とみられる有耳壺の破片は主郭下段や南曲輪1でも出土しており、土塁構築時に混入したものと考えられる。

**礎石列 (第16図)**

主郭下段の東側の曲輪の端に表土(腐植土)の下から径40~50cmの河原石を7個検出した。石と石との間隔は不揃いであるため、何個かの石は流出したものと考えられる。当初、これらの河原石は主郭下段に建つ礎石建物の礎石列と考えたが、主郭上段から下段への斜面や主郭下段の平坦部にこれらの礎石列に対応する礎石は検出されなかった。よって、礎石をもつ柵列の可能性が高いと考えられる。

**3. 南曲輪1 (第16図)**

南曲輪1は主郭部の斜面を削り、その土を南から東の谷側に盛り土して造成した平坦部である。主郭部を南から東へ取り巻く帶曲輪になっている。曲輪の南側平坦部は南北7m、東西17mで、東に通路状に延び、東側平坦部は南北7m、東西8mを測り、面積は約250m<sup>2</sup>である。標高は南側平坦部の中央で224.7m、東側平坦部の中央で227mである。主郭下段南端と南曲輪1の北端との比高は約3m、主郭上段東端と南曲輪1の西端との比高は約3.5mである。

主郭下段から南曲輪1の南側平坦部の東にかけて多くの角礫や数個の河原石を表土(腐植土)の下から検出したが、いずれも主郭下段や斜面から流出したものと考えられる。また、本曲輪

の東側の東端に土壙を検出した。この土壙の性格や構築等については後述する（第34図）。

出土した遺物は、破片数にして25点で、山茶碗・天目茶碗・皿類・徳利・擂鉢・有耳壺・土師皿等である。その内、土師皿4点（同一個体）と山茶碗1点は東側の土壙から出土した。

#### 4. 南曲輪2（第22図）

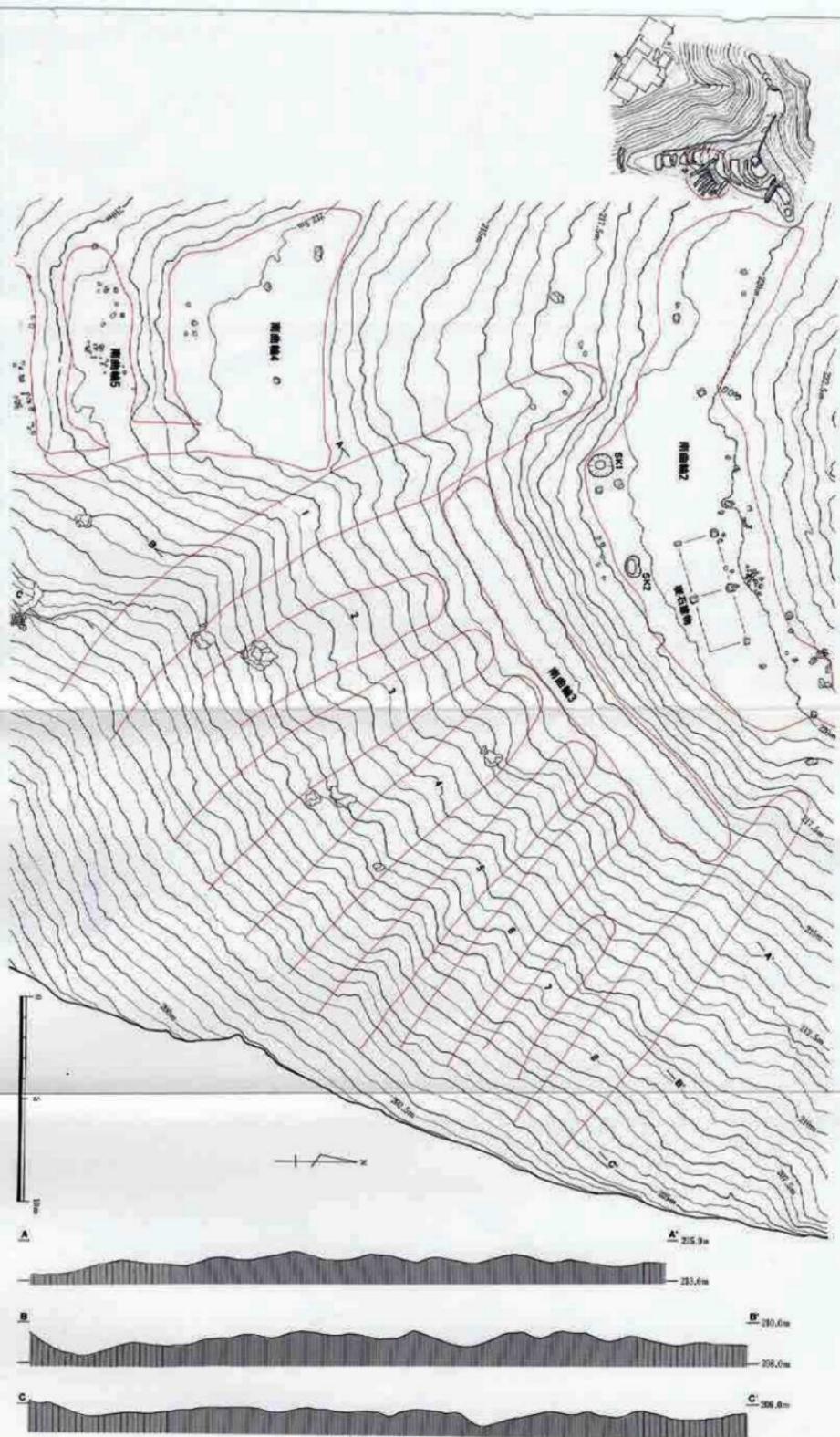
南曲輪2は南曲輪1同様、南曲輪1の斜面を削り、その土を南側に盛り土して造成した平坦地である。南北約8m、東西約25mの中央部が張り出した形の長方形を呈し、面積は約160m<sup>2</sup>である。標高は中央部で219.6mで、南曲輪1の南端と南曲輪2の北端との比高は約4mである。南曲輪2の中央東側で表土（腐植土）の下から方向性のある径30～50cmの河原石を検出した。長方形を呈する礎石建物が建っていたと考えられる。その他にも数個の河原石を検出したが、方向性はなく、礎石かどうか不明である。また、礎石建物の南、曲輪の南端に土壙を2基検出した。

出土した遺物は、破片数にして13点で、天目茶碗・有耳壺・常滑製品・土師皿・銅錢等である。

南曲輪2の張り出した中央部の両端から堅堀が2本、南曲輪2の東南の下に位置するテラス状の南曲輪3の下から堅堀が6本、計8本の堅堀が東南斜面に造られている。これらは、斜面に連続して築造された、いわゆる敵状空堀群である。形状から天文10年代から永禄年間（1541～1569）に造られたものと考えられる（註13）。敵状空堀群は斜面の横移動を防ぎ、下からの攻撃を阻止するものである。敵は多人数での攻撃を分断され、身動きが取りにくく、堅堀底を個々が直線的に登らざるを得ない。さらに堅堀の上に南曲輪3があるため、そこから敵を攻撃でき、防御機能を高めている。また、東南斜面の下から上を眺めると、西側に南曲輪4～9の階段状の曲輪があり、上には8本の敵状空堀群があり、さらにその上に南曲輪3、櫓のような礎石建物がそびえたつ南曲輪2があり、威圧感を与える。南から東南にかけての防御機能は非常に高く、城が構築されている。

南曲輪4から南曲輪2に至る斜面はわりと急斜面であること、南曲輪2の西側が南曲輪1・主郭下段への通路になっていることから考えると、南曲輪2は主郭部を守るために非常に重要な位置を占めるといえる。

以下、各遺構について説明していく。

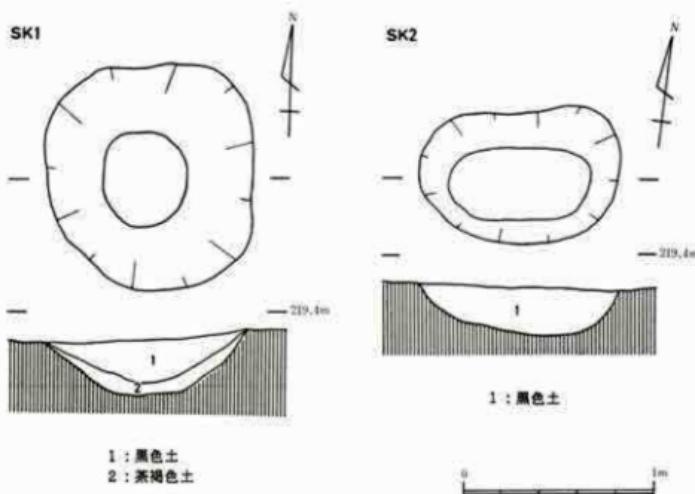


**SK 1 (第23図)**

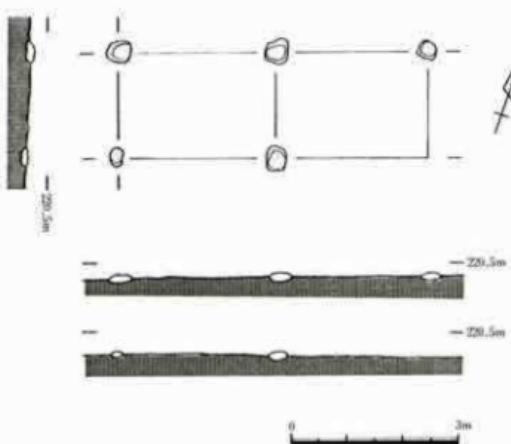
南曲輪2の中央南端で第III層上面から検出された。径110~120cmのほぼ円形を呈し、中央部の確認面からの深さは30cmを測る。埋土は黒色土と茶褐色土の2層になっており、小砾が含まれていた。遺物の出土は認められなかった。

**SK 2 (第23図)**

南曲輪2の中央南端(SK 1の東)で第III層上面から検出された。長径100cm、短径70cmの不整形の梢円形を呈し、中央部の確認面からの深さは25cmを測る。埋土は黒色土で、遺物の出土は認められなかった。



第23図 南曲輪2 SK 1・2



第24図 南曲輪2 碓石建物

## 礎石建物（第24図）

南曲輪2の中央東に位置する。表土（腐植土）の下から礎石と考えられる径30~50cmの河原石が5個検出された。礎石の配列は長辺が5.7m、短辺が1.9mの長方形を呈し、東南隅の礎石は1個流出したものと考えられる。1間3間の櫓のような礎石建物が建っていたと推定される。

## 5. 南曲輪3（第22図）

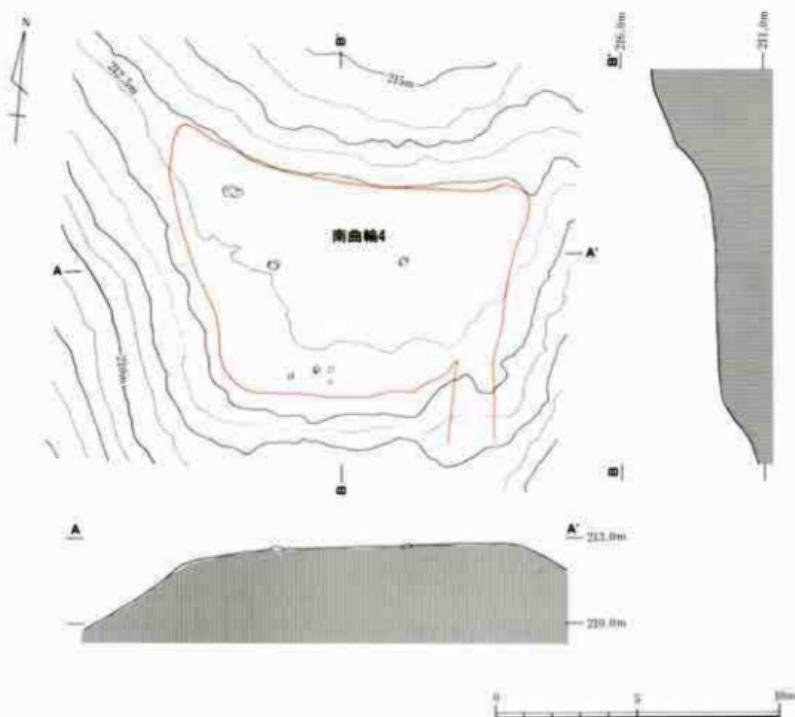
南曲輪3は南曲輪2の東南斜面の下に位置するテラス状の曲輪である。南北1.5~2m、東西22m、面積約50m<sup>2</sup>を測る。中央部の標高は215.5mで、南曲輪2の南端と南曲輪3の北端の比高は3mである。南曲輪3の下に6本の堅堀が造られており、堅堀を直線的に登ってくる敵を防ぐための通路的な曲輪である。

遺物は徳利の破片が1点出土した。

## 6. 敵状空堀群（第22図）

前述したように、南曲輪2の中央部の両端から掘り下げられた2本と南曲輪3の下から掘り下げられた6本の堅堀が連続した敵状空堀群が確認された。東側への移動を防ぐものである。斜面を掘り下げて堅堀にし、掘り下げた土を堀と堀の間に盛り上げて堅土壁にして構築されたものである。各堅堀とも緩やかな「U」字状を呈しており、深さは浅いところで20cm、深いところでも60cmである。城の廃絶後、堅土壁の土砂が流出したり、堅堀に土砂が流入して浅くなったりと考えられる。説明の便宜上、西側の堅堀から堅堀1~8とした。堅堀1は南曲輪2の中央部の西側から下に掘り下げられており、堅堀の中で最も規模が大きい。長さは約35mである。堅堀2~7は南曲輪3の下から掘り下げられており、長さ約10~20mを測る。堅堀8は南曲輪3の中央部東側から掘り下げられており、長さ23mを測る。

敵状空堀群からの遺物の出土は認められなかった。

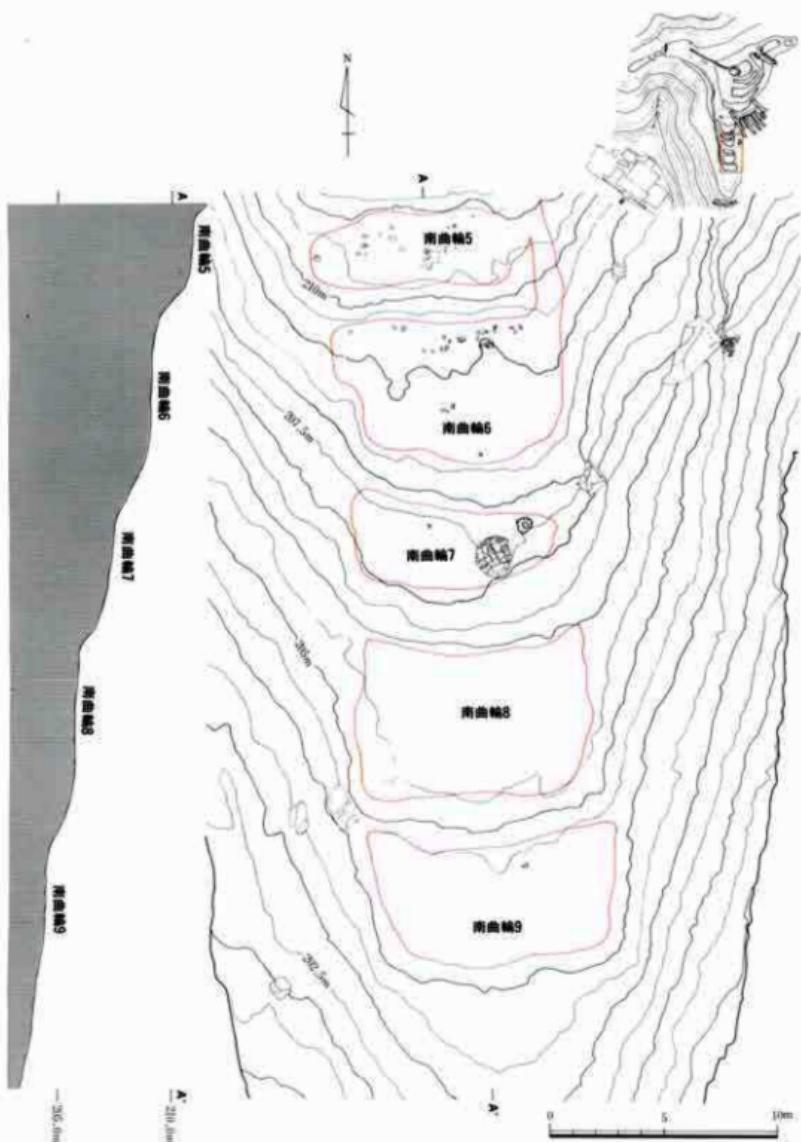


第25図 南曲輪4

### 7. 南曲輪4（第25図）

南曲輪4は北側斜面を削り、その土を南側に盛り土して造成した平坦地である。本曲輪は南曲輪2の南側、戸状空堀群の西側に位置し、通路で西曲輪1とつながっている。主郭部への通路として重要な曲輪であると考えられる。南北約8m、東西約11mの長方形を呈し、面積は約85m<sup>2</sup>である。標高は中央部で212.6mで、南曲輪2の南端と南曲輪4の北端との比高は約6.5mである。本曲輪の表土（腐植土）の下から径30~40cmの河原石を3個検出した。他の曲輪の様子から礎石と考えられるが、不摘要でどんな建物があったかは不明である。ただ、南曲輪5~9において礎石と考えられる河原石を検出しなかったことから考えて、門のようなものが建てられていたとも想定される。

出土した遺物は、白磁皿の破片1点である。



第26図 南曲輪5～9

### 8. 南曲輪5（第26図）

南曲輪5は南曲輪4の南下に位置し、南曲輪4の斜面中央部を削り、その土を南側に盛り土して造成した平坦地である。南曲輪の両端は土壘状に残っている。南北約3m、東西約10mの細長い長方形を呈し、面積は約30m<sup>2</sup>である。標高は中央部で210.6m、南曲輪4の南端と南曲輪5の北端との比高は1.5mである。径5~20cmの角礫を多数検出したが、遺構は検出されなかった。また、遺物の出土は認められなかった。

### 9. 南曲輪6（第26図）

南曲輪6は南曲輪5の南下に位置し、南曲輪5の斜面を削り、その土を南側に盛り土して造成した平坦地である。南北約6m、東西約10mの長方形を呈し、面積は約55m<sup>2</sup>である。標高は中央部で209m、南曲輪5の南端と南曲輪6の北端との比高は約1.6mである。本曲輪の北端に径5~20cmの角礫を多数検出したが、斜面から流出したものと考えられる。遺構は検出されなかった。遺物は全て小片であるが、山茶碗1点・擂鉢2点・常滑製品3点が出土した。

また、本曲輪の東側の豊堀1との間に、岩が張り出してやや平坦地になっており、天然の横矢かけとも想定される。

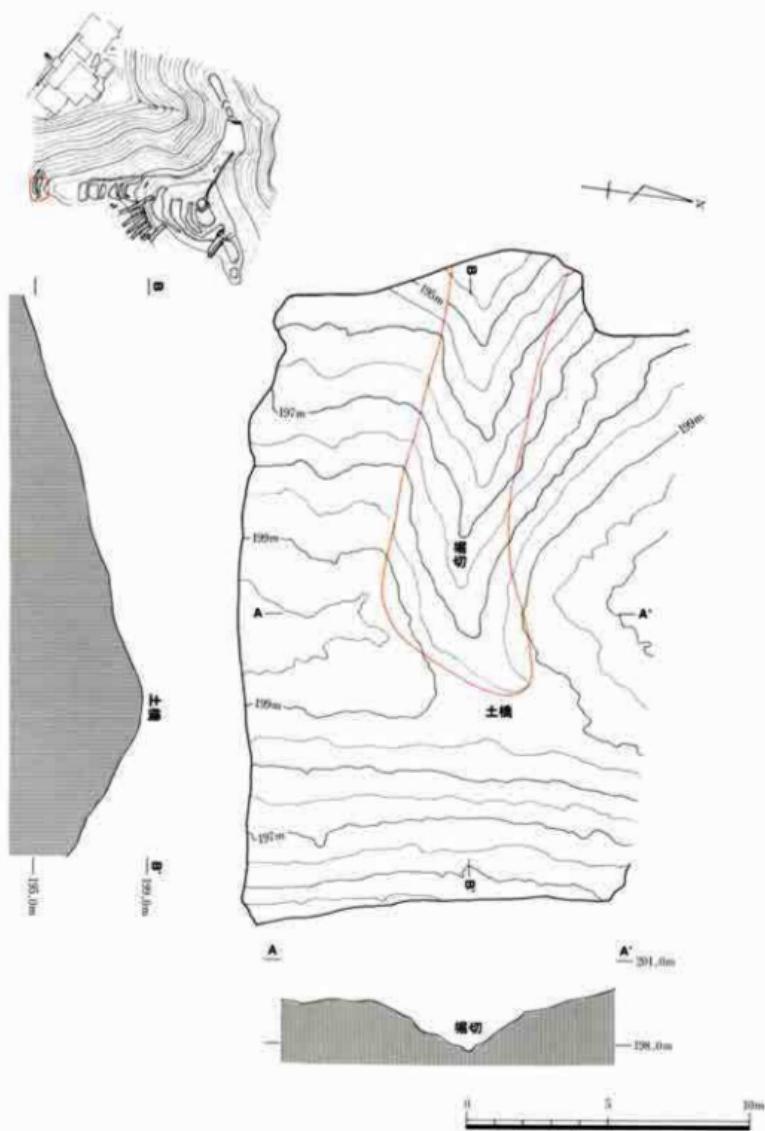
### 10. 南曲輪7（第26図）

南曲輪7は南曲輪6に南下に位置し、南曲輪6の斜面を削り、その土を南側に盛り土して造成した平坦地である。南北約3.5m、東西約8mの長方形を呈し、面積は約30m<sup>2</sup>である。標高は中央部で207.2m、南曲輪6の南端と南曲輪7の北端との比高は約1.3mである。本曲輪の東端に径70cmの土抗を検出したが、形状から倒木痕と考えられる。また、径1.6~2m、高さ1.2mの自然石が地山にめりこんでいた。遺物の出土は認められなかった。

### 11. 南曲輪8（第26図）

南曲輪8は南曲輪7の南下に位置し、南曲輪7の斜面を削り、その土を南側に盛り土して造成した平坦地である。曲輪の肩がやや張り出すように整形されている。南北約6m、東西約10mの台形を呈し、面積は約65m<sup>2</sup>である。標高は中央部で205.7m、南曲輪7の南端と南曲輪8の北端との比高は約2.2mである。本曲輪から遺構は検出されなかった。遺物は端反皿の破片が2点・天目茶碗の破片1点出土した。

また、南曲輪4から南曲輪8の西側にテラス状の通路を検出した。斜面を削り、やや平坦にした通路である。



第27図 南堀切

#### 12. 南曲輪9（第26図）

南曲輪9は南曲輪8の南下に位置し、南曲輪8の斜面を削り、その土を南側に盛り土して造成した平坦地である。南曲輪8と同様、曲輪の肩がやや張りだすように整形されている。南北約5.5m、東西約10mの台形を呈し、面積は約55m<sup>2</sup>である。標高は中央部で204.4m、南曲輪8の南端と南曲輪9の北端との比高は約1mである。本曲輪から遺構は検出されなかった。出土した遺物は破片数にして10点で、天目茶碗・皿類・染付皿・太白碗・鉄釘等である。天目茶碗の破片は3点であるが南曲輪8の1点と同一個体である。

南曲輪8と南曲輪9は幅広く造成されており、下から主郭部を見上げた時、安定感・威圧感がある。

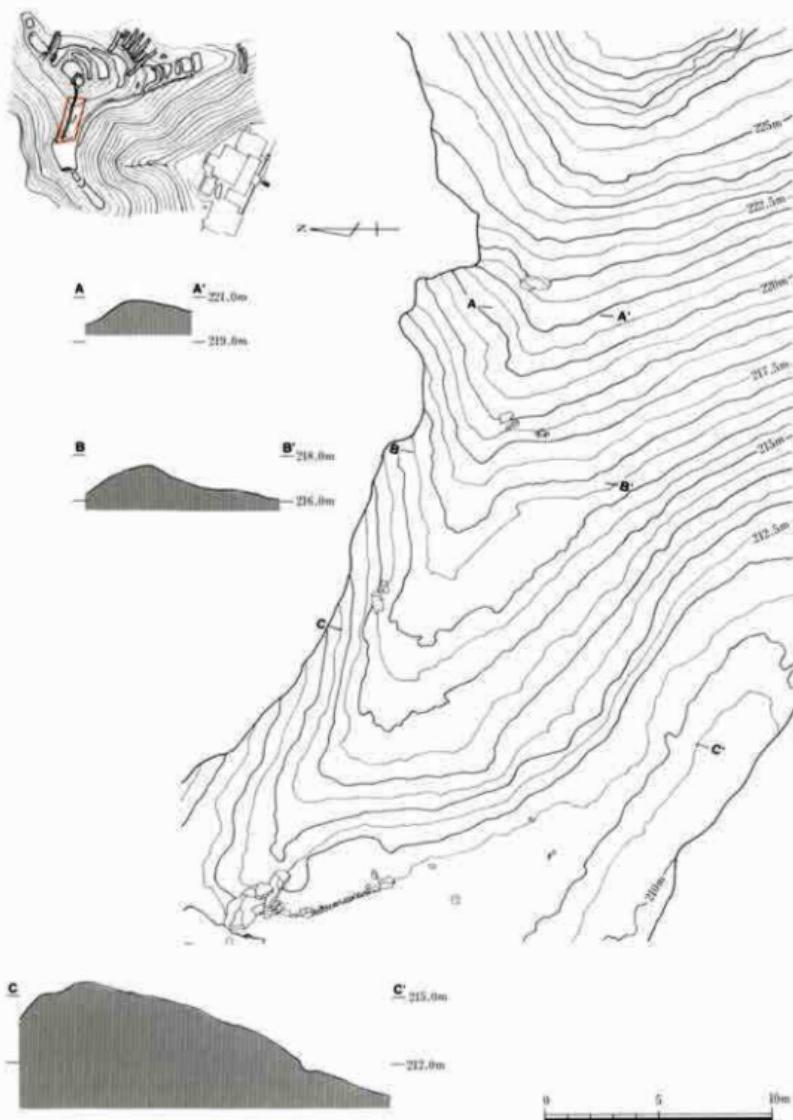
#### 13. 南堀切（第27図）

南堀切は南曲輪9からなだらかな斜面を下ったところに位置する。本城跡最大の堀切である。北側からの尾根と南側からの尾根の合流する地点にあり防御ラインとしての役割を果たすと考えられる。調査区内の検出した長さは約15mで、西側山麓に曲がりながら延びている。堀切は断面逆三角形をなし、肩部のレベルで幅約5m、深さは約1.5mである。底部はやや断面が窪んだ形をなす。堀切底部のレベルは西側に向かって下がり、東端と調査区内の西端での底部の比高は約4mである。堀切の東側は土橋になっており、土橋の東側は急斜面になっている。また、堀切の南側に西側山麓の林廣院からの通路がある。

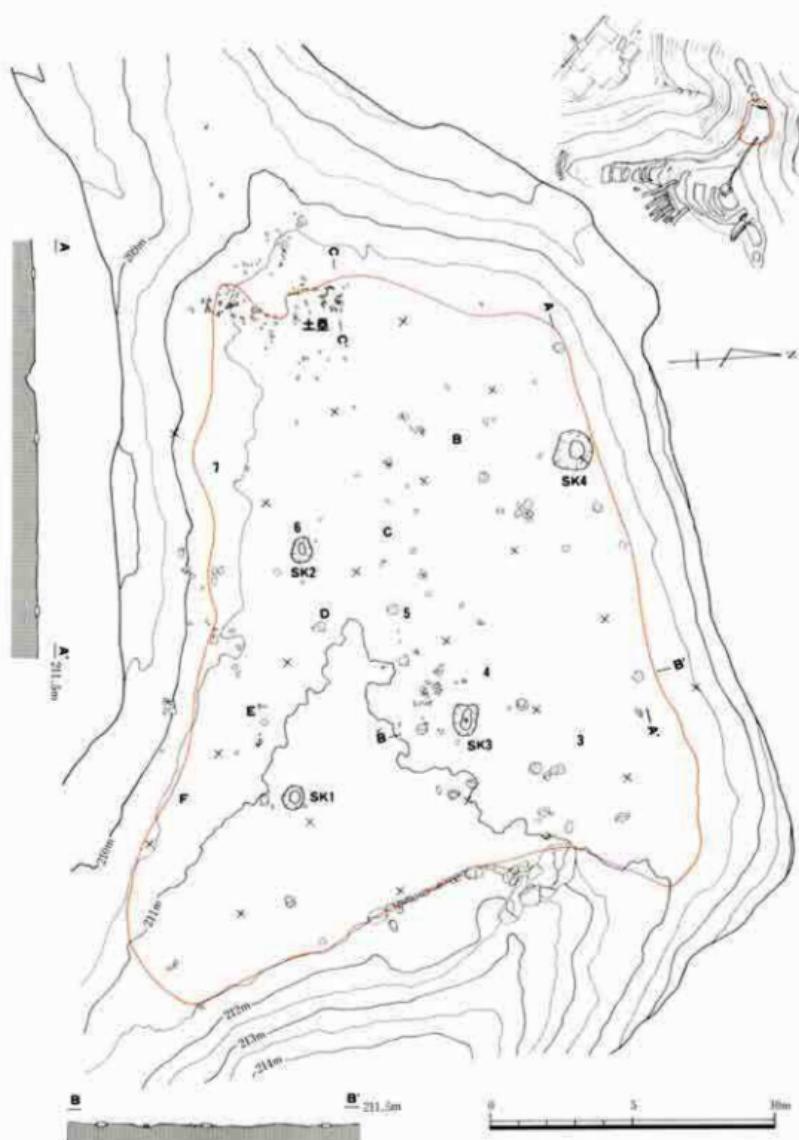
#### 14. 縦土塁（第28図）

主郭部から西曲輪1に至る斜面に鶴尾山城跡の北側と画する縦土塁を検出した。土塁の断面形は蒲鉾形で、土塁の長さは約32m、土塁の上と下の比高は約10mである。土塁は南側を削り、その土を盛り上げて構築したと考えられる。

また、調査期間の都合上、縦土塁に3ヶ所トレンチを入れただけに終わったが、遺物の出土は認められなかった。



第28図 犀土塁



第29図 西曲輪1

## 15. 西曲輪1（第29図）

西曲輪1は主郭部から西の尾根を標高約20m下に位置する、鶴尾山城跡で最も広い面積を持つ曲輪である。尾根上をカットし、南側と北側に盛り土して造成した平坦地である。北側は急斜面になっており、東南隅から通路が南曲輪4につながっている。南北約15m、東西約21mの長方形を呈し、面積は約350m<sup>2</sup>である。標高は中央部で211m、主郭部との比高は約20m、西曲輪1の西端と西曲輪2の東端との比高は約0.8mである。西曲輪1の西端に土塁が造られている。本曲輪から土壙4基と径40~50cmの河原石を十数個検出した。当曲輪の東側に石垣を組んで弘法様が祭ってあり、曲輪内にあった河原石が後世に使用されたと考えられる。河原石の配列は不揃いであるが、かなり大型の礎石建物が2棟は建っていたものと推定される。倉庫的な施設とも考えられる。また、掘立柱建物跡は確認できなかった。

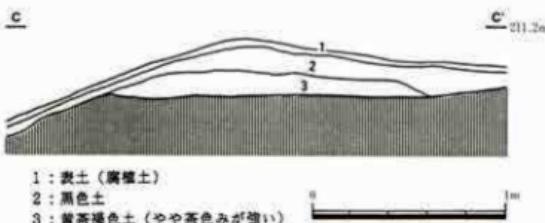
出土した遺物は破片数にして30点で、皿類・小杯・擂鉢等である。小杯（遺物番号17）は鶴尾山城跡唯一の完形品である。また、擂鉢片の出土は17点で鶴尾山城跡で最も多い。

西曲輪1は面積が広く、擂鉢片の出土が多いこと、完形の小杯が出土したこと、かなり大型の礎石建物が建つことなどから、居住性の高い曲輪と考えられる。

以下、主な遺構について報告していく。

## 土塁（第30図）

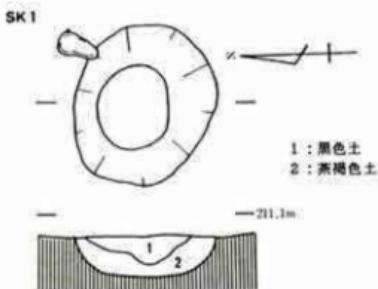
西曲輪1の西端に位置する。土塁と西曲輪1の平坦部との比高は約1mで、断面形は蒲鉾形をなしている。土塁の断ち割り調査による断面観察によると、表土（腐植土）の下に角礫が混入され、第II層の下は地山の黄褐色土よりやや茶色みが強い黄茶褐色土で地山の土の再堆積と考えられる。土塁は周辺を削いで、石や土を盛って叩きしめて築かれている。



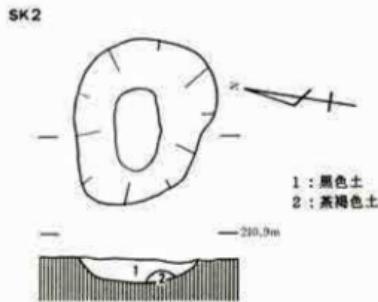
第30図 西曲輪1土塁断面図

**SK 1 (第31図)**

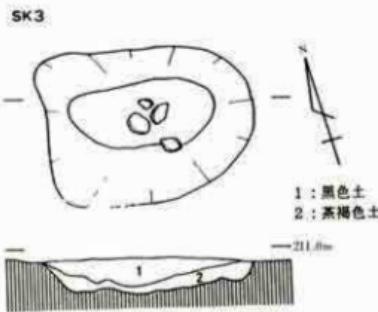
西曲輪1の東南隅 (E 5区) で  
第三層上面から検出された。長径  
90cm、短径70cmの楕円形を呈し、  
中央部の確認面からの深さは20cm  
を測る。埋土はしまりのない黒色  
土と茶褐色土（黒色土と地山の土  
の混入土）である。遺物の出土は  
認められなかった。

**SK 2 (第31図)**

西曲輪1の中央南端 (D 6区)  
で第三層上面から検出された。長  
径90cm、短径65cmの楕円形を呈し、  
中央部の確認面からの深さは12cm  
と浅い。埋土は炭化物が混入して  
いる黒色土と茶褐色土（地山の土  
がブロック状に混入）である。遺  
物の出土は認められなかった。

**SK 3 (第31図)**

西曲輪1の中央東 (D 4区) で  
第三層上面から検出された。長径  
110cm、短径80cmの楕円形を呈し、  
中央部の確認面からの深さは20cm  
を測る。埋土は黒色土（炭化物を  
若干含む）と茶褐色土である。や  
や茶色みが強く、角礫を多く含む。  
遺物の出土は認められなかった。



第31図 西曲輪1 SK 1 - 3

**SK 4 (第29図)**

西曲輪1の北西隅(A B 5区)から検出された。径約140cmのほぼ円形を呈する。底面のレベルは一定しておらず、倒木痕と考えられ、図示しなかった。

**16. 西曲輪2 (第32図)**

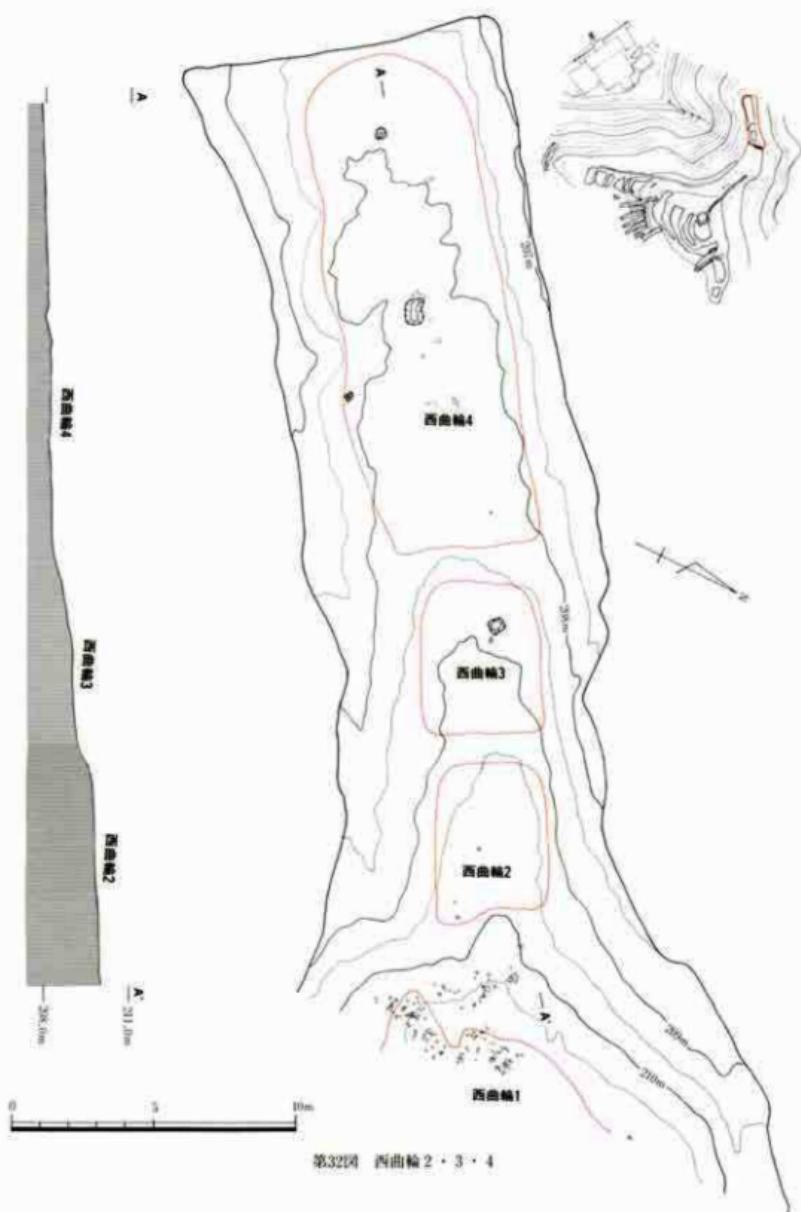
西曲輪2は西曲輪1の西下に位置し、尾根上をカットして平坦部にした曲輪である。段差があり、平坦部なので曲輪としたが、南北約4m、東西約5mのほぼ方形を呈し、面積は約20m<sup>2</sup>である。標高は中央部で210mである。遺構や遺物は確認できなかった。

**17. 西曲輪3 (第32図)**

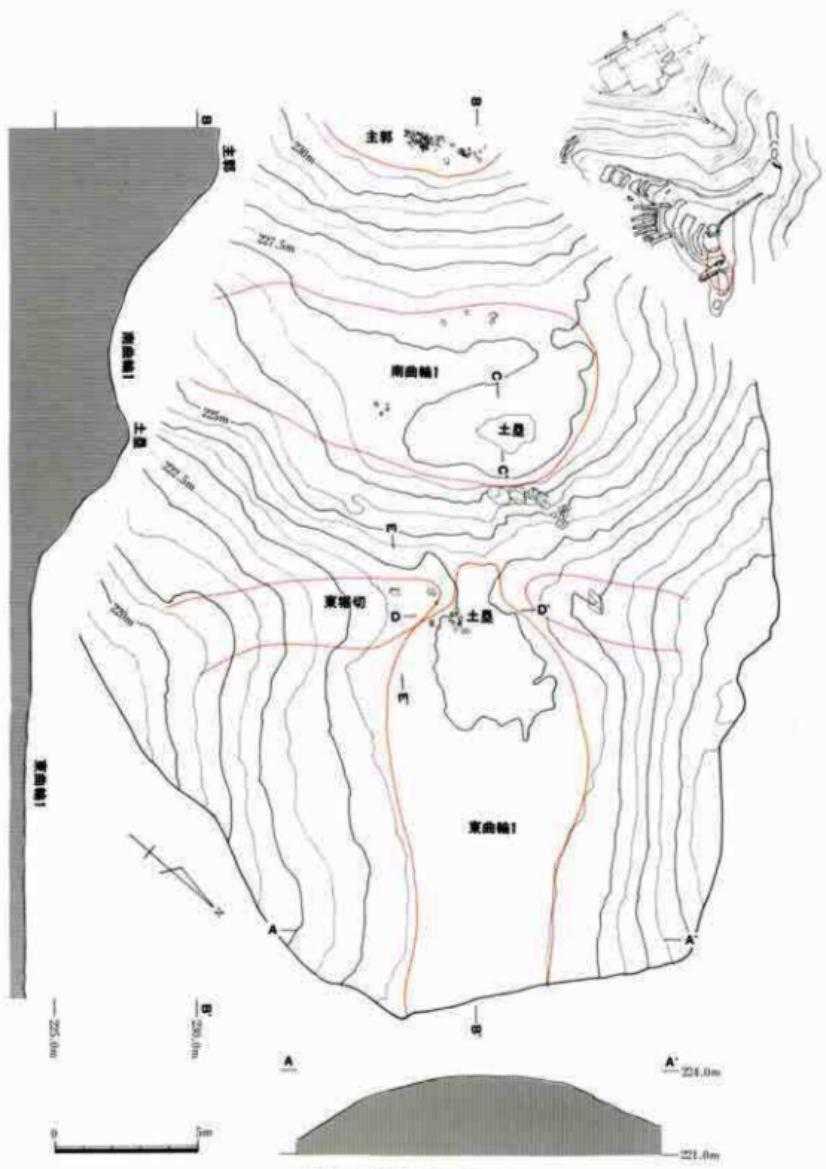
西曲輪3は西曲輪2の西下に位置し、西曲輪2と同様、尾根上をカットして平坦部にした曲輪である。段差があり、平坦部なので曲輪とした。南北約4m、東西約5mのほぼ方形を呈し、面積は約22m<sup>2</sup>である。標高は中央部で209.2mである。遺構や遺物は確認できなかった。

**18. 西曲輪4 (第32図)**

西曲輪4は西曲輪3の西下に位置し、西曲輪2や3と同様、尾根上をカットして平坦部にした曲輪である。南北約6m、東西約15mの長方形を呈し、面積は約100m<sup>2</sup>である。標高は中央部で208.1mで、西曲輪1との比高は約3mである。本曲輪から土坑やピットが検出されたが形状から倒木痕と考えられる。出土した遺物は破片数にして9点で、棱花皿・土鍤・銅錢等が出土した。



第32図 西曲輪2・3・4



第33図 南曲輪 1 束、東曲輪 1

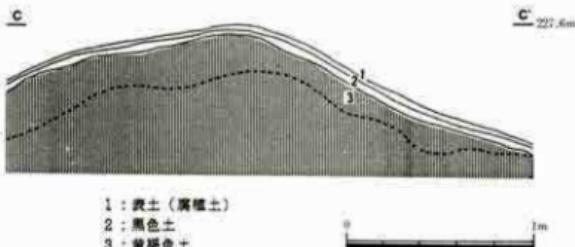
### 19. 南曲輪1東、東曲輪1（第33図）

南曲輪1は前述したように主郭部を取り巻く帶曲輪で、東側は主郭上段との比高が約3.5mで、東端に土塁が築かれている。南曲輪1の東下に東曲輪1と東曲輪2が階段状に造られている。東曲輪1は南北約5m、東西約13mの長方形を呈し、面積は未調査分を合わせて約90m<sup>2</sup>である。標高は中央部で223.9m、南曲輪1の東端と東曲輪1の西端との比高は約3mである。東曲輪1の西端の南曲輪1の下には東堀切があり、障子土塁が堀切を分断している。東曲輪1は断面形がやや蒲鉾形を呈し、平坦部が少ない。また、主郭や南曲輪1の段差も大きく、西側に堀切が造られていることから、隣接する東曲輪2と合わせて防御の役割を果たす捨て曲輪と考えられる。東曲輪1の東側一部と東曲輪2は調査区域外であるが、東曲輪2の東は尾根が続いている。出土した遺物は破片数にして29点で、天目茶碗・皿類・染付皿・土師皿・土錘等が出土した。

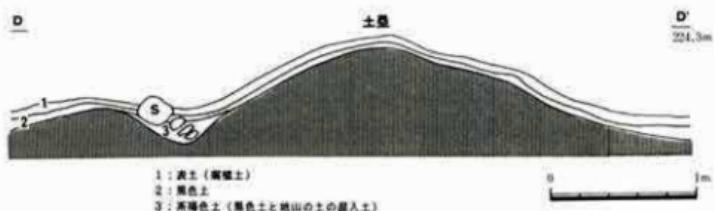
以下、主な遺構について報告していく。

### 南曲輪1東 土塁（第33・34図）

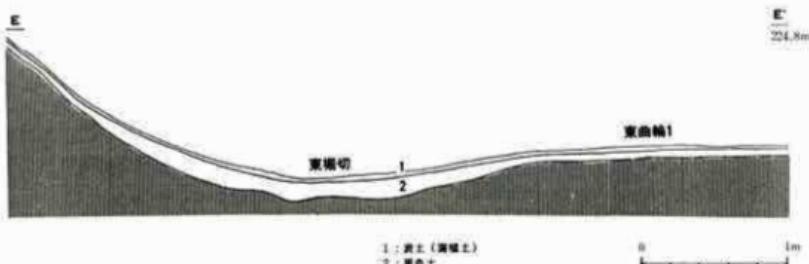
南曲輪1の東端に位置する。土塁と南曲輪1の平坦部との比高は約60cmで、断面形は蒲鉾形をなしている。土塁の断ち割り調査による断面観察の結果によると、第Ⅰ層・第Ⅱ層とも浅い堆積で、第Ⅲ層（地山）は第34図の点線部分まで掘り下げたが、岩が現れただけで分層できなかった。土塁の頂部は本来の地山で、その上に南曲輪1の東側を削った土で盛り土して、土塁が築かれている。また、土塁の断ち割りの際、土師皿片が出土した。



第34図 南曲輪1東土塁断面図



第35図 東曲輪1土星断面図



第36図 東堀切断面図

### 東曲輪1土星 (第33・35図)

東曲輪1の西端に位置する。当初、土橋と考えたが、東曲輪1の西側は急な斜面になっており、つながるところがなく、東堀切を分断する障子土壁と推定される。土壁の断面形は蒲鉾形をなしている。表土(腐植土)の下から径10~30cmの角礫が径2mの範囲で検出されたが、多くは地山に入っており、地山の岩が徐々に破碎したものと考えられる。

### 東堀切 (第33・36図)

東曲輪の西端に位置する。障子土壁によって南北に分断されている。東曲輪1の平坦部と堀切底部との比高は約30cmで、予想外に浅いものであった。東曲輪1の南側・北側ともに急な斜面になっているので、浅くても機能したのであろう。

### 第3節 遺 物

#### 1 出土遺物について

鶴尾山城跡からは、主郭部及び西曲輪1よりほとんどの遺物が出土している。また、炭化物が遺物の集中箇所と同様に主郭部から検出された。層位で考えると、馬の背状の尾根に曲輪が築かれたため、土砂の堆積が薄く、腐植土を取り除いた直下より遺物が現れる状況である。しかし22の擂鉢や、27の土師皿のように土壘断ち削りの際に出土した遺物があることを考えると、更にトレンチを入れ、土壘のみならず曲輪の築成に注目した調査の必要性を痛感するものである。本報告では山茶碗、瀬戸・美濃陶器（古瀬戸期・大窯期）、常滑製品、土師器、中国製（明）染付、その他に分ける。

#### 2 山茶碗 (1)

碗の底部破片が2点、皿の小破片が9点の出土であった。すべて東海地方北部系である。細片のため図は1のみであるが、これは美濃窯編年の大窯東1号窯式に比定される。

#### 3 瀬戸・美濃陶器（古瀬戸期・大窯期）

##### (1) 天目茶碗 (2~9)

接合後の破片数は9点を数える。時期は古瀬戸後晩期から近世初頭のものまであるが、主となるものは大窯1・2段階である。出土地点の分布の特徴として、主郭部に集中していることがいえる。2は東曲輪1からの出土で、口縁から底部まで残存した唯一のものである。古瀬戸後晩期新段階で、体部においては鉄釉より灰釉成分が多く、黄色味をおびた薄茶色の発色である。高台は削り出し輪高台で露胎を呈す。3・4は大窯1段階に比定されるもので、茶色の釉調である。5~7は大窯2段階に相当し、釉調は單一な黒色系である。胸部下半は7以外錫釉が施される。8は南曲輪1で出土し、黒色の釉調をなす。大窯2から3段階のものであろう。9は城跡南端の堀切（南堀切）に付随する土橋表土において検出されたもので、近世初頭（17世紀）のものと思われる。釉調は赤みをおびた茶色である。

##### (2) 皿類（棱花皿・端反皿・丸皿・菊皿・縁釉小皿・灯明皿）(10~16)

##### 棱花皿 (10)

破片数にして西曲輪1より3点、西曲輪3より4点、主郭下段より1点の出土が見られた。これらの接合は不可能であったが、曲輪ごとに同一個体と思われ、計3個体を数えることができる。図化したものは10の1点である。低い高台を持ち、体部はゆるやかに外反する。大窯

1段階に属するものである。

#### 壇反皿 (11・12)

主郭上段より11が出土した。高台接地面以外に灰釉が施され、内面底部には緑色の釉がたまり込む。その中央部に菊の印花文が押印されている。12は底部のみの残存である。南曲輪8において出土し、内面底部には印花文が押印されている。11とともに外面底部は回転糸切り未調整であると同時に、輪トチ痕が明確に残る。大窯1段階に属する。

#### 丸皿 (13)

13は11と同じく接地面以外に灰釉が施され、内面底部に釉がたまり込み、高台にもしづく状に釉が固まる。使用によるためか、口縁端部において釉が剥落している。

#### 菊皿 (14)

小破片の出土が17点であった。特定の曲輪に集中することはない。図化は14の1点である。全面に灰釉が施され、内面底部に丸ノミによる削ぎがみられる。13と14は大窯2段階に比定される。

#### 縁釉小皿

図化できないが、口縁部の破片が出土している。釉は鉄釉で、出土地点・口縁の状況より2個体の出土と推定される。古瀬戸後期IV新段階に比定される。

#### 灯明皿 (15・16)

主郭出土の15と東曲輪1出土の16の2点を確認した。無釉で硬く焼き締められており、底裏には回転糸切り痕が見られる。いわゆる重圓皿と称されるもので、内面はこて状工具によって同心円状に調整される。大窯2段階に該当するとみられる。

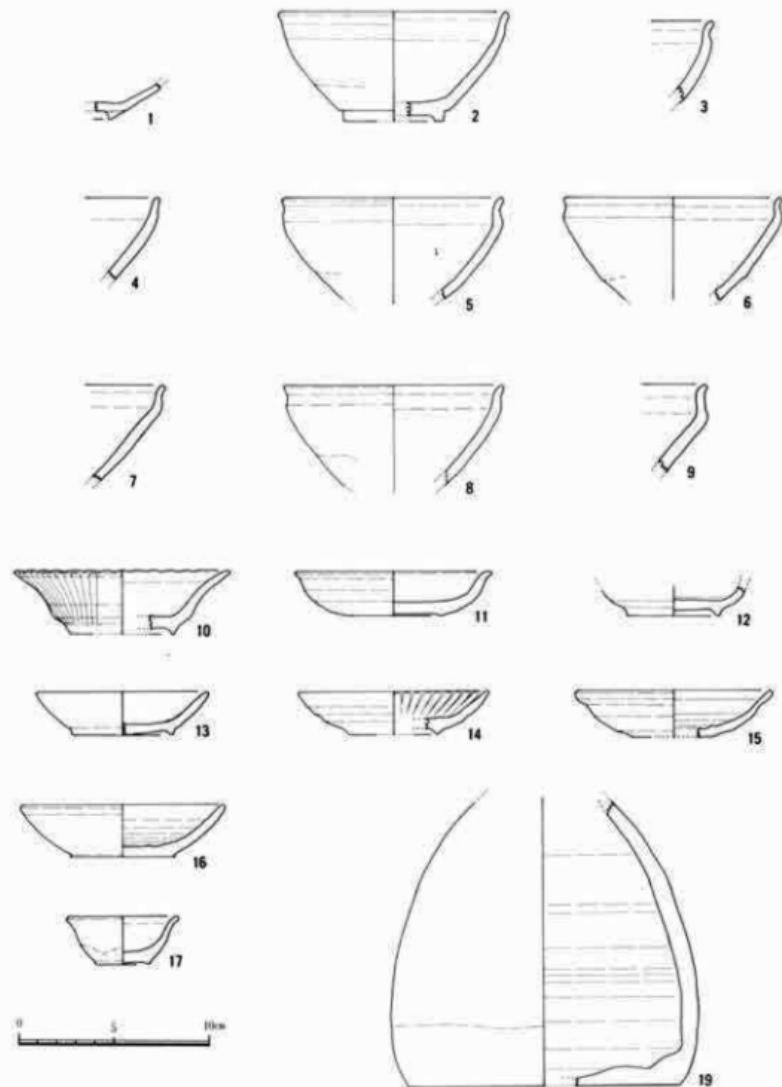
#### (3) 小壺 (17)

西曲輪1の平坦部より1点が完形で出土した。体部から口縁部にかけてゆるやかに外反し、外面体部から内部にかけて灰釉が施される。削り出し輪高台で、精緻なものである。大窯1または2段階に比定される。

#### (4) 壺・瓶類 (有耳壺・徳利)

##### 有耳壺 (18)

主郭下段の土塁を断ち割った際に出土したものである。大窯期のいわゆる祖母懐壺で、詳しい時期については不明であるが、共伴した遺物として大窯2段階の擂鉢(22)がある。釉調は灰色がかった鉄釉で、薄い茶色の発色となっている。注目すべきは底部外面にヘラ書きされた刻銘である。この銘文は、「弥三郎(花押)」と読み取れる。そして、名乗りと書風から作者(陶工)名、特に花押のスタイルから有力百姓、工人集団の長の可能性が指摘できる(註14)。また、



第37図 鶴尾山城跡出土遺物（1）

同一個体と思われる把手が出土している。小さく装飾化しており、八弁の菊の押印が認められる。

#### 徳利 (19)

大窯3段階に属する徳利である。鉄軸は胴部下位まで施され、底部においては鋳軸が施される。底部は中央に向かうにつれ薄く仕上げられている。

#### (5) 楠鉢 (20~23)

接合後の破片数より判断して、楠鉢は9個体の出土を考える。これらの残存率は低く小破片が主体となる。出土地点の集中傾向は、西曲輪1の南東部にあり、この曲輪が他の曲輪と性格を異にすることが伺われる。ただし、南曲輪1や南曲輪4などからも出土があり、各曲輪の性格を調理用具としての楠鉢から論ずるのは難しい。時期の分布についてみると、大窯2段階が5個体、3段階が1個体、4段階が2個体、不明1点という状況である。出土量の少なさから推測は困難であるが、ピークが大窯2段階にあることから、城の使用期間の主体は、この時期にあると予想される。また、文献による築城・廃絶時期(註15)との矛盾は生じない。以下、図化した4点について説明する。

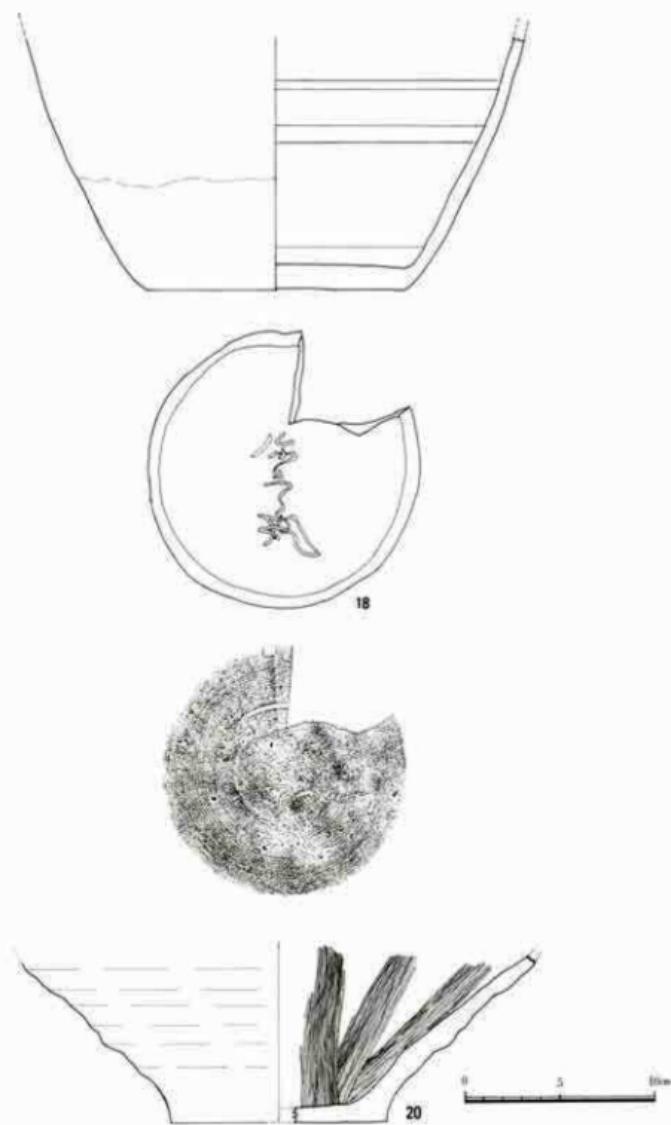
20は主郭上段にて出土したもので、大窯3段階に比定される。底部から強く外に開き、青黒色の鋳軸を施す。底裏に回転糸切り痕があり、内面は底部に向かうにつれ備引きの卸目がかなり磨耗している。同一個体が主郭下段においても検出された。これは各曲輪の平坦面が狭く、製品が破損した後に、斜面に散逸してしまう本城跡の特徴であろう。21は口縁から底部が遺存する唯一の例である。西曲輪1の出土で大窯2段階に位置付けられる。口縁部は上下方向に伸び、20mm程度の縁帶を有す。20と違い比較的浅い卸目が施される。22も大窯2段階である。縁帶の幅は17mm、口縁端部は若干内湾気味である。端部外面に非常に浅い溝が走り、大窯1段階の可能性も考えられる。これは主郭の虎口付近の土壘の内部より出土したものである。築城時かその直後の改修時に流入したものと考えられる。口縁端部が上方に引き上げられた23は大窯2段階に比定される。鋳軸がよく残り口径は復元推定すると15cmを測る。

#### 4 常滑製品 (24)

常滑焼の甕の底部である。この他に、南曲輪2より1個体になると思われる破片が8点出土した。

#### 5 土師器 (25~27)

かわらけと呼称する一群である。これらの出土地点は主郭部周辺から南曲輪2にかけてかけとんどである。図化したものは3点であるが、このほか、接合不可能な破片が主郭より13点出



第38図 鶴尾山城跡出土遺物（2）

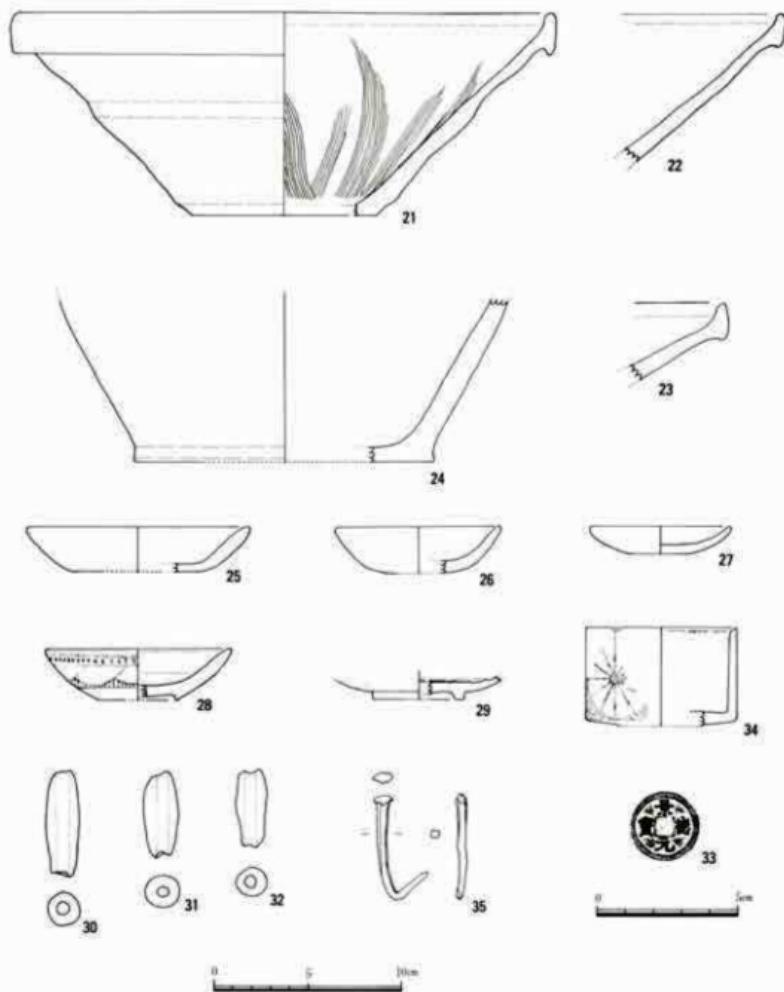
土している。25は南曲輪2の出土で、口径は12cmを測る。器壁の内外面のいたるところに炭化物が付着し、口縁にはタールがこびりつく。26も同様で非常によく使いこまれた感がある。27は南曲輪1の東側に位置する土塁中より出土したもので、22と同様に築く際に土の中に流入したものと考えられる。本城跡より出土したかわらけは、ほとんどに灯明皿として使用された痕跡が認められる。

#### 6 明染付 (28~29)

28は主郭上段にて出土した染付の皿である。口径は10cmを測り、基底を呈す。外面に簡略化された波濤文、破碎のため詳らかではないが内面底部には花文が描かれている。29は主郭下段にて出土した白磁の菊皿である。釉調は青味がかった灰白色を呈し、胎土には若干の黒色細粒を含む。その他、江戸期前半と思われる染付碗の小片が1点、近現代品の小片が2点出土した。

#### 7 その他の出土遺物 (土鍤 古銭 太白碗 砥石様大型礫) (30~35)

管状土鍤が3点出土した。形態でいうと両側縁が平行に近いもの、中央部に脹らみを持つものに分かれる。古銭は主郭周辺より4点出土した。33の銭貨名は景德元宝、初鑄年は1004~1007年。他3点は磨耗が激しく銭貨名の読み取りは困難であるが、内1点は紹聖元宝であろう。34は高台を欠損した磁器湯のみ碗である。19世紀前半代に比定されるいわゆる太白碗で、外面に菊花つなぎの文様がみられる。その他、釘は断面四角形の角釘が1点出土した。鉄製で、頭部を扁平にした跡がうかがえる。南曲輪6で砥石と考えられる大型礫が出土した。石質は砂岩で、断面は不整の四角形を呈す。その一面に擦痕が広がり、浅いくぼみが認められ、これを使用面と考える。



第39図 鶴尾山城跡出土遺物（3）

遺物 番号	拂岡 番号	因版 番号	器種	法量			残存部	器形・技法上の特記すべき点	胎土		出土地区	備考
				口径	器高	底径			砂粒	色調		
1 37			山茶楓	—	—	—	底~1/5		少ない	淡褐	表採	大室東
2 37 18	天目茶碗	12	5	5	1/3	薄茶色の釉調			少ない	黄褐	東曲輪1	古瀬戸後押新
3 37	〃	—	—	—	—	—	脚~1/4	茶色の釉調	少ない	黄褐	主郭下段	大室1
4 37 18	〃	—	—	—	—	—	脚~1/3	非常に薄い茶色の釉調	少ない	黄褐	主郭上段	〃
5 37 18	〃	12	—	—	—	—	1/2	脚部下半に結晶	少ない	淡褐	南曲輪8・9	大室2
6 37 18	〃	12	—	—	—	—	脚~1/3	〃	少ない	黄褐	主郭下段	〃
7 37	〃	—	—	—	—	—	脚~1/3	つやのある黒色の釉調	少ない	黄褐	主郭上段	〃
8 37 18	〃	12	—	—	—	—	1/3	黑色の釉調	少ない	褐	南曲輪1	大室2~3
9 37 18	〃	—	—	—	—	—	1/6	赤みを帯びた茶色の釉調	少ない	黄褐	南腰切	近世初頭
10 37 19	絞花瓶	12	3	6	1/4				差	黄褐	西曲輪1(B6)	大室1
11 37 19	編瓦瓶	11	2	5	2/3	菊の印伝文			少ない	黄褐	主郭上段	〃
12 37	〃	—	—	—	5	底~1/2	印伝文		少ない	黄褐	南曲輪8	〃
13 37 19	丸瓶	9	2	5	2/3	輪上チン痕			少ない	黄褐	主郭上段	大室2
14 37	菊瓶	10	2	5	1/6	丸ノミによる削ぎ			少ない	褐	東曲輪1	〃
15 37 19	灯明瓶	11	3	4	2/3	無地の垂葉瓶			少ない	青白	東曲輪1	〃
16 38 19	〃	11	3	6	1/3	〃			少ない	青白	主郭上段	〃
17 37 19	小杯	6	3	3	完形	削り出し輪高台			少ない	黄褐	西曲輪1(D5)	大室1~2
18 38 20	有耳壺	—	—	—	14	底~2/3	秀三郎(押印)の刻名陶器		少ない	灰青褐	主郭下段上里	
19 39 20	唐利	—	—	—	15	2/3	鉄輪が施される		少ない	褐	主郭上段	大室3
20 39 21	膳鉢	—	—	—	12	1/5	青黒色の鏡釉		差	灰青褐	主郭上段	〃
21 39 21	〃	29	11	10	1/3	底~2/3	削り出し日が施される		差	灰青褐	西曲輪1(F4)	大室2
22 39 21	〃	—	—	—	—	口~細片			差	灰青褐	主郭下段土里	〃
23 39	〃	—	—	—	—	口~細片			差	灰青褐	南曲輪1	〃
24 39	常滑瓶	—	—	—	16	底~1/5			多い	黑褐	南曲輪6	
25 39 22	土師器	12	2	7	1/5	チャール・炭化物の付着			少ない	黑褐	南曲輪2	灯明瓶
26 39 22	〃	9	3	4	1/6	〃			少ない	黑褐	東曲輪1	〃
27 39 22	〃	7	11	3	3/4	〃			少ない	淡黄	南曲輪1土里	〃
28 39 22	染付皿	10	3	4	1/3	内面に花文			少ない	灰白	主郭上段	
29 39	白磁舟皿	—	—	5	底~細片	胎土に若干の黑色細粒を含む			少ない	灰白	主郭下段	
30 39 22	土鍋	径1.8:長5.5	—	—	—	完形			少ない	黄褐	東曲輪1	
31 39 22	〃	径1.8:長4.4	—	—	—	完形			少ない	黄褐	東曲輪1	
32 39 22	〃	径1.5:長3.8	—	—	—	ほぼ完形			少ない	黄褐	西曲輪3	
33 39 22	鋼鉢	径2.4	—	—	—	完形	豊後元宝				南曲輪2	
34 39	碗	8	—	—	—	1/4	磁器・灰白碗		少ない	灰白	南曲輪9	達房界
35 39	鉄釘	—	—	—	—	ほぼ完形	断面四角形の角釘				南曲輪9	

第1表 鶴尾山城跡出土遺物観察表

## 第4章 鶴尾山城跡の考察

今回の発掘調査は鶴尾山城跡のほぼ全域にわたり、今まで不明であった鶴尾山城跡の構造や築城時期を知る上で貴重な資料を得ることができた。以下、発掘調査によって得られた知見を整理して考察にかえたい。

### 1. 鶴尾山城跡の構造

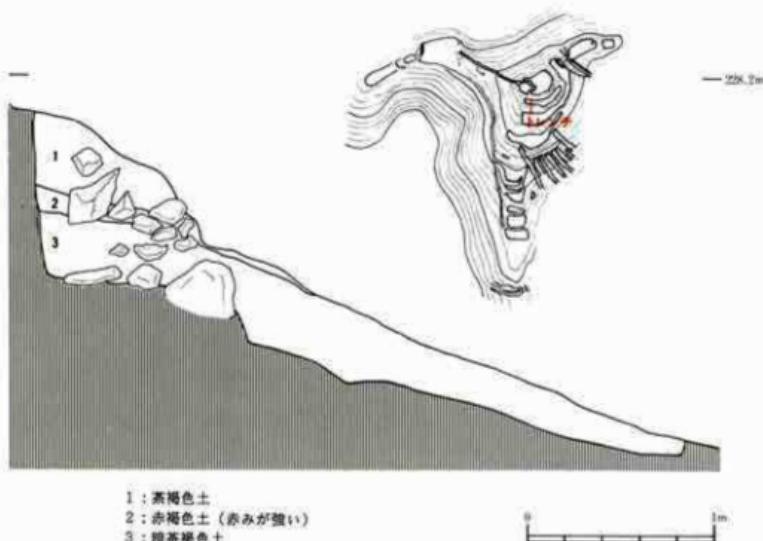
鶴尾山城跡は山頂に上下2段の主郭部、三方の尾根上の南に9つの曲輪、西に4つの曲輪、東に2つの曲輪、東南斜面に畝状空堀群、2つの堀切と土塁からなる。南曲輪1を含めた主郭部が中心的な位置を占め、南に階段状連郭式の曲輪と畝状空堀群、西に居住性の高い広い面積を持つ西曲輪1、東に2つの捨て曲輪を配している。曲輪内からは礎石建物・土塙・柱穴・集石が検出された。西曲輪1の建物が最も大きく倉庫や居住性のある建物と考えられる。また、南曲輪2の建物は畝状空堀群の上に配した櫓と考えられる。遺物はこれまでの山城の調査例と同様に少ないが、天目茶碗・皿類・擂鉢・有耳壺等の出土は注目される。鶴尾山城跡の特徴を列記してみると次のようである。

- ・曲輪・堀切・土塁は小規模なものである。
- ・主郭部を中心に、防御空間（南側・東側）と居住空間（西側）を分化させた、一定の企画のもとに構築されている。
- ・南側からの攻撃を意識して構築されており、北側は裏になる。
- ・縄張りからみると、三方の尾根の生かした曲輪の配置がなされ城郭全体のバランスがよい。
- ・城内への通行が西側の林蔭院（城館推定地）から行なわれていることから、居館と麓の集落とのつながりが強い。
- ・城内の曲輪は通路でつながっており、細かい造成が行なわれている。

以上、鶴尾山城跡は小規模ながら一定の企画のもとに造られた防御機能の高い城である。

### 2. 鶴尾山城の構築

曲輪の構築は切土と盛土によって行われ、三方の尾根続きの方向に軸線を整えている。調査期間が十分でなかったことから、各曲輪間にトレンチを入れて調査したが、構築過程を十分に明らかにできなかった。ほとんどのトレンチは地山との分層ができなかつたが、第40図の主郭下段のトレンチでは、地山から石垣状の角礫や円礫が検出され、主郭部においては石を張りつけた後、地山の土を叩きしめて強化したと考えられる。また、畝状空堀群の構築が天文10年代から永禄年間、虎口の構築が天正年間と考えられることから、築城後、何度も改修がなされたと推定される。



第40図 主郭下段トレンチ断面図

### 3. 鶴尾山城の時期

前述したように歎空堀群の構築が天文10年代から永禄年間と考えられること、また出土遺物が瀬戸美濃の大窯期のものがほとんどであることから考えると、鶴尾山城跡の築城時期は前述した江戸時代に書かれた文献にある1550年代と一致する。また、南側に向いていることから考えて、築城当時、東殿山城の支城であったと考えられる。その後、城主遠藤盛数が東氏を滅ぼし、八幡城を築くと、鶴尾山城はその支城として位置付けられた。また、虎口の構築が天正年間と考えられることから、改修されたのであろう。しかし、その後、改修が行なわれた様子がないこと、出土遺物のほとんどが大窯期のものであることから考えて、16世紀末に廃城になったものと考えられる。文献では林廣院の寺領となつたとされている。

以上、鶴尾山城跡の発掘調査によって得られた知見を述べてきたが、鶴尾山城跡の構造と時期を明確にできたことによって、16世紀後半の山城の研究の材料を提供できたのではないか。

## 第5章 深戸遺跡の調査

### 第1節 基本的層序

本調査区域は山麓から長良川に向かって南北に斜面上に広がり、レベル差はA区とR区で約18mある。1・2区は圃場整備によって擾乱を受けているが、他はほぼ安定した状況で堆積していた。本遺跡における基本的層序は下記の通りである。

#### 第Ⅰ層（表土）

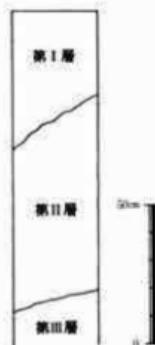
10YR<sup>5/2</sup>/の黒褐色土である。現表土及び耕作土で、草根が多く、厚さ30~50cmを測る。細石を含み、やや粘性がある。この土層下部から中近世陶磁器が出土している。なお、第Ⅰ層は一部重機で掘削し、土層模式図・土層図においても省略した。

#### 第Ⅱ層（黒色土）

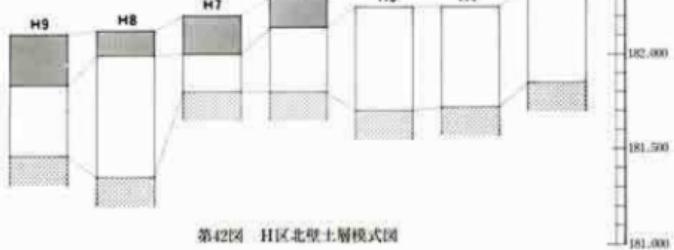
10YR<sup>5/2</sup>/の黒色土である。色調は非常に黒く、漆黒色土といえる。軟質で粘性があり、細石を多く含む。厚さ40cm~70cmであるが、第Ⅱ層を視覚的に分層することはできなかった。中近世陶磁器等が多く出土し、遺物包含層である。

#### 第Ⅲ層（褐色土）

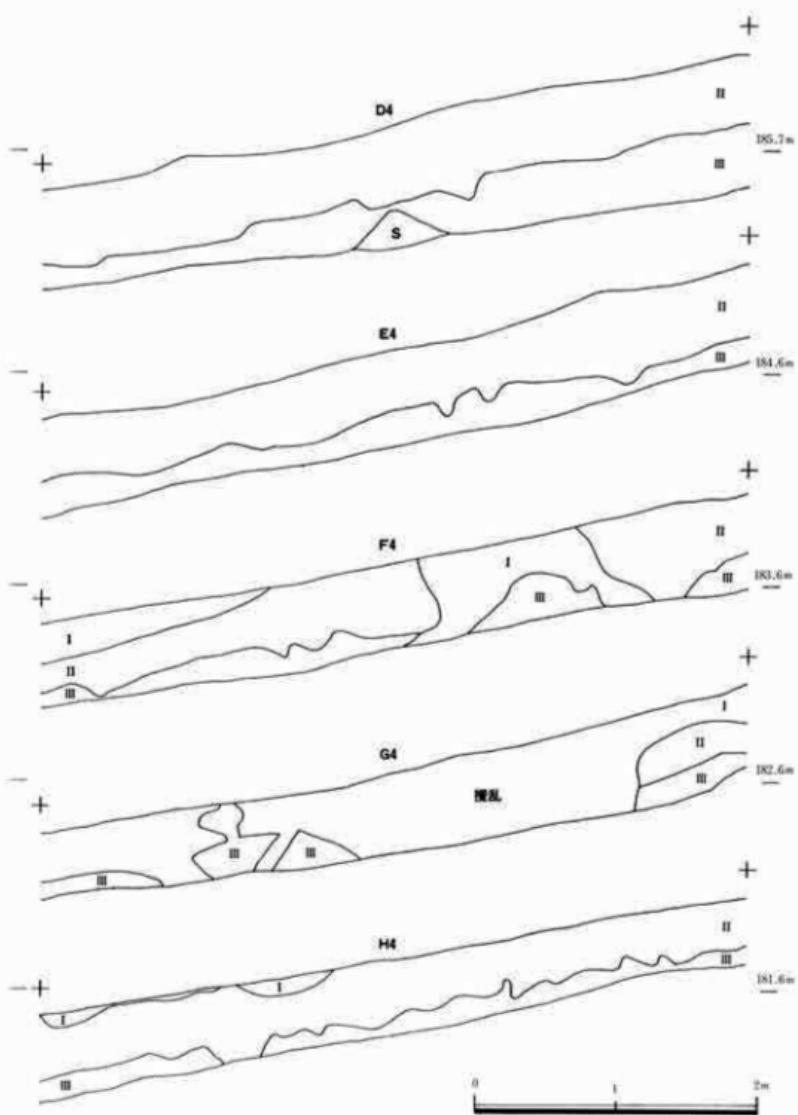
10YR<sup>5/2</sup>/の褐色土である。拳大の礫を多く含む粘質土である。地山層と考えられる。第Ⅲ層上面から遺構を検出した。



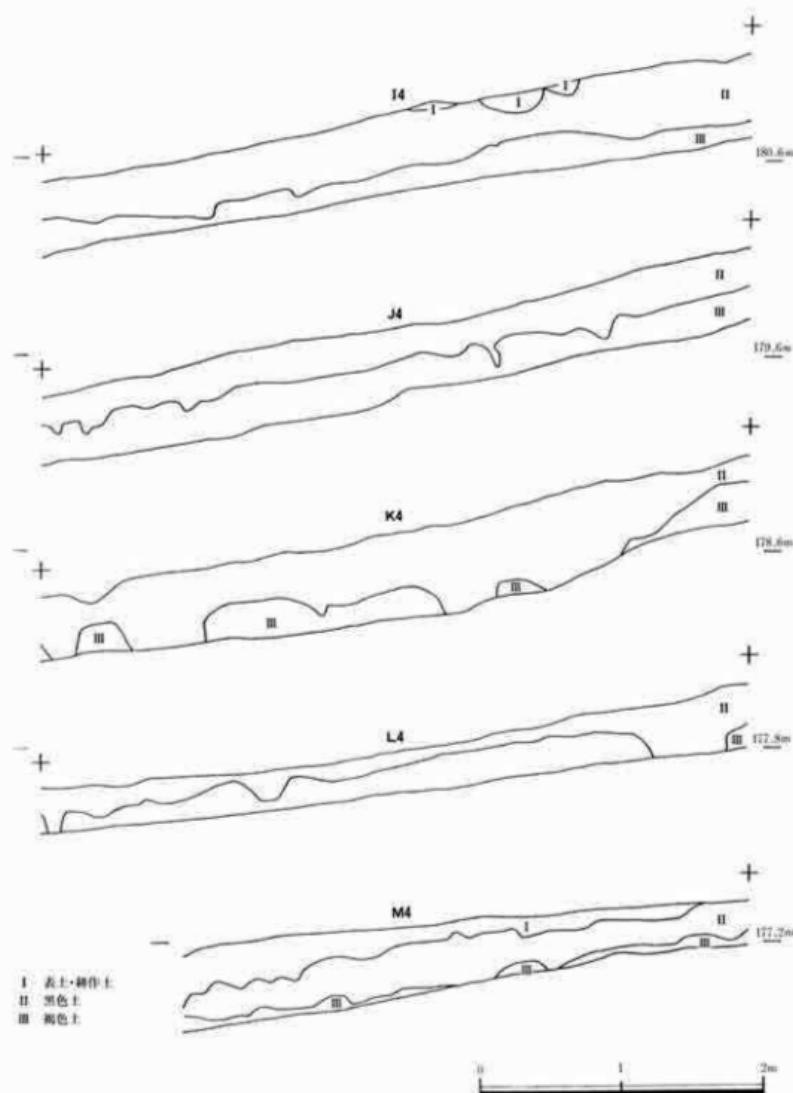
第41図 基本的層序



第42図 H区北壁土層模式図



第43圖 4區西壁上層圖(1)



第44図 4区西壁土層図(2)

## 第2節 遺構

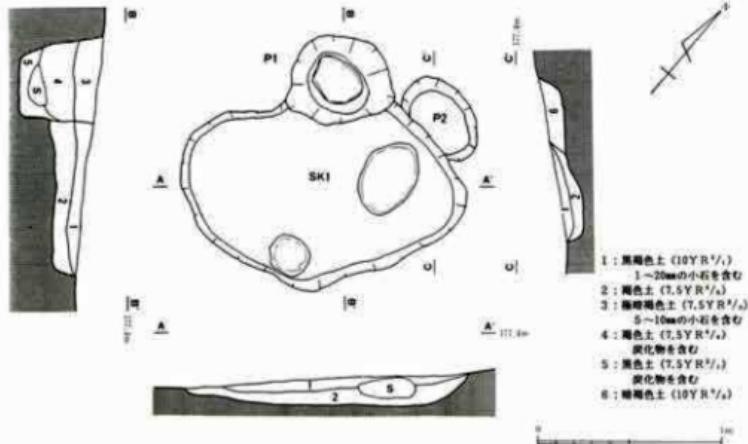
### 1. 遺構の分布

検出された遺構は土壌4基、柱穴等のピット群、性格不明の遺構3基である。遺構はすべて第III層（褐色土）の上面において確認した。遺構のほとんどが調査区の南側、特にK～M—3～5区にまとまっている。ただし、M区の南側は圃場整備の際、道路がつくられており、遺構の広がりやつながりは不明である。これらの遺構は出土遺物から中世から近世に属するものと考えられる。なお、遺構に伴う遺物点数（接合前の破片数による）は第2表に示した。

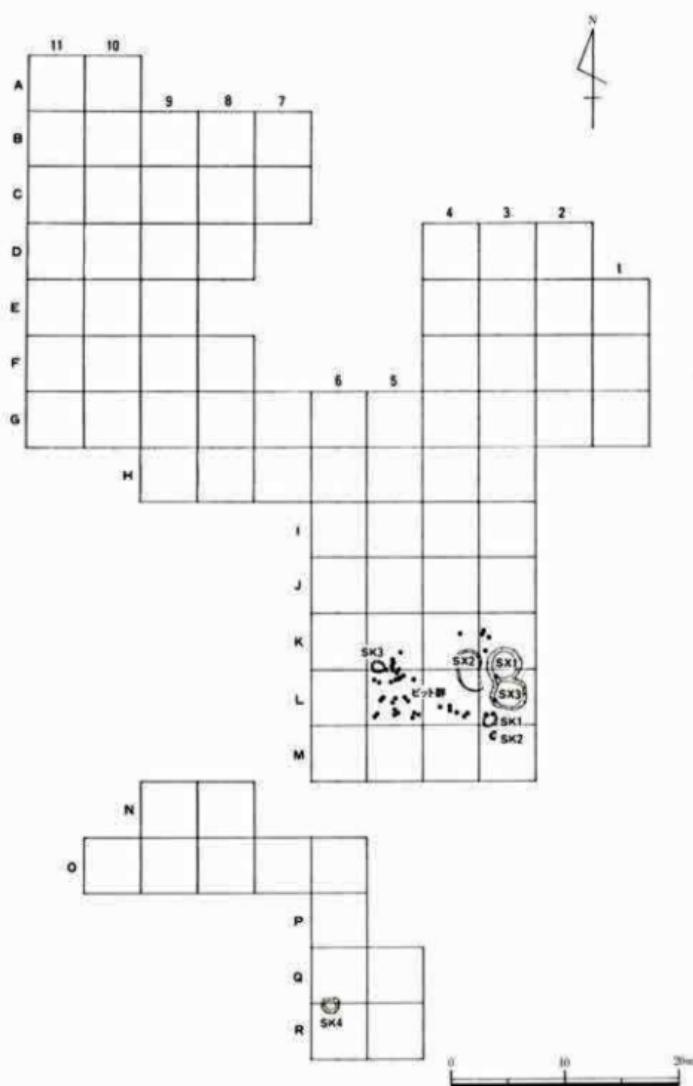
### 2. 遺構

#### SK1

L・M3区からピット1とピット2と切り合う形で検出された土壌である。ピット1がSK1を、SK1がピット2を切っている。形状は橢円形を呈し、長径は160cm、短径は100cmを測る。確認面からの深さは約20cmである。理土は黒褐色土（10YR<sup>5/2</sup>/1）と褐色土（7.5YR<sup>2/2</sup>/2）の2層になっている。褐色土はやや粘質でしまりがある。河原石が2個、遺物は山茶碗の小破片が2点と小礫にまじって打製石斧1点出土した。出土遺物から中世に属するものと考えられる。ピット1は深さ45cmで、河原石が1個含まれており、礫石をもつ柱穴と考えられる。ピット2は深さ10cmで非常に浅い掘り込みである。



第45図 SK1実測図



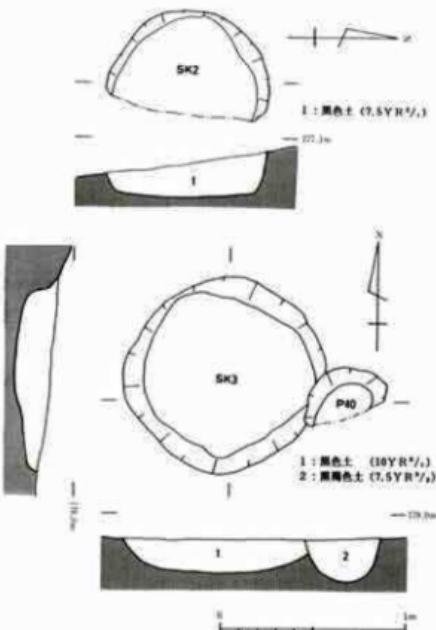
第46図 遺構分布図

## SK 2

M 3 区の北西隅から検出された半円形の土壙である。圓場整備により半分は滅失している。直径90cmで、中央部の確認面からの深さは20cmを測る。埋土は黒色土(7.5YR<sup>1/2</sup>)で、拳大の焼礫を数個、径20~30mmの小石を多く含む。遺物は山茶碗(遺物番号79)と登窯期の灰陶器の小破片が各1点出土した。

## SK 3

K・L 5 区から検出されたほぼ円形の土壙である。一部ピット40に切られている。直径は110cmで、中央部の確認面からの深さは18cmを測る。埋土は粘性のある黒色土(10YR<sup>1/2</sup>)で第II層に近い。山茶碗3点(遺物番号77・92)と青磁碗細片1点(遺物番号142)が出土した。92は、山茶碗のはば完形の皿である。遺物から13~14世紀のものと考えられる。



第47図 SK 2・SK 3実測図

第2表 遺構内出土遺物一覧表(破片数による)

遺構	石器	山茶碗	吉瀬戸瓶	大室期	登窯期	中国陶磁	常滑製品	土鍤	金属製品	銅錢	石製品	計
SK 1	1	2										3
SK 2		1			1							2
SK 3		3				1						4
SK 4		3						1				4
ピット群	1	2	1				1	17		1	1	24
SX 1		3	2	2	1	2	2	2				14
SX 2		12	1	2	3	1		6	1		1	26
SX 3	1	1	1	4	12						2	21
計	3	27	5	8	17	4	3	26	1	1	3	98

## SK 4

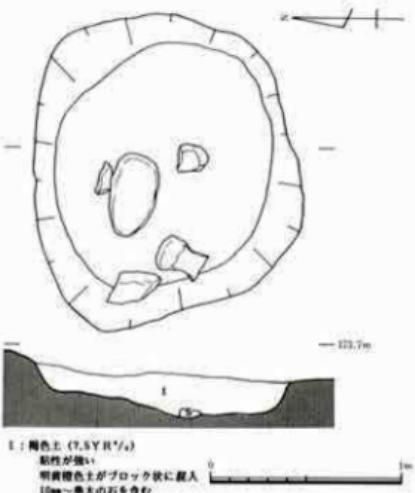
Q・R 6 区から検出されたほぼ円形の土壤である。長径160cm、短径140cm、中央部の確認面からの深さ20cmを測る。埋土は粘性が強い褐色土(7.5YR%)で明褐色土(10YR%)がブロック状に混入している。河原石1個と径10mm～拳大の石が含まれている。遺物は山茶碗の細片3点と土錘1点が出土した。出土遺物から中世のものと考えられる。

## ピット群遺構

K・L—3～5区で直径約20cm～90cmのピットが45個検出された。深さは10cm～60cmを測る。柱穴等のピットと考えられ、この区域にまとまっているためピット群とした。埋土は黒褐色土と黒色土であった。

ピット19、ピット22、ピット32、ピット16、ピット10は径30～40cmの河原石の礎石をもつ柱穴と考えられる。この5個のピットは330～360cmの方形を呈すが、ピット16とピット10の南側のM・N区は圃場整備の際、道路をつけるため搅乱されており、礎石建物の大きさは不明である。また、ピット1も径25cmの河原石をもつ柱穴と考えられる。

遺物は、ピット10から砾石1点（遺物番号196）、ピット21から銅鏡の細片1点、ピット22から山茶碗の細片1点、ピット24から土錘1点（遺物番号152）、ピット29から土錘7点と石錘1点（遺物番号44）、ピット30から山茶碗の細片1点と土錘3点、ピット36から土錘6点（遺物番号156・162・163・167）と古瀬戸期の天目茶碗の破片1点（遺物番号100）と常滑製品の破片1点が出土した。100の天目茶碗の破片はSX1出土の破片と接合した。ピット36はピット群の中でもいちばん深い掘り込みで、深さ60cmを測る。ピット29と共に土錘が多く出土し、炭化物も含まれていた。土錘等の廃棄のピットと考えられる。出土遺物から、これらのピット群は中世の遺構と考えられる。



第48図 SK 4 実測図

**SX 1**

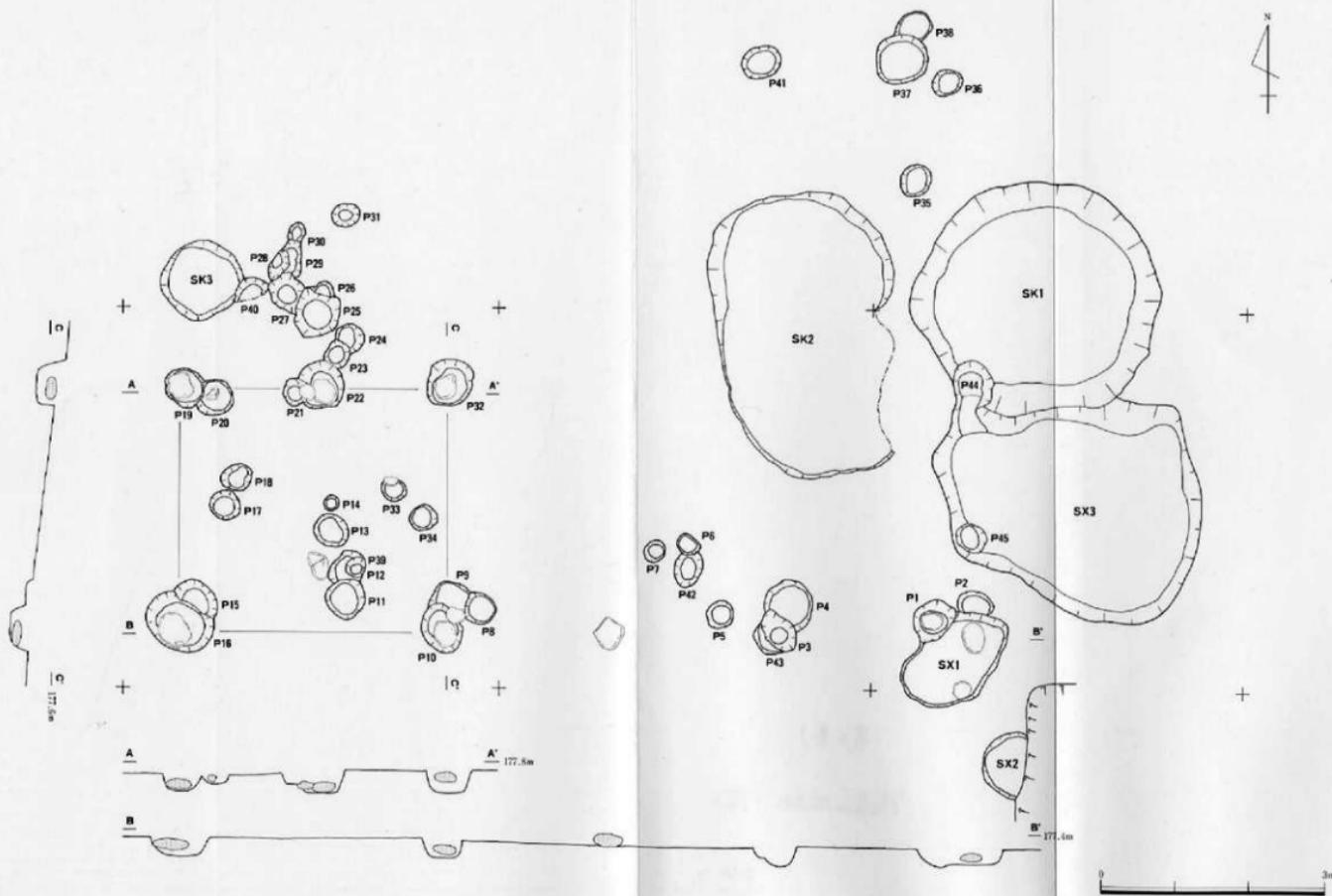
K・L 3 区で検出された円形のプランをもつ土壙である。第Ⅲ層上面において確認された。直径300~330cm、確認面からの深さ約50cmを測る。一部ピット44に切られている。土壙の中央部に東西150cm、南北100cmの範囲で焼土層が検出された。焼土は粒子の細かい赤色土(10R%)・橙色土(5YR%)と明黄褐色土(10YR%)で深さ約30cmを測る。予想外に厚い焼土層である。埋土は、黒褐色土で、円碟や角碟も数個含まれていた。壁面は焼けた跡は確認されなかった。出土した遺物は、山茶碗3点、瀬戸美濃陶磁器5点、中国陶磁2点、常滑製品2点、土鍾2点の14点(第2表参照)である。図示したのは古瀬戸期の天目茶碗の破片(遺物番号100)1点である。出土遺物から中世から近世初頭にかけての遺構と考えられるが、他に類例がなく、性格は不明である。

**SX 2**

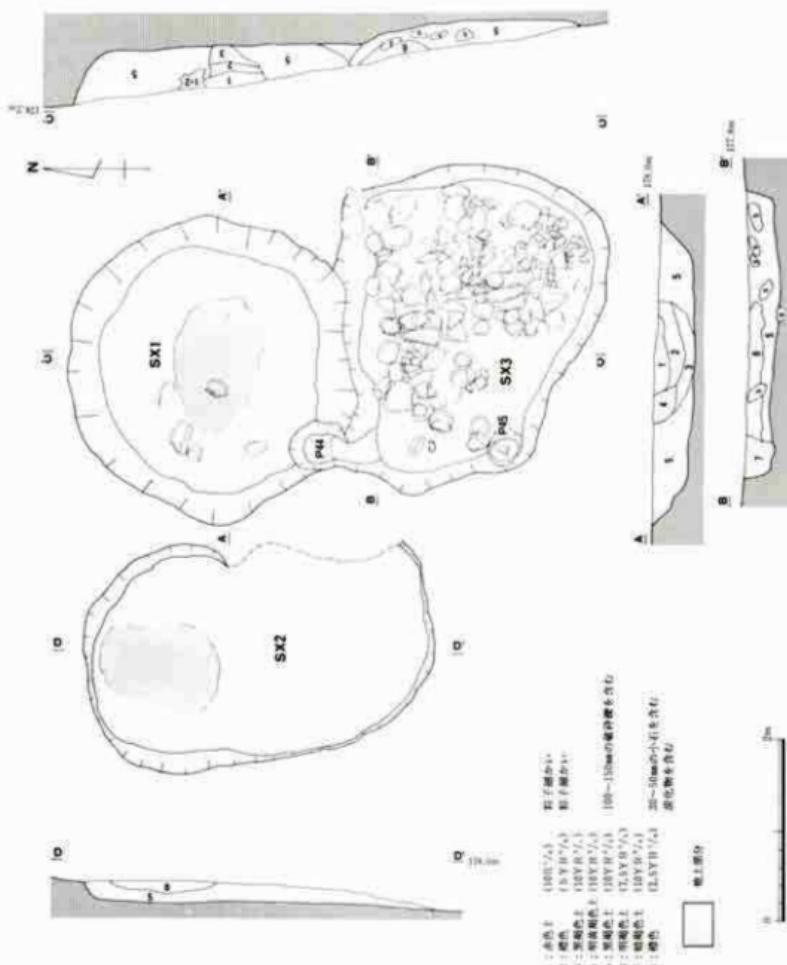
K・L 2 区で検出された楕円形の土壙である。第Ⅲ層上面において確認されたが、南半分はプランがはっきりと確認できず、北半分は円形の土壙の可能性もある。東西250cm、南北380cm、確認面からの深さ約20cmを測る。北半分の中央部には、東西100cm、南北120cmの範囲で焼土層が検出された。焼土は橙色土(2.5YR%)で、径30~50mmの小石と炭化物が含まれており、深さ15cmを計る。埋土はSX 1と同じ黒褐色土である。壁面は焼けた跡は確認されなかった。出土した遺物は山茶碗、瀬戸美濃陶磁器、中国陶磁、土鍾、金属製品、石製品など26点(第2表参照)であった。図示したのは山茶碗(遺物番号82)、土鍾(遺物番号153・160・170)、鉄釘(遺物番号176)で、南半分からの出土が多かった。形状はSX 1とよく似ているが、性格は不明である。出土遺物から中世から近世初頭にかけての遺構と考えられる。

**SX 3**

L 3 区のSX 1 の南側で検出された楕円形に近い土壙である。第Ⅲ層上面において確認された。長径380cm、短径280cm、確認面からの深さ35cmを測る。一部ピット44、45に切られている。SX 1・SX 2 と形状を異にし、数多くの河原石や角碟が検出された集石遺構である。径30cm程の焼けた河原石も多く含まれていた。埋土は、明褐色土(7.5YR%)と黒褐色土(SX 1と同じ)である。明褐色土は焼土とも考えられる。出土した遺物は打製石斧、山茶碗、瀬戸美濃陶磁器、石製品など21点(第2表参照)であった。図示したのは打製石斧(遺物番号66)、大窯期の天目茶碗(遺物番号110)、登窯期の大平鉢(遺物番号131・132)・擂鉢(遺物番号133)、石臼(遺物番号197)であり、打製石斧は角碟に混入したのであろう。出土遺物から、中世から近世の遺構と考えられるが、性格は不明である。SX 1 と SX 2 と関連した遺構と考えられる。



第49図 ピット群造構査測図



第50図 SX 1-3実測図

## 第3節 遺物

出土遺物としては縄文土器、石器、陶磁器、土製品、金属製品、銅錢、石製品があげられる。時代としては中世から近世の遺物が多い。層位・種別出土点数については第3表を参照されたい。陶磁器については山茶碗（白瓷系陶器）（註16）、瀬戸・美濃陶器（古瀬戸期）、瀬戸・美濃陶器（大窯期）、瀬戸・美濃陶磁器（連房式登窯期）、中国陶磁、常滑製品、伊万里製品、土師器に分ける。尚、明治以降の近現代の陶磁器も破片数にして100点程出土したが割愛する。

また、遺物の説明の際、法量等は省略した。第5表～第11表を参照されたい。

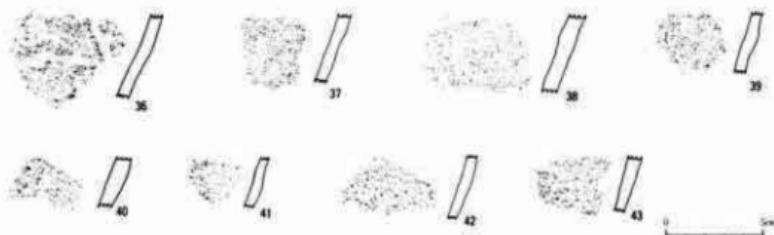
## 1. 縄文時代の遺物

## (1) 土器 (36~43)

本調査区より土器片は9点出土している。このうち8点を図示した。接合関係こそ認められないものの同一個体と考えられる資料もあり、個体数は8個体である。いずれの土器片もローリングを激しく受けしており、文様・調整等の観察が困難なため、時期については言及できない。遺構が存在しないこと、資料数が少ないと、地形等考え合わせても縄文時代の純粹な包含層が存在したとは認め難い。土器片の分布は調査区北東部に限られるが、当該地区には圃場整備

第3表 層位・種別遺物出土点数（接合前の破片数）

種類	I層	II層	遺構内	総数
縄文土器	0	9	0	9
石器	22	65	3	90
山茶碗	155	282	27	464
瀬戸・美濃陶器（古瀬戸期）	12	48	5	65
瀬戸・美濃陶器（大窯期）	10	63	8	81
瀬戸・美濃陶磁器（登窯期）	130	292	17	439
中国陶磁	10	33	4	47
常滑製品	4	20	3	27
伊万里製品	0	6	0	6
土師器	1	6	0	7
土製品	3	37	26	66
金属製品	5	7	1	13
銅錢	0	12	1	13
石製品	0	3	3	6
総数	352	883	98	1,333



第51図 深戸遺跡出土遺物（1）土器

の際に土が持ち込まれており、この土中に遺物が混在していたのであろう。

36は楕円形の沈線の区画中に刺突がみられ、内面は丁寧に調整されている。薄手で胎土には1mm以下の砂粒が少量含まれる。37~43の7点はG2区より出土しており、いずれもやや厚手で、胎土には1~3mm大の石英等の小礫粒が多く含まれる。38、39には細い原体による条痕が観察される。42は底部に近い部位のものであろうが、その他はすべて胴部である。38・40は接合関係こそ認められないものの同一個体と思われる。

## (2) 石器

总数92点を数える。器種別の構成は、石鎌6点、削器1点、石核2点、剥片・碎片14点、敲石・磨石6点、打製石斧61点である。すべてI・II層の出土である。打製石斧・敲石・磨石を除いた23点中2点は安山岩を用いているが、残る21点は青灰色・灰色のチャートを用いている。当地域周辺で良質のチャートが採集できることから、石材は在地のものを多く用いたと思われる。

### 石鎌 (44~49)

6点中2点が有茎鎌、4点が無茎鎌である。無茎鎌は、さらに基部が平らな平基鎌1点、基部に浅いえぐりを入れた微凹基鎌1点、深いえぐりを入れた凹基鎌2点に細分される。いずれも押圧剥離によって丁寧に仕上げられている。44、45は有茎鎌である。無茎のものと比べて肉厚で、返しは発達しない。46は基部を折損するが調整剥離のリングの様子から欠損部は少ないと判断され、平基鎌に分類した。安山岩製で表面は全面白く風化し、折損面にも同様の風化がみられる。頭部の欠損は折れではなく加熱によるものである。47は図右の中央付近に素材剥片の主要剥離面を残し、図左の右上縁辺・中央に素材の背面を残す。背面と主要剥離面の剥離方向は同一で、素材の打点を一方の脚として加工している。図左の面は調整が浅く、特に左側縁

脚部付近は刃鋸れ状の微細な剝離である。素材となった剥片が薄く、調整も整形が主目的になったものと思われる。48、49は凹基鉄である。48はU字状にえぐりを入れるが片脚部折損。49はV字状にえぐりを入れるが両脚部折損。縁辺や鋸歯状を呈す。

#### 削器 (50)

刃部は両側縁に作出され、下部は折損する。背面右の刃部はバルブを折断によって除去した後、主要剝離面側へ浅い剝離を施し、背面側へ深く緩角度の剝離を施して作出している。刃角はおよそ45°である。背面左の刃部は主要剝離面・背面両面に同じような角度・深さで剝離を施し作出されている。刃角はおよそ45°である。

#### 石核 (51)

2点出土している。いずれも剥片を素材とし、打面・作業面を固定しないでランダムな剝離を行なっている。

#### 剝片・碎片 (52・53)

14点出土している。大きさ・背面の状況などばらばらである。53は風化の浅い安山岩製である。背面もボジ面で、剥片のバルブを除去するように剝離したものである。

#### 敲石・磨石 (54・55)

敲石・磨石として、敲打痕・磨面を有する円礫・亜円礫を一括した。6点出土している。いずれも細長い砂岩を用い、端部に使用の痕跡が認められる。

#### 打製石斧 (56~69)

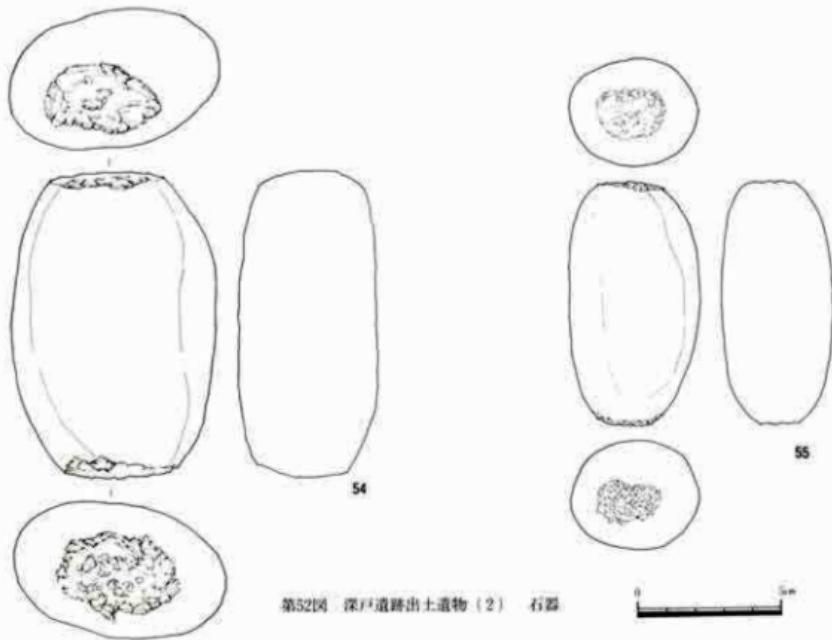
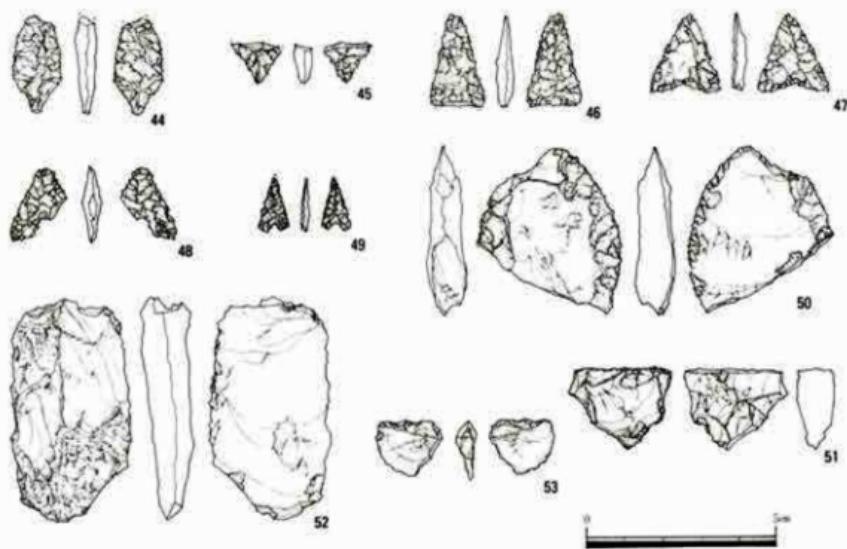
61点出土し、石器総数の3%を占める。そのうち完形品は37点である。石材は、砂岩が49点(80%)で最も多く、他には安山岩8点、流紋岩2点、凝灰岩・ひん岩各1点あり、付近の河原等で採集可能な石材を使用している。形態は短櫛形が38点、撥形が18点、不明が5点であるが、撥形の中には調整によってではなく、素材剥片の形状のまま基部が取束するものも含まれる。自然面・主要剝離面を大きく残したもののが目立ち(註17)、縁辺に浅い調整を加えて整形しただけの簡易製品が多い。数量的な多さとともに、打製石斧の需要の大きさが推察できる。

## 2. 山茶碗

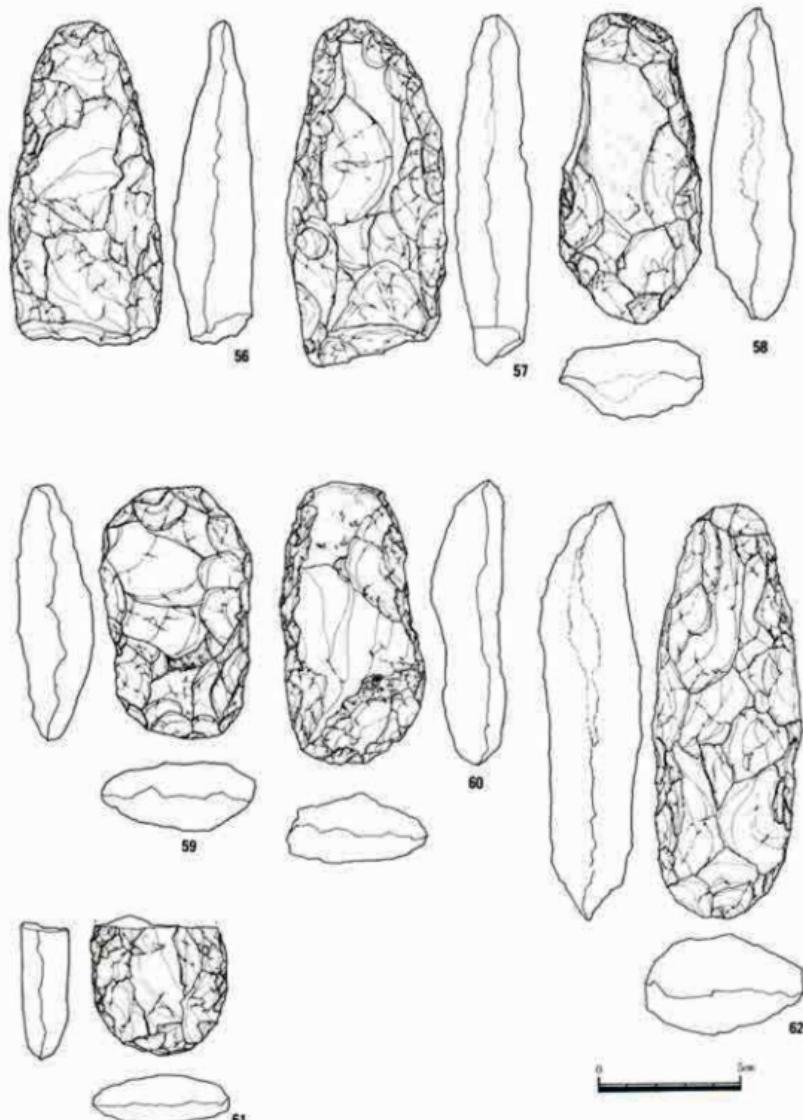
山茶碗の出土点数は調査区域内でいちばん多く、器種としては碗、皿、鉢(大平鉢・片口鉢)がある。完形資料は少なく、ほとんどが細片であるが、東海地方北部系(均質手)(註18)の碗が多い。成形技法はロクロ水挽成形によるものである。胎土は緻密・硬質で、色調は含有する金属成分の量(主に鉄)や焼成方法の差により様々であるが、灰白色や灰黄色を呈するものが多い。

#### 碗 (70~88)

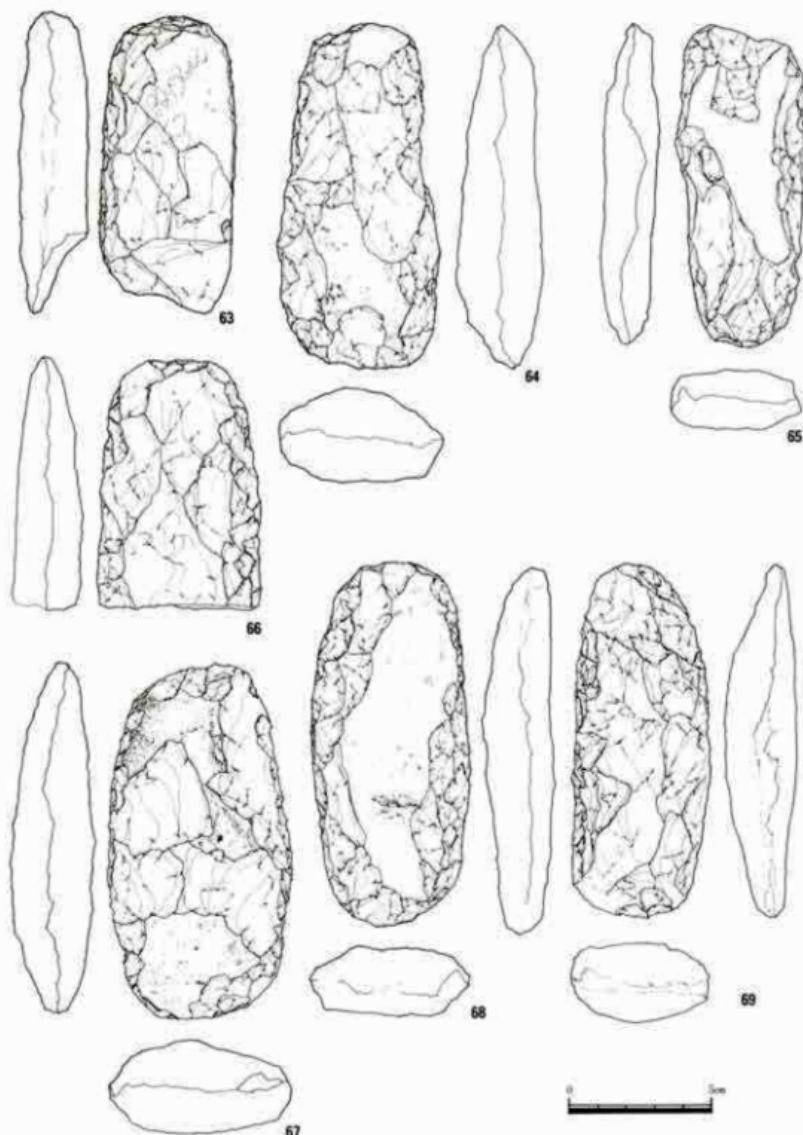
高台は断面が三角形や四角形の付け高台であるが、多くは貧弱な高台でつぶれて変形してい



第52図 深戸道路出土遺物(2) 石器

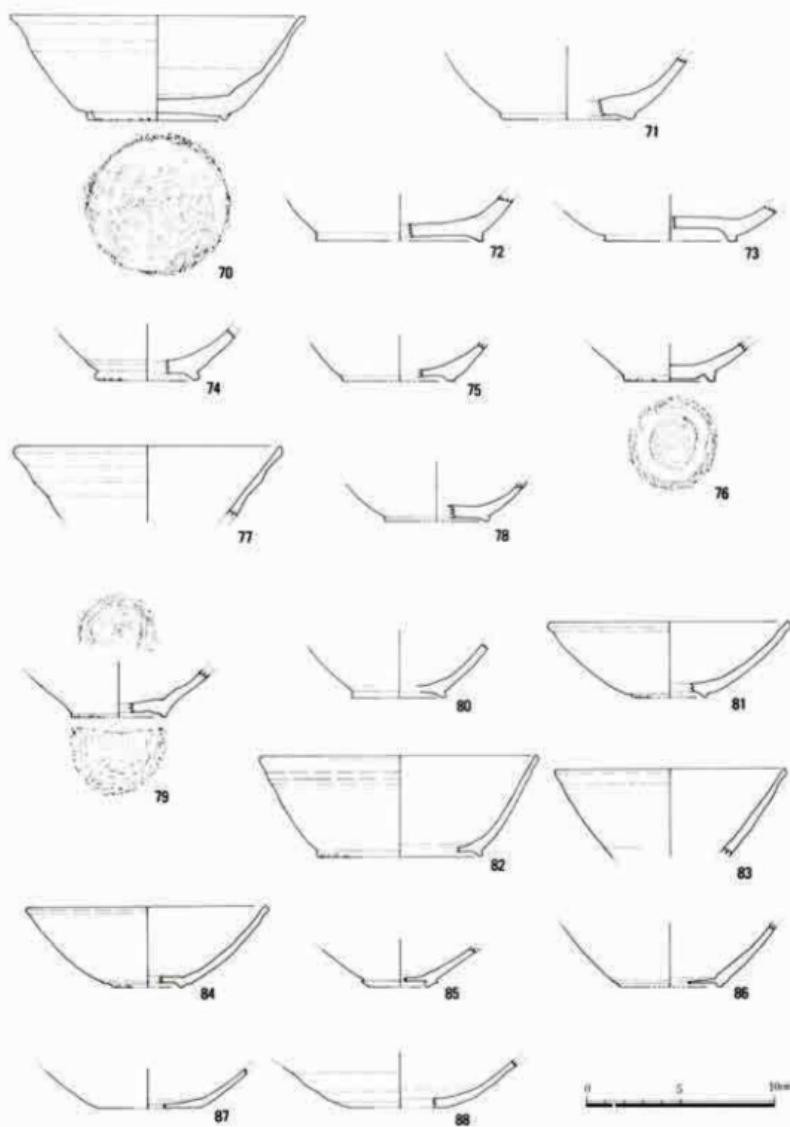


第53図 深戸道路出土遺物（3） 打製石斧



第54図 深戸遺跡出土遺物(4) 打製石斧

る。高台端部にもみがら圧痕、底裏に回転糸切り痕を残しているものが目立つ。無高台碗も数少ないが存在する。19点図示したがすべて北部系である。70、底部が扁平で厚く、体部にわずかに丸みをもち、口縁部で軽く外反し、端部が面取り整形される。内面は滑らかであるが、外面はロクロ水挽痕を残す。底裏に回転糸切り痕を残す。高台はつぶれて変形しており、端部にもみがら圧痕が顕著に認められる。底部内面中央に指頭で軽く撫でた調整痕(指圧痕)が残る。口縁部と内面体部に自然釉が付着している。胎土は灰白色を呈す。浅間窯下1号窯式に比定される(註19)。71、底部は扁平でやや丸みをもって立ち上がる。内面は使用によりかなり磨耗している。高台の断面は四角形で、もみがら圧痕はみられない。胎土は灰白色で、鉄粉の熔出が認められる。72、内面底部が浅い凹状を呈す。高台はつぶれている。73、底部は扁平で、底裏に回転糸切り痕を残す。71~73は丸石3号窯式~窓洞1号窯式に比定される。74、内面底部中央がわずかに窪み、底裏に回転糸切り痕を残す。付け高台は丁寧なナデ調整で接着されている。もみがら圧痕が顕著に認められる。白土原2号窯式に比定される。75、内面底部はわずかに窪み、指圧痕が残る。胎土は灰白色を呈し、内面にわずかに自然釉が付着している。76、底部内外面にもみがら圧痕が残る。内面底部中央はわずかに窪み、指圧痕が残る。付け高台は丁寧なナデ調整で接着されている。胎土は破損面が灰白色、器面が灰褐色を呈す。内面に自然釉が付着している。77、口縁は面取り調整が施され、小さな玉縁状に整えている。内外面ともロクロ痕が目立つ。器厚は薄い作りになっている。胎土は灰白色を呈し、内面に自然釉が付着している。78、内面底部に指圧痕が残る。高台は粗雑であるが、高台脇に押圧気味にしっかり付着している。79、付け高台はナデ調整で接着されている。内面底部に指圧痕、底裏に木目状圧痕が残る。底部内外面にもみがら圧痕が認められる。側面は押圧成形がなされている。胎土は灰黄色を呈す。80、内面底部に指圧痕が残り、付け高台はナデ調整で接着されている。ロクロ痕が目立つ。胎土は灰黄色を呈す。75~80は明和1号窯式に比定される。81、体部は丸みをもち、口縁部で軽く外反する。高台は小さく貧弱で、端部にもみがら圧痕が残る。82、外面体部は指圧調整がなされている。高台は小さく、断面が三角形の付け高台で、端部にもみがら圧痕が残る。胎土は灰黄色を呈す。83、口縁は軽く外反している。外面にロクロ痕が目立ち、内面に自然釉が付着している。81~83は大畠大洞4号窯式に比定される。84、高台脇から張りをもって立ち上がり、口縁は面取り調整が施される。高台径は小さく、薄い作りである。内面底部周縁に段が付けられている。高台はつぶれいるが、もみがら圧痕は残る。胎土は灰褐色を呈す。85、高台径は小さく、高台はつぶれて変形している。底裏に回転糸切り痕が残る。内面底部周縁部に段が付けられている。胎土は破損面が灰白色、器面が灰褐色を呈す。86、内面底部周縁に段が付けられ、中央は窪んでいる。外面体部に指圧痕が残る。胎土は灰褐色を呈す。84~86は大洞東1号窯式に比定される。87、88はいずれも無高台碗で、ロクロ痕が目立ち、底裏に回転糸切り痕が残る。87、胎土は灰白色を呈し、外面に指圧痕が残る。88、胎土は灰黄色を呈す。



第55図 深戸遺跡出土遺物（5） 山茶碗

いずれも脇之島3号窯式に比定される。

### 皿 (89~96)

底裏に回転糸切り痕が残るものが多く、口縁端部は面取り整形されたものと丸く調整されたものがある。89、口縁へ丸みをもって開き、口縁端部は丸く調整される。糸切り位置をやや下方に取り低い高台が形成されている。丸石3号窯式に比定される。90、口縁端部はやや肥厚で丸く調整される。89と同様に低い高台が形成される。内面に自然釉が厚く掛かり、壁肩が付着している。内面の磨耗は顯著である。胎土に砂粒をやや多く含みザラザラした感じである。91、底部は扁平で、底裏に回転糸切り痕が残る。内面に自然釉と砂粒が多く付着している。窯洞1号窯式に比定される。92、ほぼ完形で、ハの字状に開き、口縁は肥厚で丸く調整される。内面底部に指圧痕、底裏に回転糸切り痕が残り、木目状圧痕が認められる。ロクロ痕が目立つ。胎土は灰褐色を呈し、内面にわずかに自然釉が付着している。白土原1号窯式に比定される。93、張りをもって開き、口縁は肥厚である。内面底部の周縁が輪状にわずかに窪む。底裏に回転糸切り痕が残る。明和1号窯式に比定される。94、やや丸みをもって開き、口縁端部は面取り整形される。内面底部の周縁部に1条のロクロ痕が顯著に残る。底裏に回転糸切り痕が残る。胎土は灰白色を呈す。95、器高が低い小皿で、口縁端部は肥厚で丸みをもつ。94、95は大洞東1号窯式に比定される。96、滑らかな器面で口縁端部は面取り整形される。内面底部の周縁部が輪状に浅く窪む。大洞東1号窯式～脇之島3号窯式に比定される。すべて北部系の小皿であるが、90は胎土にガラス化し発泡している長石がみられ瀬戸系と考えられる。

### 鉢 (大平鉢・片口鉢) (97~99)

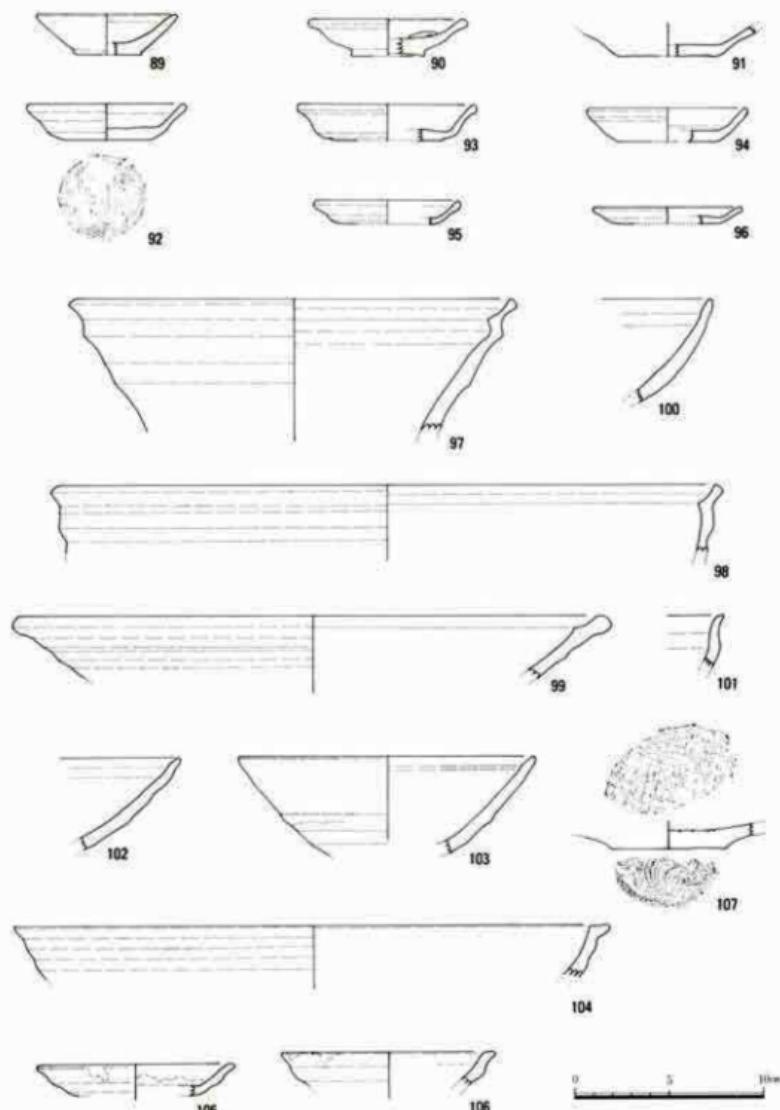
北部系のものはみられない。およそ4個体(7片)あるが、いずれも細片である。97、98は口縁が外反してくの字状の断面をもつ。胎土は暗灰色を呈す。97は外面にあばた状の凹凸を見る。99、口縁は外反して、端部は軽く面取りされる。胎土は灰褐色を呈す。いずれも、外面にヘラ削り調整が施される。

## 3. 瀬戸・美濃陶器(古瀬戸期)

時期的には古瀬戸後期のものが多いと考えられる(註20)。ただし、四耳壺など一部に古瀬戸前期のものと推定されるものもある。器種で確認したものは天目茶碗、平碗、折縁深皿、縁釉小皿、おろし皿、擂鉢、壺類である。

### 天目茶碗 (100・101)

天目茶碗と確認できる破片数は10点を数える。高台は削り出し高台で輪高台にしたものと内反りにしたものがあり、光沢のない鉄釉で化粧掛けを施すものと釉薬を施さない露胎部のものがある。釉薬は鉄釉を施すものと淡緑色の灰釉を掛けたものに分けられる。100は、口縁部が垂直に立ち上がり、端部は尖る。茶色系の鉄釉が内外面に施されている。101は、口縁部がくびれ、



第56図 深戸遺跡出土遺物（6） 山茶碗・瀬戸美濃陶器

端部は薄手である。外面は黒色系の鉄軸が施されるが内面は灰軸が含まれ黄褐色を呈す。いずれも古瀬戸後期後半に比定される。

#### 平碗 (102・103)

破片数にして8点を確認した。いずれも内面から外面体部にかけて浅黄色の灰軸が施されている。102、103とも口縁部が直線的に立ち上がり、端部は尖っている。102、胎土は淡黄色を呈し、内面にトチン痕が残る。103、胎土は灰白色で外面は釉薬の剥落がみられる。いずれも古瀬戸後期に比定される。

#### 折縁深皿 (104)

104は口縁部の破片で、灰軸が施されているが、内外面とも釉薬の剥落がみられる。古瀬戸後期に比定される。

#### 縁軸小皿 (105・106)

破片数にして14点を確認した。いずれも口縁部の細片である。口縁部内外面に灰軸が施されている。105は底部が扁平で、口縁はやや外反している。胎土は淡黄色を呈す。106、胎土は灰白色を呈す。いずれも古瀬戸後期に比定される。

#### おろし皿 (107)

107は底部の破片である。内面底部は扁平で刻線によるおろし目が格子状に施されている。底裏に回転糸切り痕を残す。胎土は淡黄色で、釉薬は施されていない。古瀬戸後期に比定される。

#### 擂鉢 (108)

108は赤褐色を呈する鉄軸が施され、口縁は内湾している。古瀬戸後期後半に比定される。

#### 壺類 (109)

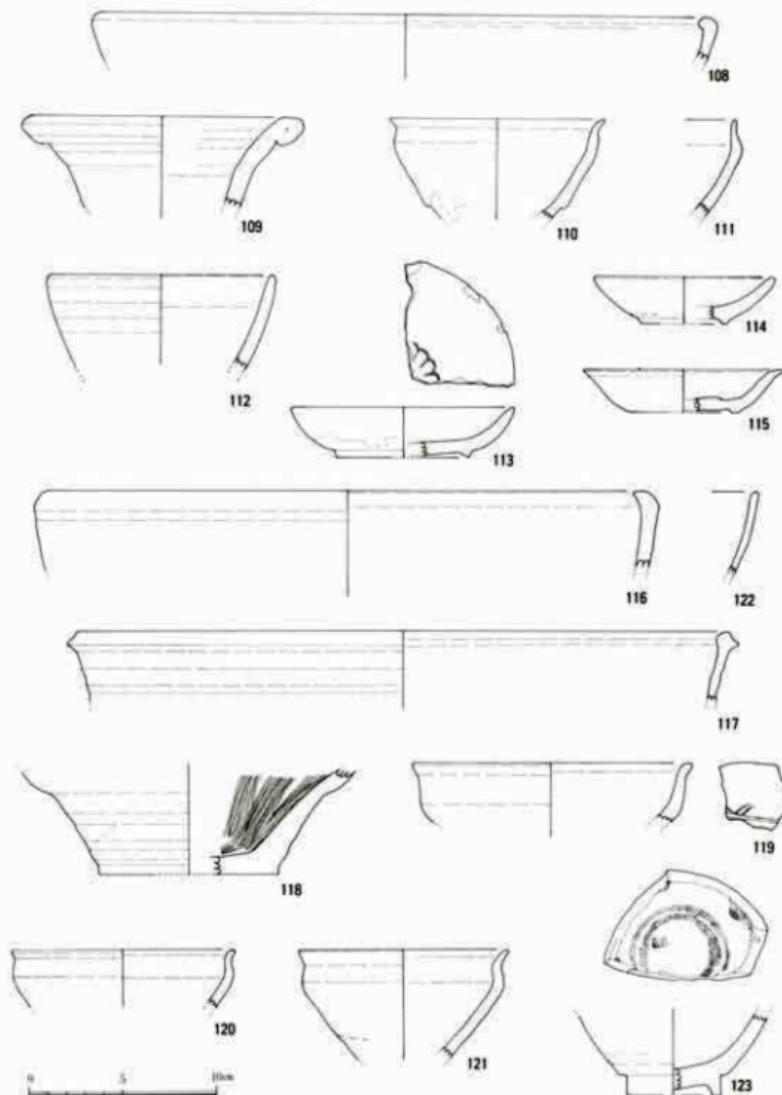
破片数にして19点を確認した。いずれも細片で、孔が退化してない装飾用の耳が貼り付けられたものもある。109は口縁部の破片で、玉縁状の口縁、淡緑色の灰軸が施されているが内外とも釉薬の剥落がみられる。古瀬戸後期に比定される。

### 4. 瀬戸・美濃陶器（大窯期）

大窯製品（註21）として図示したものには、天目茶碗、丸碗、丸皿、稜皿、擂鉢、志野向付がある。その他の器種としては、端反皿、内はげ皿、折縁皿、徳利、小杯、小壺、甕などを確認した。

#### 天目茶碗 (110・111)

破片数にして6点を確認した。110は、胴部がやや丸みをもって開き、口縁部でくびれ口縁部はやや外反する。外面腰部から内面にかけて鉄軸が施され、外面腰部から底部にかけ鉄軸が施される。大窯1段階に比定される。111は、口縁部が直線的に立ち上がる。茶色系の鉄軸が施され、露胎部は無釉である。大窯3段階に比定される。



第57図 深戸遺跡出土遺物(7) 潤戸美濃陶器

**丸碗** (112)

112はやや丸みをもって立ち上がり、口縁端部は尖る。茶色系の鉄軸が施され、内外面に菊花様の灰流しがなされている。大窯3段階に比定される。

**丸皿** (113・114)

破片数によって18点を確認した。113はやや厚手で、丸みをもって立ち上がり、口縁端部内面が軽く面取りされる。高台は低い削り出し高台で、ロクロ痕が顕著である。内面底部中央に菊花印文花が押印してある。口縁部から内面に銅錆軸が施され、外面腰部と高台部は露胎である。胎土は灰黄色を呈す。大窯4段階に比定される。114は丸みをもって立ち上がり、口縁端部はやや丸みをもつ。全面に灰軸が施される。胎土は灰黄色を呈す。大窯2段階に比定される。

**積皿** (115)

115は、体部八の字状に開き、口縁部がやや外反する。底部は低い削り出し高台で、内面底部は扁平で円錐ピン痕が残る。全面に鉄軸が施され、底裏を内はぎにしている。大窯3段階に比定される。

**擂鉢** (116～118)

116、117は、口縁端部が上方に延び縁帯を形成している。いずれも全面に錆軸が施されている。大窯1段階に比定される。118は体部下半から底部の破片で、赤褐色を呈する錆軸が施されている。内面は磨耗して使用痕が著しい。大窯後半に比定される。

**志野向付** (119)

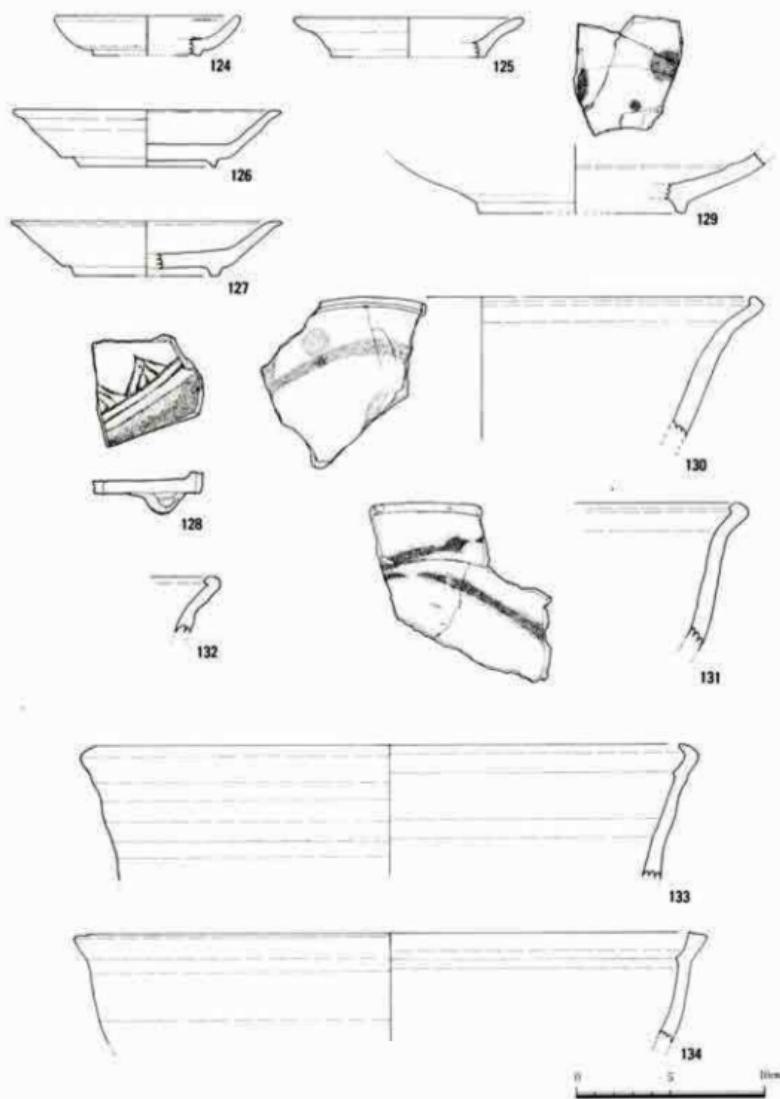
119は口縁部細片で、口縁端部はやや外反している。長石軸が掛けられ、外面は火色が浮かび、ヘラで器面調整が施される。胎土は黄褐色を呈す。大窯4段階に比定される。また、志野、鼠志野の碗・皿類の破片も17点出土したが、いずれも細片のため図示しなかった。

**5. 濑戸・美濃陶器（連房式登窯期）**

近世の連房式登窯製品(註22)と考えられるものは、ほとんどが細片であるが出土点数は400点を越える。17世紀前葉の織部製品もみられる。器種で確認したものは天目茶碗、平碗、丸碗、塗り分け碗、広東茶碗、上絵付け碗、丸皿、端反皿、向付、大平鉢、片口鉢、擂鉢、香炉、德利、壺類などがある。

**天目茶碗** (120・121)

120は口縁部細片で丸みをもって立ち上がり、口縁端部は外反する。茶色系の鉄軸が施される。連房II期に比定される。121は口縁部でくびれ、口縁端部はやや外反し尖る。光沢のある黒色系の鉄軸が施される。外面腰部は露胎である。胎土は灰白色を呈し、緻密である。連房II期に比定される。



第58図 深戸遺跡出土遺物（8） 濱戸美濃陶器

**丸碗** (122・123)

122は口縁部細片で切り立つ形で、口縁端部は軽く面取りされる。茶色系の鉄軸が施される。連房Ⅰ期に比定される。123は厚手の碗で、丸みをもって立ち上がる。高台は削り出し輪高台で断面は四角形で、高台高は高い。丁寧なナテ調整が施され、高台脇は水平に削られる。長石軸が施され、外面腰部と高台部は露胎である。内面底部に鉄軸で2条の太めの同心円が描かれ、内面に銅緑軸が落ちている。胎土は灰黄色を呈す。連房Ⅰ期に比定される。

**丸皿** (124・125)

124、125は志野織部の丸皿で、内面に鉄絵が描かれている。124、腰部に棱をもち、口縁端部はやや丸く調整される。高台は低い削り出し高台である。長石軸が施され、内面口縁端部と底部周縁部に鉄軸で同心円が描かれる。連房Ⅰ期に比定される。125、腰部に棱をもち、口縁端部はやや厚く、面取りされる。全面に長石軸が施されるが、底裏の軸は剥ぎとられている。高台は低い削り出し高台で、底部内外面に円錐ピン痕が残る。連房Ⅱ期に比定される。

**端反皿** (126・127)

破片数にして11点を確認した。全て同質の端反皿で4個体と考えられる。126、127とも腰部に明瞭な棱をもち、八の字状に開き、口縁は外反する。高台は断面三角形の付け高台である。全面に御深井軸が施され、軸調は浅黄色で軸むらもみられる。底部には内外面とも4つの円錐ピン痕が残る。胎土は炉器質で灰黄色を呈す。連房Ⅱ期に比定される。126はほぼ完形資料である。

**向付** (128)

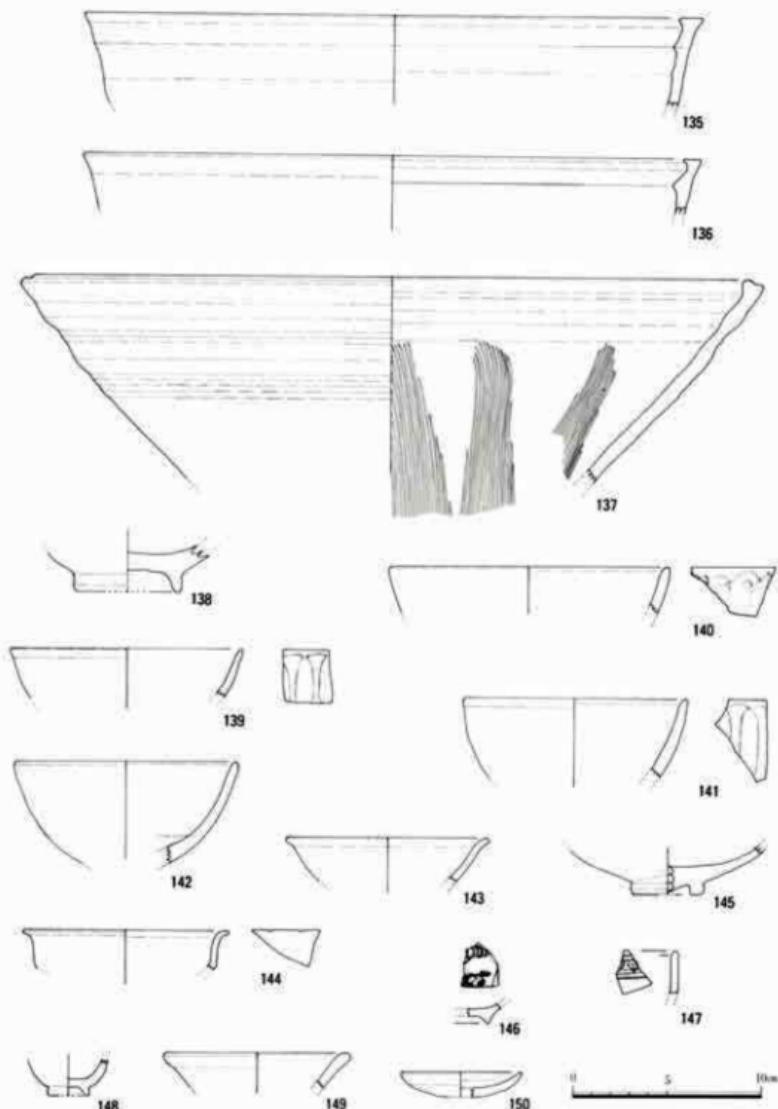
128は青織部の平向付で、型打ち成形され、型をぬきやすくするために布をあてており、内面に布目痕が残る。底部はヘラ削りされ、環足が付けられる。銅緑軸が掛けられ、内面底部には鉄絵が描かれ、長石軸が掛かる。胎土は灰黄色を呈す。連房Ⅰ期に比定される。

**大平鉢** (129~132)

129、高台は削り出し高台で、灰軸(黄瀬戸軸調)が施され、内面に鉄軸と銅緑軸で丸い文様が描かれている。連房Ⅰ期に比定される。130、131、132は黄瀬戸系の大平鉢の口縁部細片で同一個体と考えられる。口縁部は外にくびれ、口縁端部は内湾して縁帯を成す。黄瀬戸軸調の灰軸が掛けられ、内面に濃緑色の銅緑軸が流し掛けられている。連房Ⅱ期に比定される。

**擂鉢** (133~137)

破片数にして28点出土した。赤茶、暗茶を呈する錫軸が施される。133~136は口縁部細片で、133、134は軸裏に光沢がみられる。133、口縁端部は内湾して縁帯を成す。口縁内面に明瞭ながある。134、口縁端部はやや外開きして縁帯を成す。口縁内面に棱がみられる。135、136、口縁端部断面が釘の頭部状を呈し、口縁内面に断面三角形の突帯がみられる。いずれも連房Ⅰ期に比定される。137、口縁部でやや厚くなり、口縁端部は中央がやや窪んだ縁帯を成す。連房Ⅲ期



第59図 深戸道路出土遺物（9） 濱戸美濃陶磁器他

に比定される。

#### 6. 中国陶磁

青磁38点、白磁7点、染付2点の出土である。

##### 青磁 (138~142)

138は青磁碗の底部でかなり厚手の作りである。釉はオリーブ灰色の発色で、高台の底裏は露胎である。139~141は青磁碗の口縁破片で、外面体部に縞蓮弁の文様を有す。139、140は青みがかかった緑色の釉調で、141は薄い緑色の発色である。142は青磁碗で、釉は黄褐色がかかった発色である。

##### 白磁 (143~145)

いずれも白磁の皿である。143、144は端反りの口縁を有する。145は皿の底部で、高台は削り出しの輪高台で露胎である。胎土は灰白色で、若干黒い細粒を含む。

##### 染付 (146・147)

146は高台をもつ染付皿で、見込みに玉取獅子、外面腰部に界線を描く。小野分類の染付皿B群に相当する(註23)。147は口縁部細片で、外面口縁部に波濤文帯、内面口縁部に界線を描く。小野分類の染付皿C群に相当する。

#### 7. 常滑製品

破片数にして27点を数えるが、いずれも胴部細片のため図示しなかった。

#### 8. 伊万里製品 (148)

伊万里製品(註24)と確認したのは破片数にして6点である。148は素焼き掛けの小杯で、灰白色の釉が施されている。

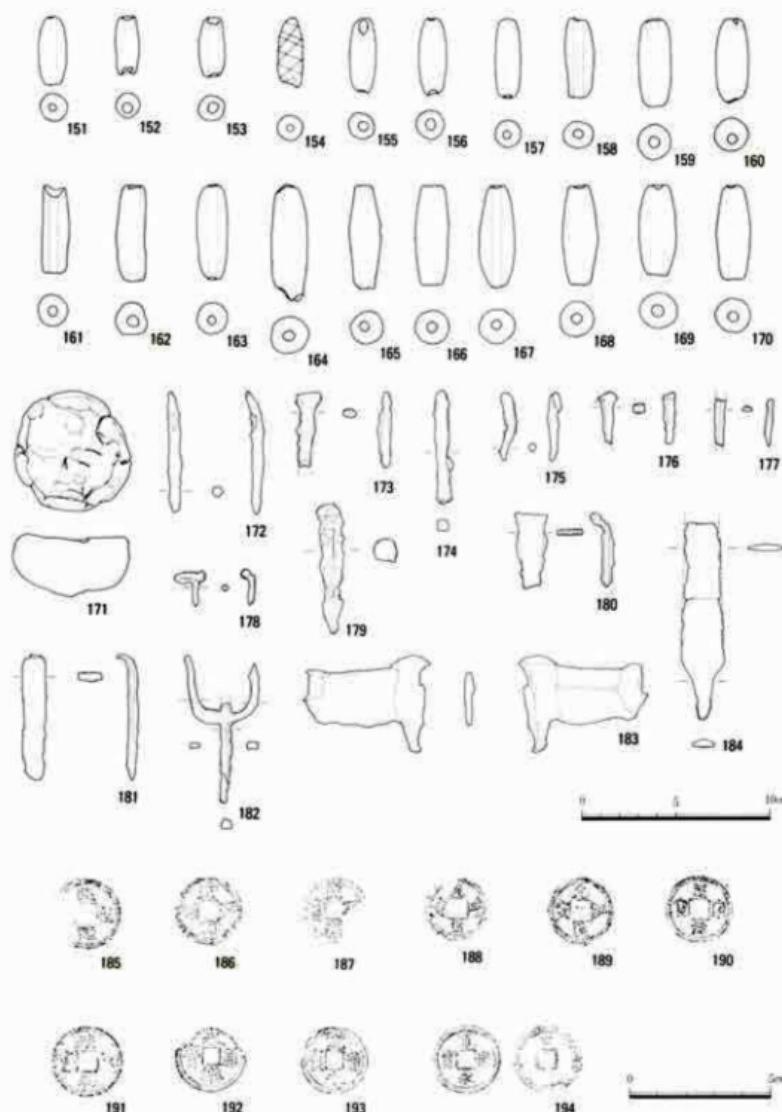
#### 9. 土師器 (149・150)

土師皿の細片が7点の出土であり、遺物の遺存状態は良好とはいえない。すべて非クロ成形である。149は口径10cm程の中皿で口縁がやや外反している。150は口径5.5cm程の小皿で、胎土は乳白色を呈し、丸底状になっている。

#### 10. 土製品

##### 土鍤 (151~170)

65点出土した。すべて管状土鍤である。このうち26点が土壤、ピットから出土した。20点を図示したが、151のように長さ4cm前後で胴部がややふくらむもの、157のように長さ5cm前後



第60図 深戸遺跡出土遺物 (10) 土製品・金属製品・銅錢

で胸部がややふくらむもの、167のように長さ5.5cm～6.5cmで胸部中央が強くふくらむものの3種類に分けられる。154は胸部に網目痕が残る。

#### 不明土製品 (171)

171は手づくね土器のような土製品である。胎土は浅黄橙色を呈し、内面に爪痕を残す。

#### 11. 金属製品 (172～184)

172～179は鉄釘である。断面が四角形の鍛造のものである。180、181は楔で鉄製の鍛造のもので、頭をたたいて折り曲げている。182はやすで、3本の刺突部の真ん中1本が欠損している。183は鉄製の薄い板状のもので、両端に銅がかぶせてある。184は、鉄製品で柄の部分が細くなっている。目たてのやすりか刀子と考えられる。

#### 12. 銅錢 (185～194)

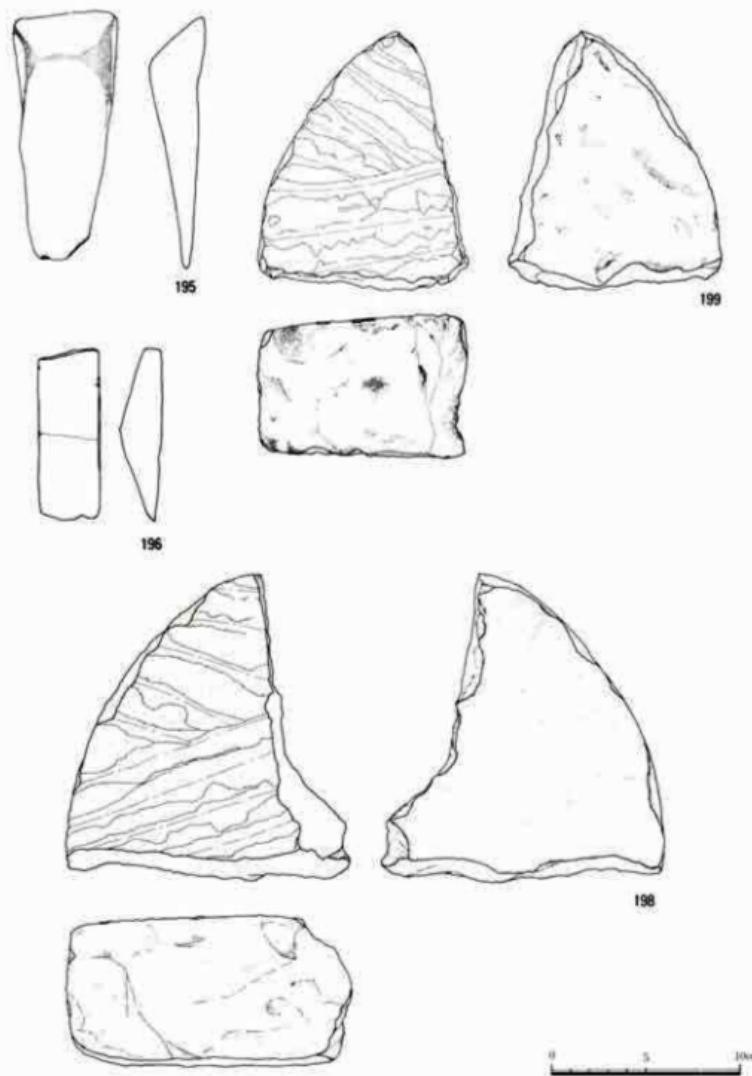
13枚出土した。銭名が判明するものは10枚で、渡来銭が8枚、寛永通宝が2枚である。185～191は北宋銭、192は永楽通宝、193、194は寛永通宝である。194は裏に「文」の文字がある。

第4表 出土銅錢一覧

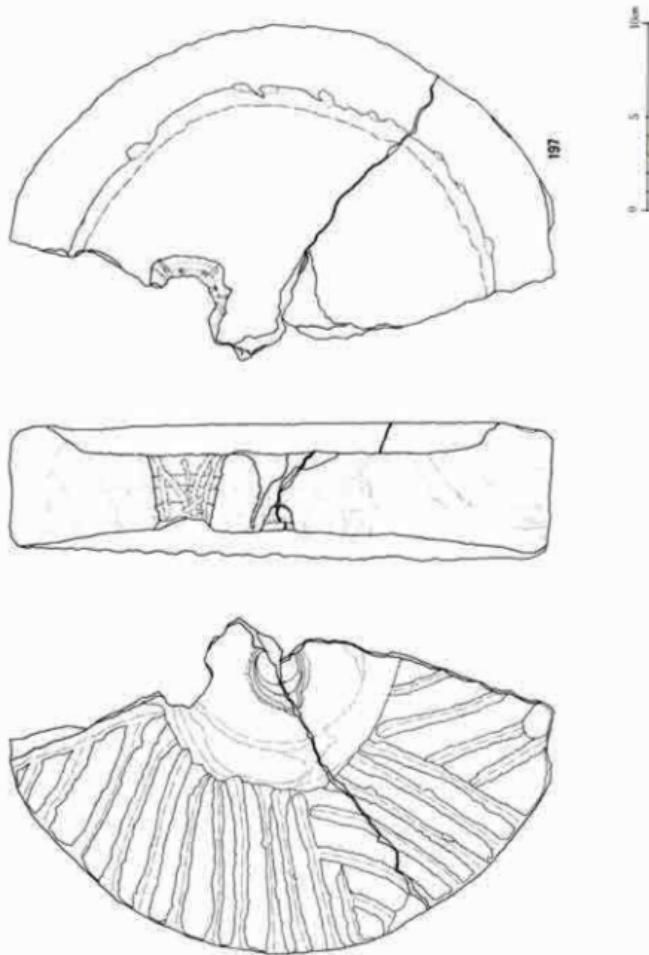
遺物番号	銭名	時代	初鑄年	地区	層位	遺物番号	銭名	時代	初鑄年	地区	層位
185	天聖元宝	北宋	1023～1031年	M6	IIU	190	聖宋元宝	北宋	1011年	J5	IIU
186	皇宋通宝	北宋	1039年	J5	IIU	191	政和通宝	北宋	1111～1117年	J5	IIU
187	熙寧元宝	北宋	1068～1077年	M6	IIU	192	永樂通宝	明	1411年	J5	IIU
188	元豐通宝	北宋	1078～1085年	J5	IIU	193	寛永通宝	江戸	—	B8	IIU
189	元祐通宝	北宋	1086～1093年	J5	IIU	194	寛永通宝	江戸	—	M5	III

#### 13. 石製品 (195～199)

砥石2点、石臼4点が出土した。195は砂岩製の砥石で粗砥である。196は流紋岩製の砥石で上面と側面を砥石面としている。手持ちの仕上砥である。197は石臼の上臼で、約2分の1の破片である。SX3からの出土である。溝は摩滅しているが、8分画6溝と考えられる。安山岩製である。198、199は石臼の下臼で同一個体と考えられる。溝は摩滅しており、分画数・溝数は不明である。安山岩製である。



第61図 深戸遺跡出土遺物 (11) 石製品



第62図 深戸遺跡出土遺物(12) 石製品

遺物 番号	探査 番号	図版 番号	遺物名	法 量				石 材	出土区	層位	備 考
				長さmm	幅mm	厚さmm	重量kg				
44	52	28	石鏡	25.5	13.3	5.6	2.0	チャート	ピット29		有基
45	52	28	"	(11.2)	13.3	4.6	0.5	"	F9	H.L.	"
46	52	28	"	(24.1)	14.8	4.5	1.4	下呂石	I6	H.U.	平基
47	52	28	"	20.7	18.8	2.6	1.0	チャート	F8	"	微凹基
48	52	28	"	21.1	(10.2)	4.1	0.8	"	O9	"	四基
49	52	28	"	14.3	7.9	1.9	0.1	"	G10	I	"
50	52	28	削器	(45.8)	38.5	8.2	14.8	"	D2	H.L.	
51	52	28	石核	37.8	21.0	10.0	6.3	"	F11	I	
			"	21.2	26.0	7.4	4.4	"	D2	H.L.	
52	52	28	剥片・破片	58.9	32.7	13.0	24.5	"	H6	H	
53	52	28	"	12.9	17.5	5.8	1.2	"	G7	I	
			"	16.8	16.4	2.7	0.7	"	"	H	
			"	13.3	16.2	3.9	0.7	"	G8	"	
			"	20.2	12.1	4.4	1.1	"	G3	H.U.	
			"	15.8	14.5	3.3	0.8	"	K4	H.L.	
			"	22.9	41.2	9.7	7.2	"	I5	"	
			"	12.0	10.4	3.1	0.4	"	O7	"	
			"	11.8	15.6	3.2	0.5	"	E1	"	
			"	14.6	12.2	2.5	0.4	"	"	"	
			"	10.8	15.1	5.4	0.7	"	E2	I	
			"	11.2	17.3	2.7	0.6	"	"	"	
			"	8.1	10.6	1.9	0.1	"	"	"	
			"	9.0	10.9	6.0	0.7	"	"	"	
54	52	31	敲石・磨石	108.9	73.8	51.4	622.0	砂岩	G1	I	
55	52	31	"	87.2	46.8	40.2	252.4	"	R6	H	
			"	128.4	64.9	55.8	738.0	"	K4	H.L.	
			"	111.7	53.8	38.8	329.4	"	O7	"	
			"	120.8	38.8	43.1	424.6	"	P7	"	
			"	158.0	53.5	43.5	613.8	"	O9	"	

第5表 深戸遺跡 石器計測表(1)

遺物番号	種別番号	図版番号	遺物名	法量				石材	出土区	層位	備考
				長さmm	幅mm	厚さmm	重量g				
56	53	29	打製石斧	(114.8)	53.6	28.8	200.9	砂岩	F 4	H U	
57	53	29	"	(123.2)	58.0	27.7	237.9	"	K 4	"	
58	53	29	"	111.1	59.8	27.9	171.2	凝灰岩	E 4	"	
59	53	29	"	89.6	54.3	25.1	136.5	砂岩	E 1	H L	刃部磨耗
60	53	29	"	100.4	50.8	26.8	136.1	凝灰岩	H 4	"	片面刃部磨耗
61	53	29	"	(51.3)	48.2	17.1	51.3	直飛流紋岩	D 2	H U	
62	53	29	"	148.9	52.5	34.9	306.7	砂岩	不明	I	
63	54	29	"	(70.2)	45.2	15.2	62.4	"	"	"	
64	54	29	"	127.5	64.0	28.6	248.0	"	F 2	H L	
65	54	29	"	114.4	46.5	19.3	115.1	直飛流紋岩	E 2	H U	
66	54	29	"	(89.1)	58.3	22.9	157.0	砂岩	S X 3		
67	54	29	"	129.5	56.7	24.2	292.0	"	R 6	I	
68	54	29	"	122.1	58.3	30.3	247.0	"	D 11	H U	
69	54	29	"	126.2	48.6	25.6	190.3	"	D 2	"	
			"	101.9	53.3	28.9	160.8	"	E 1	H L	
			"	(79.8)	56.7	16.2	85.2	"	"	H	
			"	116.6	53.1	24.8	198.9	ひん岩	"	H L	刃部磨耗
			"	115.2	56.7	24.6	184.3	砂岩	D 2	H U	
			"	81.7	52.9	19.3	101.6	"	E 2	"	
			"	(95.6)	53.4	17.7	107.3	"	"	H L	
			"	(66.5)	43.8	18.2	67.8	"	F 2	"	
			"	92.5	47.5	21.4	109.2	安山岩	"	"	
			"	62.5	52.7	21.0	93.8	"	"	H	全体的にローリング
			"	99.0	47.0	16.7	100.9	砂岩	"	"	
			"	(73.7)	44.3	20.7	81.3	"	G 2	H U	
			"	107.1	59.5	25.6	224.1	"	"	"	
			"	(78.4)	50.9	18.3	84.6	"	H 3	"	
			"	(60.1)	44.0	16.2	53.1	"	J 3	"	
			"	(117.9)	59.3	27.6	207.9	"	"	H	
			"	92.4	46.6	19.3	101.7	安山岩	"	H U	全体的にローリング
			"	(81.5)	51.6	22.7	110.5	"	L 3	H L	
			"	(109.4)	57.6	23.3	225.0	砂岩	M 3	"	
			"	108.4	56.8	21.2	149.7	"	N 3	H U	
			"	89.9	46.7	20.2	89.9	"	D 4	"	
			"	(76.1)	51.0	27.6	101.6	"	"	"	

第6表 深戸遺跡・石器計測表(2)

遺物番号	検出番号	図版番号	遺物名	法量				石材	出土区	層位	備考
				長さmm	幅mm	厚さmm	重量g				
			打製石器	79.2	49.5	19.2	82.5	砂岩	D 4	H	
			"	97.7	44.0	17.7	111.3	"	E 4	H U	
			"	103.9	47.1	18.5	113.1	"	"	"	刃部磨耗
			"	(104.8)	45.5	20.4	119.2	"	"	H L	
			"	93.4	45.8	23.0	133.0	"	"	H U	
			"	88.2	51.3	22.0	117.5	安山岩	F 4	"	
			"	103.7	51.7	22.4	152.7	砂岩	K 4	"	
			"	93.5	50.8	16.8	101.3	"	"	"	
			"	112.6	48.4	24.5	168.5	"	"	H L	
			"	106.6	46.0	19.9	124.2	"	J 5	H U	
			"	(77.7)	40.7	20.1	79.9	"	L 5	H L	
			"	109.7	54.5	23.4	156.0	塊飛流紋岩	M 5	"	
			"	118.7	56.0	22.5	182.5	砂岩	R 5	H	
			"	(94.8)	50.3	17.6	134.8	"	"	"	
			"	104.5	48.3	23.0	160.7	安山岩	S K 1	全体的にローリング	
			"	105.5	56.1	22.1	156.6	砂岩	不明	I	
			"	123.0	57.6	22.0	190.5	"	"	"	
			"	131.8	61.3	31.4	322.9	"	"	"	
			"	78.0	40.4	16.7	56.5	"	"	"	
			"	(102.7)	51.1	21.1	119.5	"	"	"	全体的にローリング
			"	90.2	49.5	25.9	127.8	"	"	"	
			"	115.4	49.1	19.2	152.2	安山岩	"	"	
			"	115.1	52.1	26.7	232.8	砂岩	"	"	
			"	(94.7)	50.1	26.7	156.6	"	"	"	
			"	(108.8)	51.8	30.9	217.8	"	"	"	
			"	97.6	40.6	19.0	82.1	安山岩	"	"	

第7表 深戸遺跡 石器計測表(3)

遺物 番号	神社 番号	国版 番号	器 種	法 量 cm		残存部	器形・技法上の特記すべき点	始 土		出土区	層位	備 考	
				口径	底径			鉢	色調				
70	55	31	山茶碗(陶)	15.4	5.2	7.4	1212形	もみがら压痕が顯著	並	灰白	G 4	H L	浅間窓下1
71	55	30	#	—	—	7.2	底-1/2	内面は使用によりかなり磨耗	#	#	不明	I	丸石3-窓洞1
72	55		#	—	—	9.0	底-1/4		#	#	M 5	H L	#
73	55		#	—	—	7.0	底-1/2	回転系切り痕	#	#	R 6	I	#
74	55		#	—	—	5.6	底-1/2	もみがら压痕が顯著	#	#	M 6	H L	白土原2
75	55	30	#	—	—	6.3	底-1/3		少ない	#	K 5	#	明和1
76	55	30	#	—	—	4.8	1/3	指圧痕	#	#	不明	I	#
77	55		#	14.0	—	—	口-細片	ロクロ痕が目立つ	#	#	S K 3	#	
78	55		#	—	—	5.6	底-1/3	指圧痕	#	#	R 5	I	#
79	55		#	—	—	5.1	底-2/3	もみがら压痕が顯著	#	灰黄	S K 2	#	
80	55		#	—	—	5.2	底-1/3	ロクロ痕が目立つ	#	#	D 4	H L	#
81	55	30	#	12.6	4.1	4.0	1/4	もみがら压痕が顯著	#	灰白	L 5	#	大削大洞4
82	55		#	14.8	5.4	9.0	1/4	外面部体形指圧調整	#	灰黄	S X 2	#	
83	55		#	12.1	—	—	口-細片	内面に自然輪付着	#	灰白	R 6	I	#
84	55	30	#	12.6	4.4	3.7	1/5	もみがら压痕	#	灰褐	M 4	H L	大削東1
85	55		#	—	—	4.1	底-1/3	回転系切り痕	#	灰白	L 3	#	#
86	55		#	—	—	5.3	1/3	指圧痕	#	灰褐	M 5	#	#
87	55		#	—	—	5.4	1/6	無高台碗	#	灰白	N 9	H	船之島3
88	55	30	#	—	—	5.1	1/6	*	#	灰黄	O 9	H L	#
89	56	30	山茶碗(陶)	7.4	2.2	3.6	1/2	低い高台	多い	灰	L 5	#	丸石3
90	56	30	#	8.2	2.0	4.0	1/2	自然輪が厚く掛かる	#	灰白	不明	I	湘江系
91	56	30	#	—	—	5.2	底-1/2	内面に自然輪・砂粒が付着	#	灰褐	O 9	H L	窓洞1
92	56	31	#	8.2	1.9	4.5	1212形	ロクロ痕が目立つ	重	#	SK 3	#	白土原1
93	56	30	#	9.4	1.9	6.0	1/3	回転系切り痕	少ない	灰白	R 6	I	明和1
94	56	30	#	8.4	1.8	5.2	1/3	*	#	#	R 5	H L	大洞東1
95	56		#	7.6	1.3	5.0	1/4	11縫端部肥E	#	#	M 5	#	#
96	56	30	#	7.8	0.9	5.2	1/3		#	#	P 7	#	大削東-船之島
97	56	31	山茶碗(陶)	23.2	—	—	13-1/5	あばた状の凹凸	多い	暗灰	M 4	#	南部系
98	56		#	34.0	—	—	13-細片		#	#	O 6	#	#
99	56		#	31.0	—	—	口-細片		#	灰褐	不明	I	#
100	56	31	天目茶碗	—	—	—	1/3	茶色の釉調	重	灰黄	S X P 26	#	古瀬戸後期後半
101	56	31	#	—	—	—	口-細片	黄褐色の釉調	少ない	灰褐	L 3	H L	#
102	56	31	平碗	—	—	—	1/5	浅黄色の釉調	重	灰黄	K 5	#	古瀬戸後期
103	56	31	#	15.6	—	—	1/4	釉薬の剥落	少ない	灰白	M 5	#	#
104	56	31	折枝深皿	31.2	—	—	口-細片	*	#	青灰	#	#	#

第8表 深戸遺跡 陶磁器觀察表(1)

遺物番号	神岡番号	団版番号	器種	法量	残存部	器形・技法上の特記すべき点	胎土		出土区	層位	備考	
							砂粒	色調				
105	56	31	縁付小鉢	10.0	1.7	6.0	1/3	黒	淡黄	不明	I	古瀬戸後期
106	56	31	"	11.2	-	-	13-細片 縁巻の剥落	"	灰白	M3	H.L.	"
107	56	31	おろし皿	-	-	6.0	底-1/2 断線によるおろし目	"	淡黄	K3	"	"
108	57		縁付	32.4	-	-	13-細片 赤褐色の斑點	"	灰褐	K4	"	古瀬戸後期後半
109	57		"	14.0	-	-	13-細片 縁巻の剥落	"	灰白	M5	"	古瀬戸後期
110	57	31	天目茶碗	11.4	-	-	1/3 茶色の釉調	"	明黄	SX3	"	大室1
111	57		"	-	-	-	13-細片 "	"	"	K4	H.L.	大室3
112	57	31	丸皿	11.8	-	-	1/2 菊花様の模様	"	灰白	"	"	"
113	57	31	丸皿	11.8	2.7	7.2	1/2 菊印文	"	灰黄	"	"	大室4
114	57		"	9.4	2.5	4.6	13-細片	"	"	O7	H	大室2
115	57	31	縁皿	10.4	2.3	5.8	1/2 円錐セメント底	"	明褐	M4	H.L.	大室3
116	57	32	縁付	32.0	-	-	13-細片 口縁端部に縁帶	"	灰白	M3	"	大室1
117	57	32	"	34.6	-	-	13-細片 "	"	灰黄	L3	"	"
118	57	32	"	-	-	9.6	底-1/4 赤褐色の斑點	多い	淡黄	F2	H.U.	大室後半
119	57	32	志野向付	14.6	-	-	口-細片 ヘラで器底調整	黒	黄褐	O7	H.L.	大室4
120	57	32	天目茶碗	11.6	-	-	13-細片 茶色の釉調	"	灰白	不明	I	連房II
121	57	32	"	11.1	-	-	1/4 口縁端部に凹	少ない	"	M5	H.L.	"
122	57	32	丸皿	-	-	-	13-細片 茶色の釉調	黒	明褐	L3	"	"
123	57	32	"	-	-	5.0	底-3/4 内面底部に2条の同心円溝	少ない	灰黄	M5	"	連房I
124	58	32	丸皿	9.6	2.1	5.8	1/5 志野焼鉄粒底	"	"	L3	"	"
125	58	32	"	12.0	2.1	8.4	1/3 "	"	"	R5	I	連房II
126	58	32	端反皿	14.0	3.1	7.4	1212完形 深澤井筒・4つの四辺ビン筒	"	"	K4	H.L.	連房I
127	58		"	14.2	2.9	7.6	1/2 深澤井筒・管部に明瞭な縦	"	"	"	"	"
128	58	32	向付	-	-	-	底-細片 青磁部の手回付	黒	"	M5	H.U.	"
129	58	32	六方鉢	-	-	11.0	底-細片 内面質地・銅線地の丸い文様	"	明褐	OB-P7	"	"
130	58	32	"	28.8	-	-	13-細片 黄褐色・銅線地の流し模様	"	淡黄	L3	H.L.	連房II
131	58	32	"	-	-	-	13-細片 "	"	"	SX3	"	"
132	58		"	-	-	-	13-細片 黄瀬戸系	"	"	"	"	"
133	58	33	縁付	31.4	-	-	13-細片 口縁端部内汚して縁帶	"	灰白	"	"	連房I
134	58	33	"	32.2	-	-	13-細片 無軸に光沢	"	灰黄	K4	H.L.	"
135	59	33	"	32.0	-	-	13-細片 口縁内面に突起	"	淡黄	L4	"	"
136	59	33	"	32.0	-	-	13-細片 "	"	"	"	"	"
137	59	33	"	38.0	-	-	1/4 浅いおろし目が施される	"	"	K5	"	連房III
138	59	34	青磁碗	-	-	5.8	底-3/4 手の輪高台	少ない	灰白	不明	I	"
139	59	34	"	32.2	-	-	13-細片 細選分文	"	"	O9	H.L.	"

第9表 深戸遺跡 陶磁器観察表(2)

遺物 番号	地図 番号	説明 番号	器種	法量 cm			残存部	器形・技法上の特記すべき点	胎土		出土区	層位	備考	
				外径	内径	底径			砂粒	色調				
140	59	34	青磁碗	14.8	—	—	口-細片	施道弁文	少ない	灰	K 4	H L		
141	59	34	*	11.8	—	—	口-細片	*	*	灰白	O 7	H		
142	59	34	*	11.6	—	—	口-細片	黄褐色の釉調	*	灰黄	S X 3			
143	59		白磁瓶	10.6	—	—	口-細片	造り口跡	*	灰白	K 4	H L		
144	59		*	10.6	—	—	口-細片	*	*	*	*	*		
145	59	34	*	—	—	3.8	1/4	削り出し輪高台	*	*	*	*	*	
146	59	34	染付瓶	—	—	—	底-細片	見込みに玉取獣子文	*	*	P 6	I		
147	59	34	*	—	—	—	口-細片	外面口縁に淡墨文	*	*	J 6	*		
148	59		小杯	—	—	2.2	1/2	素焼き掛け・灰白色の釉調	*	*	K 5	H L	伊万里地	
149	59		土器	9.6	—	—	口-細片	口縁やや外反	*	明馬	O 9	*		
150	59		*	6.4	1.4	2.0	1/4	丸成状	*	乳白	P 6	H U		

## 土製品

遺物 番号	地図 番号	説明 番号	遺物名	法量			残存部	胎土		出土区	層位	備考		
				長さmm	胴部径mm	孔径mm		砂粒	色調					
151	60	34	土錠	36.7	14.4	—	3.3	7.2	完形	少ない	明褐色	G 5	I	
152	60	34	*	(30.7)	12.6	—	5.3	3.7	一端欠	*	淡黄	ピット24		
153	60	34	*	(30.9)	13.8	—	5.2	4.3	*	*	灰白	S X 2		
154	60	34	*	(36.8)	13.3	—	3.4	5.1	両端欠	*	*	M 3	H L	
155	60	34	*	(40.2)	14.1	—	5.4	5.6	一端欠	*	浅黄	M 5	*	
156	60	34	*	(41.2)	15.3	—	5.1	8.1	*	に古い黄帯	ピット36			
157	60	34	*	41.3	14.0	—	4.0	8.4	完形	少ない	淡黄	O 3	H	
158	60	34	*	43.3	15.3	—	4.4	7.3	*	に古い赤帯	O 7	*		
159	60	34	*	46.8	18.2	—	5.0	13.9	*	灰白	L 4	H L		
160	60	34	*	(45.7)	17.0	—	4.5	12.2	一端欠	*	*	S X 2		
161	60	34	*	(46.1)	15.9	—	4.6	9.5	*	少ない	淡黄	L 3	H L	
162	60	34	*	50.4	(17.2)	—	5.3	12.3	完形	*	淡黄	ピット36	中央部溝れ変形	
163	60	34	*	50.2	16.3	—	4.3	12.6	*	並	灰白	*		
164	60	34	*	(62.0)	20.3	—	4.9	22.4	一端欠	少ない	灰黄	K 4	H L	
165	60	34	*	55.4	17.3	—	5.4	13.5	完形	*	*	*	*	
166	60	34	*	53.3	17.8	—	4.8	15.4	*	*	浅黄	O 8	*	
167	60	34	*	54.7	19.0	—	4.6	17.4	*	並	淡黄	ピット36		
168	60	34	*	52.3	19.3	—	5.6	16.7	*	*	灰白	L 3	H L	
169	60	34	*	48.5	19.3	—	5.3	17.6	*	少ない	黄灰	K 3	*	
170	60	34	*	51.0	18.5	—	5.1	16.3	*	並	淡黄	S X 2		
171	60	34	土製品	高33.0	—	—	径48.0	86.0	*	少ない	浅黄	L 4	H L	内面に爪痕

第10表 深戸遺跡 陶磁器(3)土製品観察表

遺物番号	探区番号	図版番号	遺物名	法量				出土区	層位	備考
				長さcm	幅cm	厚さcm	重量kg			
172	60	35	鉄釘	(6.4)	0.6	0.7	7.3	P 6	I	
173	60	35	"	(3.9)	1.3	0.9	7.1	K 5	H L	
174	60	35	"	(6.0)	0.8	0.8	10.2	P 6	I	
175	60	35	"	(3.6)	0.6	0.6	2.3	J 6	H L	
176	60	35	"	(2.7)	1.1	0.7	3.3	S X 2		
177	60	35	"	(2.4)	0.6	0.5	2.1	不明	I	
178	60	35	"	(1.9)	1.6	0.3	1.1	L 3	H L	
179	60	35	"	6.8	1.2	1.1	12.9	L 5	"	
180	60	35	楔	(3.9)	1.7	0.5	5.2	M 5	"	
181	60	35	"	(6.7)	1.3	0.4	13.8	L 3	"	
182	60	35	やす	(7.9)	0.5	0.5	10.4	I 7	H 刺突部真中 I 本欠損	
183	60	35	不明	(5.2)	(7.0)	0.7	53.2	H 8	I 両端に鋸	
184	60	35	"	10.4	2.3	0.4	21.0	C II	I	
195	61	36	砾石	13.2	5.5	2.7	180.4	L 5	H L 砂岩	
196	61	36	"	9.0	3.2	2.1	81.9	ヒット10	泥紋岩	
197	62	36	GII 径 31.0	—	7.2	3909.3	S X 3	上臼 (8分溝6溝)・安山岩・I/2		
198	61	36	" 径 30.4	—	8.1	2432.1	K 4	H 下臼・安山岩		
199	61	36	" 径 30.4	—	7.7	1449.8	"	H "	"	

第11表 深戸遺跡 金属製品・石製品計測表

## 第6章 深戸遺跡の考察

深戸遺跡は長良川左岸の標高448mの山の山麓緩斜面上に立地する。調査地点は深戸地区の集落の西端に位置し、西と北に山、南に長良川に囲まれたところである。今回の調査は当初の予定では、調査面積は5,000m<sup>2</sup>であったが、斜面上に広がりが見られないことから2,500m<sup>2</sup>を調査した。以下、わずかではあるが、発掘調査で得られた知見を整理して考察にかえたい。

まず、出土遺物について注目されるのが山茶碗と中近世の瀬戸美濃陶器である。山茶碗は浅間窯下1号窯式から始まり、明和1号窯式～大洞東1号窯式がピークで出土量が多い。生田2号窯式は見られなかった。その後、瀬戸美濃陶器の古瀬戸製品や大窯製品も見られるが、次にピークと考えられるのが連房式登窯のI・II期である。器種としては天目茶碗・丸碗・皿類・向付・擂鉢等があげられる。特に、織部や黄瀬戸の碗・皿・向付が出土したことは注目される。中国陶磁器（染付・青磁・白磁）も出土した。また、中近世の遺物とともに打製石斧が多く出土したが、調査区付近が採集場所であったものと考えられる。土器については客土からの出土と考えられる。

次に、遺構であるが調査区南部にかたまっており、遺物も調査区南部に多いことから、遺跡の中心は調査区の南部であると考えられる。ただし、前述したように調査部南部は圃場整備の際、道路が作られ、土も持ち出されていて、全体を調査できなかった。そのため、遺構は礎石建物の礎石が検出されたが、つながりがわからず残念であった。また、土壤4基と多数のピット群、焼土部分を持つ土壤3基を検出したが、性格は不明である。焼土部分を持つ土壤3基については他に類例がなく、私見であるが、窯もしくは火葬の施設と想定される。

調査地点は明治の地籍図によっても畠として利用されているが、地元の古老の話によると、現在集落の中心は護岸工事がなされてから東の河岸段丘に移っているが、それ以前はもっと山側の北西にあり、調査地点付近にも家が建っていたらしい。ただし、調査地点付近は風が強く日当たりが悪いことから、集落も東に移っていったということである。

これらより大きく深戸遺跡を評価すると、文献資料はないが、出土遺物や礎石建物の存在の可能性が高いことから、中近世の集落跡の一部と考えられる。また、出土遺物に織部や黄瀬戸、器種で天目茶碗や向付があることから、富裕農家か寺の可能性が想定される。

## 註

- 1 「稻葉遺跡発掘調査報告書」 美並村教育委員会 1988
- 2 「美並村の遺跡」 美並村教育委員会 1976
- 3 「郡上八幡町史」 上巻 八幡町 1960
- 4 「美並村史」 通史編上巻 美並村 1981
- 5 「郡上八幡町史」 上巻 八幡町 1960
- 6 寛文12年（1672）郡上藩主遠藤常友の命によって、家臣伊藤玄拍・桜井玄登が編集し、當友に提出したものを明和元年（1764）に丸山慶縣が写したものである。現在、八幡町の悲恩寺が所蔵している。
- 7 遠藤記は註6の遠藤家御先祖書編集の際の副産物で、宝曆7年（1757）に郡上郡久留主東保村の太治兵衛が写したものである。現在、八幡町の悲恩寺が所蔵している。
- 8 郡上古日記も註6の遠藤家御先祖書編集の際の副産物で、文政6年（1823）に郡上藩祐筆の桂忠弘外5名が写したものである。現在、岐阜県立図書館が所蔵している。
- 註6・7・8ともほぼ同じ内容で、鶴尾山城については次のように記されている。  
 「天文21年盛数様御手前不被為成候付常慶様へ御訴訟被成候処、刈安村河合七郎雅御一族東家江無礼多有之候ニ付、攻亡其跡一円可被遣之旨御意ニ付、下川筋御取六右衛門粥川甚右衛門御頼被成福野城江御取掛、盛数様御取一家ハ川手ヨリ、粥川甚右衛門ハ谷口ヨリ攻寄早速追崩高原川原ニテ七郎を討取其年神路木越ヨリ林廣院山之城へ御移」
- 9 嘉永4年（1851）に八幡のかきや小川屋喜兵衛（休和）がまとめたものである。  
 「濃北一覧」 復刻版 郡上高等学校 1988
- 10 「美並村史」 通史編上巻 美並村 1981
- 11 「美並村史」 通史編上巻 美並村 1984
- 12 千田嘉博氏のご教示による。  
 千田嘉博「織豊系城郭の構造—虎口による繩張り編年試み—」  
 〔『史林』第70巻第2号〕 1987
- 13 千田嘉博氏のご教示による。
- 14 時期については、化粧掛けがみられないことから、大窓後半期に下る可能性がある。さらに、問題として残るのは產地である。城の位置から美濃窓を想定するが、底部調整・胎土から信濃または越中の入手ルートも考えられる。以上、銘文と性格、產地については、国立歴史民俗博物館の吉岡康暢氏にご助言いただいた。
- 15 第1章第2節参照。註6～9の文献による。

- 16 山茶碗、白堺系陶器と呼称されているが、本報告では山茶碗という名称を用いる。
  - 17 特に砂岩に顯著で、全面調整剝離面で覆われたものは2点だけである。一方砂岩以外の素材を用いたものでは12点中4点である。
  - 18 いわゆる「均質手」のものについては東海地方北部系（北部系）、「荒肌手」のものについては東海地方南部系（南部系）と呼称する。
  - 19 山茶碗の分類については、若尾正成氏のご教示による。
  - 20 古瀬戸については、藤沢良祐氏・内堀信雄氏からご教示をいただいた。
  - 21 大窯製品については、藤沢良祐氏からご教示をいただいた。
  - 22 連房式登窯製品については、田口昭二氏からご教示をいただいた。
  - 23 内堀信雄氏のご教示による。
- 小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究No.2』 1982
- 24 内堀信雄氏のご教示による。

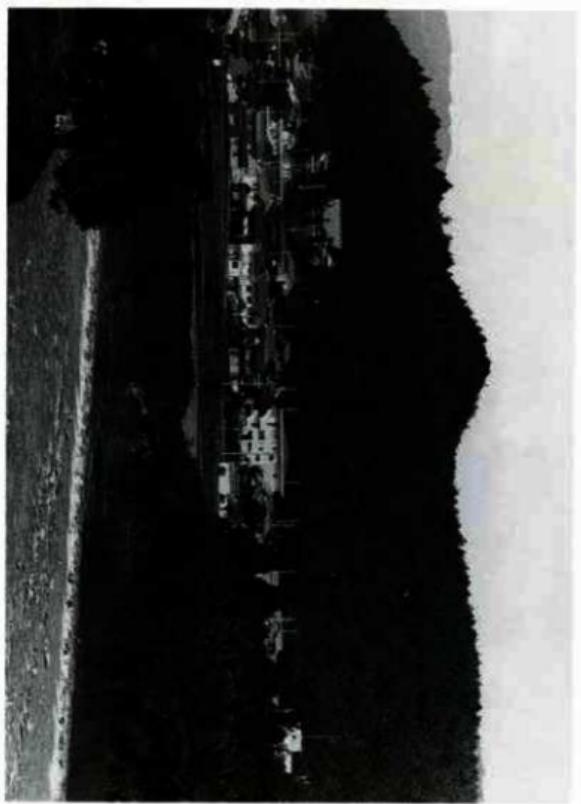
## 参 考 文 献

- 「岐阜県史・通史編 近世上」 岐阜県 1968
- 「美並村史・通史編 史料編」 美並村 1981~1987
- 「郡上八幡町史・史料編1」 八幡町 1985
- 「濃北一覧」 復刻版 郡上高等学校 1988
- 「郡上古日記」 (岐阜県図書館蔵) 1823
- 「美濃国諸藩記」 黒川真道編 1915.
- 「中世城館網張り調査の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告第35集』  
千田嘉博 1991
- 「城館出土の瀬戸・美濃大窯製品」「中世の城と考古学」 藤澤良祐 1991
- 「瀬戸大窯発掘調査報告」「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要」 藤澤良祐 1986
- 「刻名を有する中世陶器」『国立歴史民俗博物館研究報告第36集』 吉岡康暢 1991
- 「美濃焼」(ニューサイエンス社 考古学ライブラリー-17) 田口昭二 1983
- 「常滑焼」(ニューサイエンス社 考古学ライブラリー-23) 赤羽一郎 1984
- 「中尾城跡」 兵庫県教育委員会 1989
- 「中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ」  
島根県教育委員会 1991
- 「京都府遺跡調査報告書 第14冊 平山城跡・平山東城跡」  
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990
- 「千疊敷 織田信長居館伝承地の発掘調査と史跡整備」 岐阜市教育委員会 1990
- 「陶磁器について」「千疊敷Ⅱ」 内堀信雄 1991
- 「白鷗」 都立学校道路調査会 1990
- 「尾呂」 濑戸市教育委員会 1990
- 「平成2年度 濑戸市文化財年報」 濑戸市教育委員会 1992
- 「東町1・2号窯発掘調査報告書」 多治見市建設部・多治見市教育委員会 1989
- 「白土原1・2・3号窯発掘調査報告書」 多治見市教育委員会 1989
- 「大森迫間洞古窯跡群発掘調査報告書」 多治見市教育委員会 1989
- 「城之内遺跡」 岐阜市教育委員会 1990
- 「城之内遺跡Ⅱ」 岐阜県教育委員会・(財)岐阜県文化財保護センター 1991
- 「宮下遺跡」 日本道路公团・(財)岐阜県文化財保護センター 1991

船尾山城跡 潛在後天櫓（南から）



船尾山城跡 潜在後天櫓



図版  
2



調査前の歯状空櫛群



調査前の南曲輪（北から）



調査後の敵状空堀群



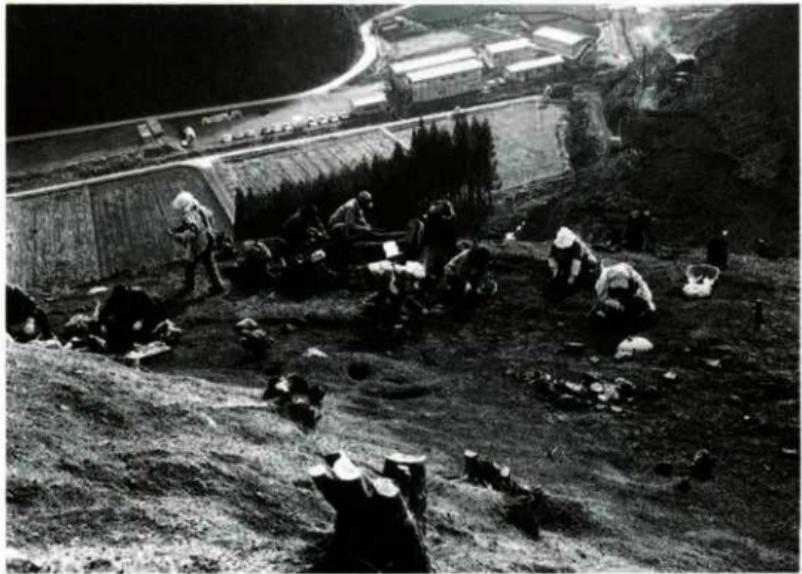
調査後の南曲輪（北から）



鶴尾山城跡からの眺望（西に高原城跡）



鶴尾山城跡からの眺望（南に福野城跡）



調査風景（南曲輪2）



調査風景（南曲輪2）



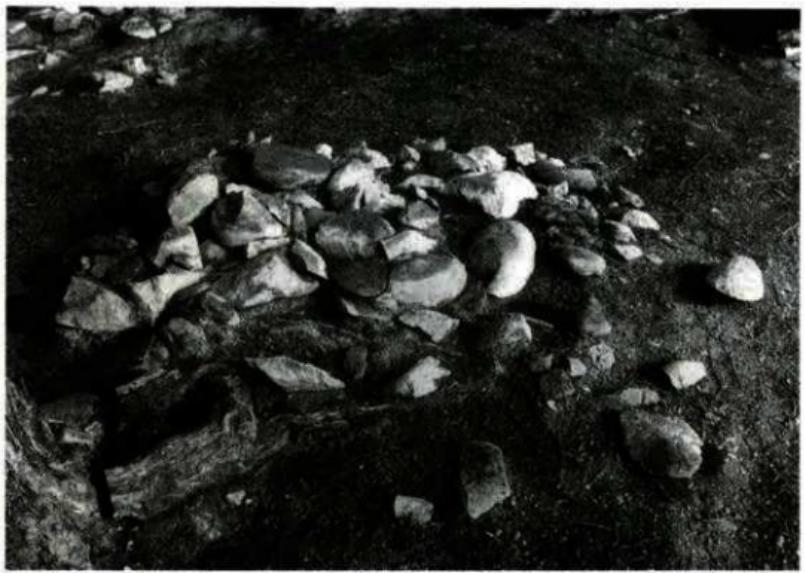
調査風景（歎状空堀群）



調査後の主郭・南曲輪・歎状空堀群



集石遺構 1 (主郭)



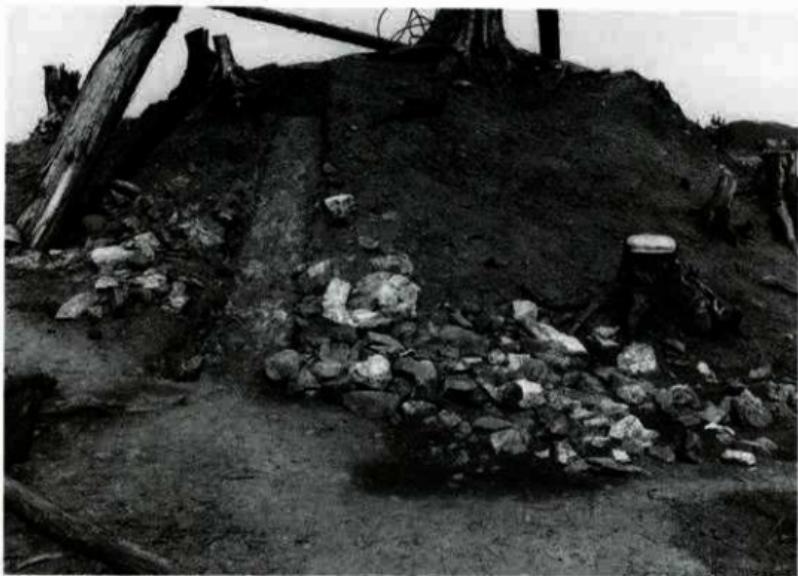
集石遺構 2 (主郭)



虎口



主郭土墓



石垣状遺構（主郭）



主郭下段



主郭下段トレンチ



主郭への通路



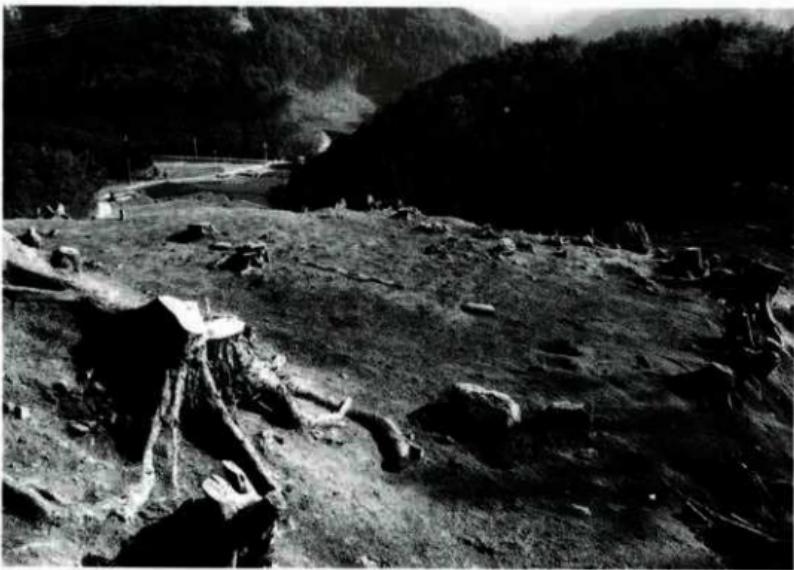
南曲輪 2



堅堀 1（下から）



歎状空塚群（下から）



南曲輪 4



南曲輪 4 ~ 9



南堀切



坂土累（主郭西側斜面）



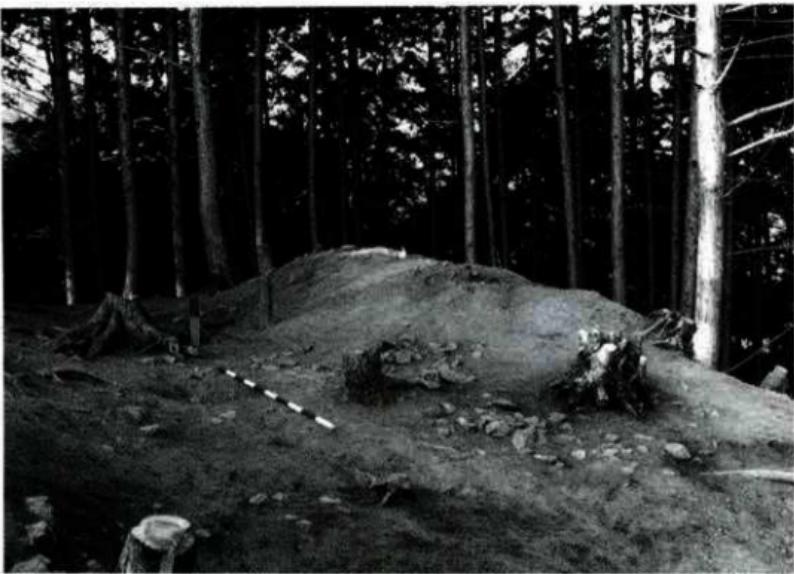
西曲輪1（土層）



西曲輪 1 ~ 4



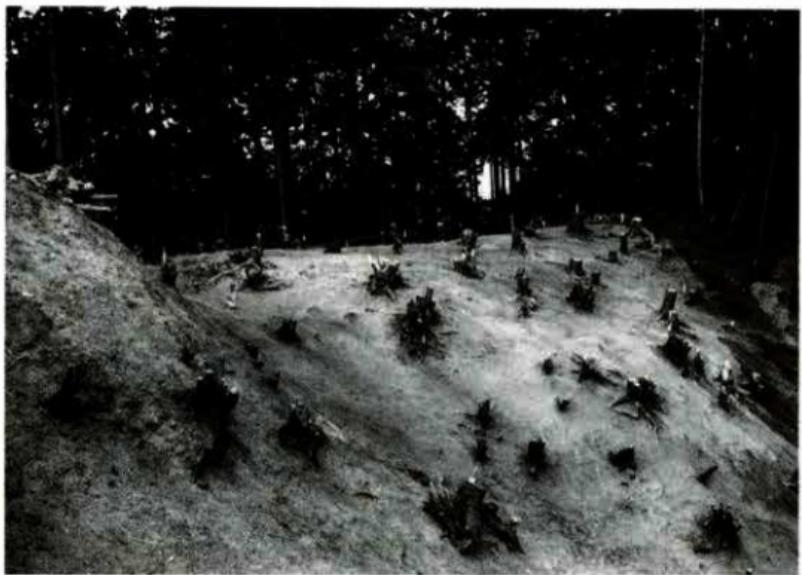
西曲輪 1



南曲輪 1 東土塁



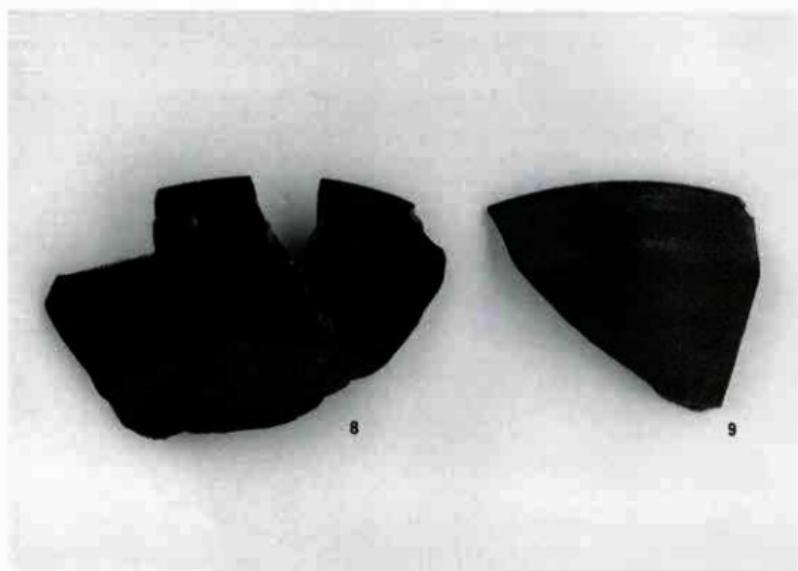
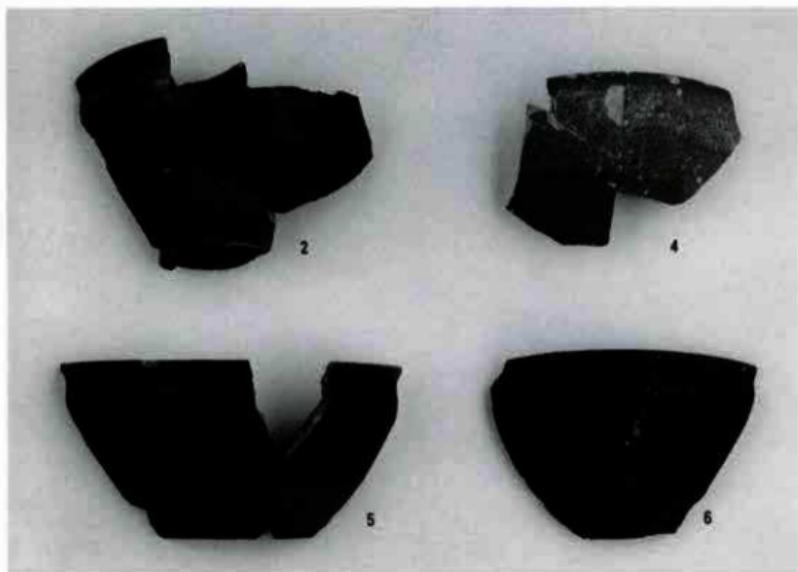
東曲輪 1



東曲輪 I と東堀切



鶴尾山城跡近景（工事始まる）



瀬戸・美濃陶器（鶴尾山城跡）





18

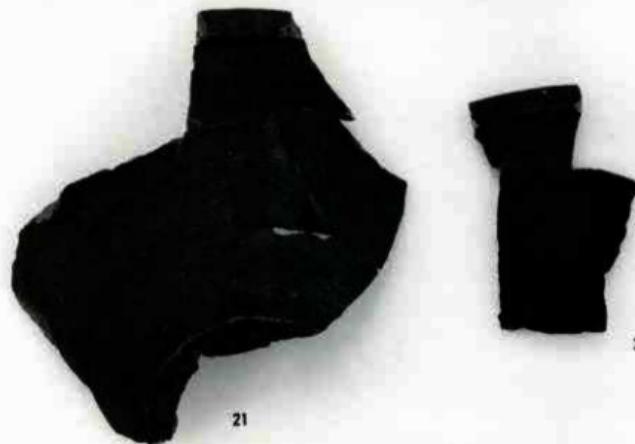


19

瀬戸・美濃陶器（鶴尾山城跡）

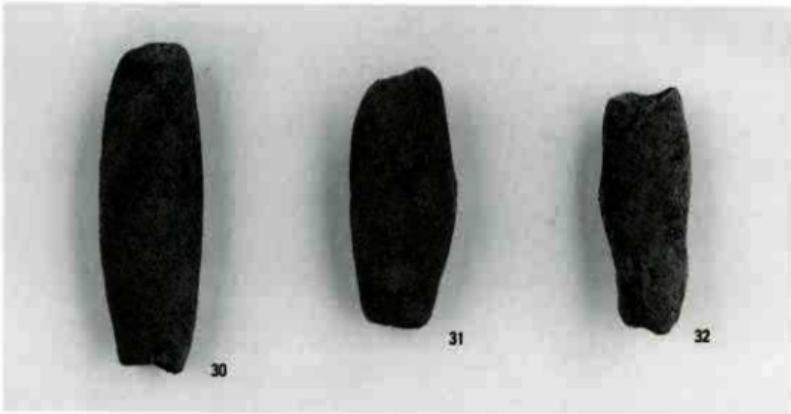
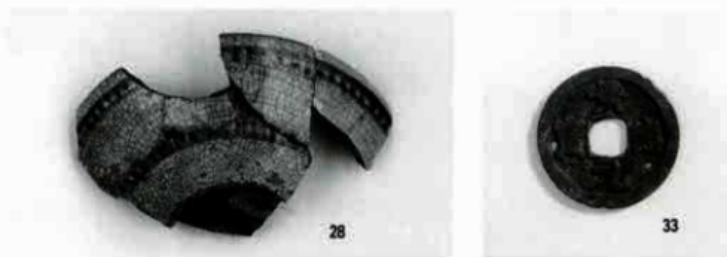
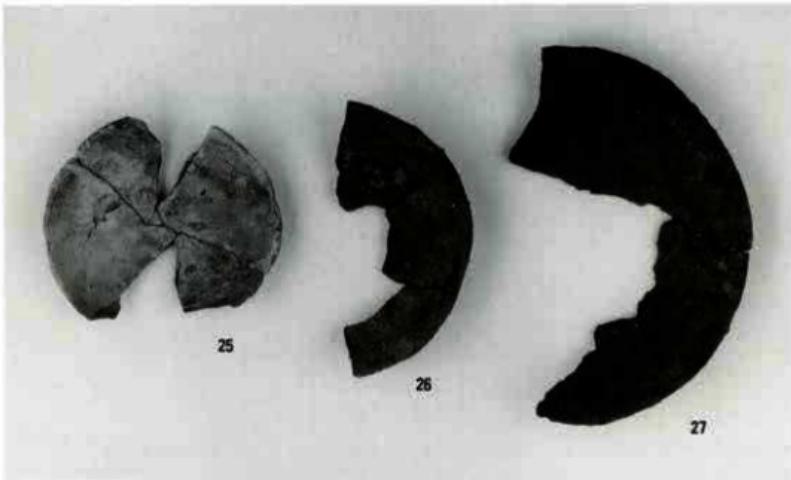


20

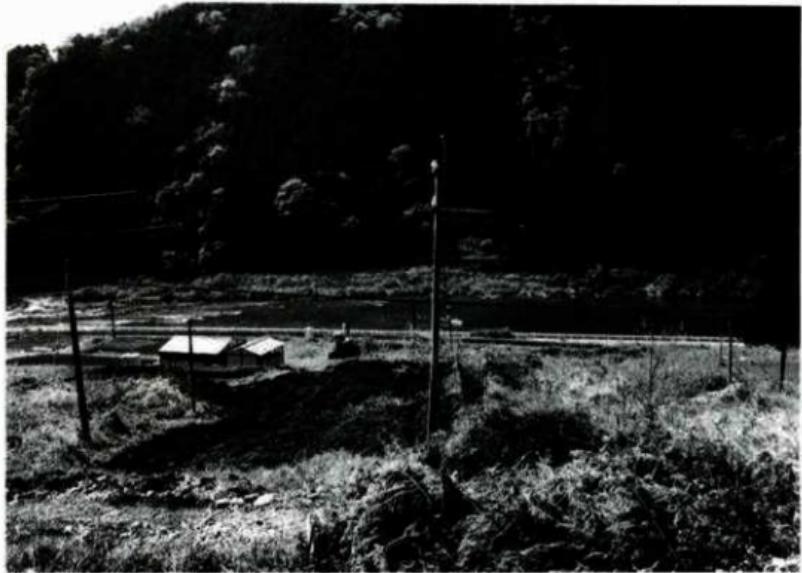


21

22



土師器・明染付・土錐・古銭（鶴尾山城跡）



深戸道路 調査前全景



深戸道路 調査後全景



調査風景



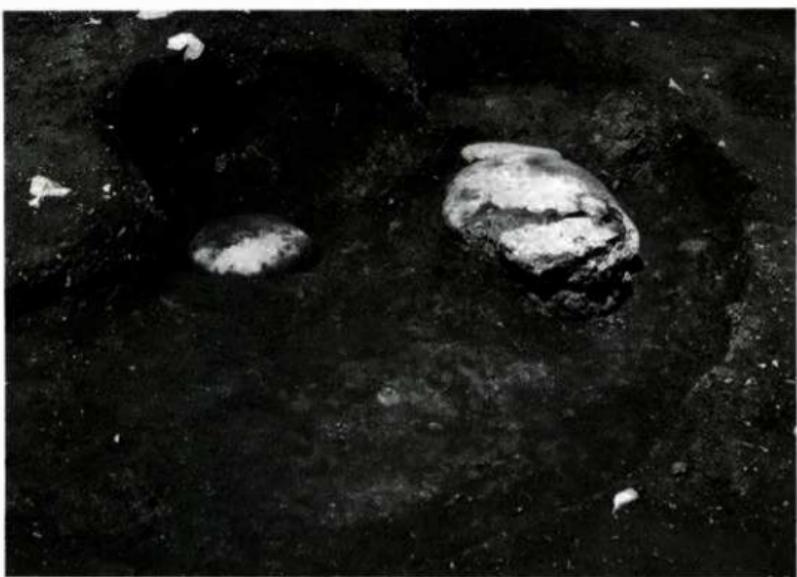
土層



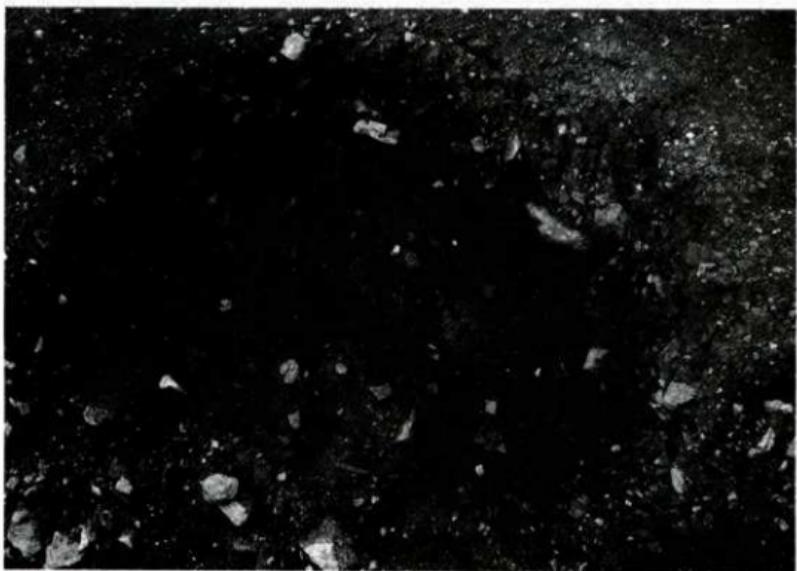
遺構全景



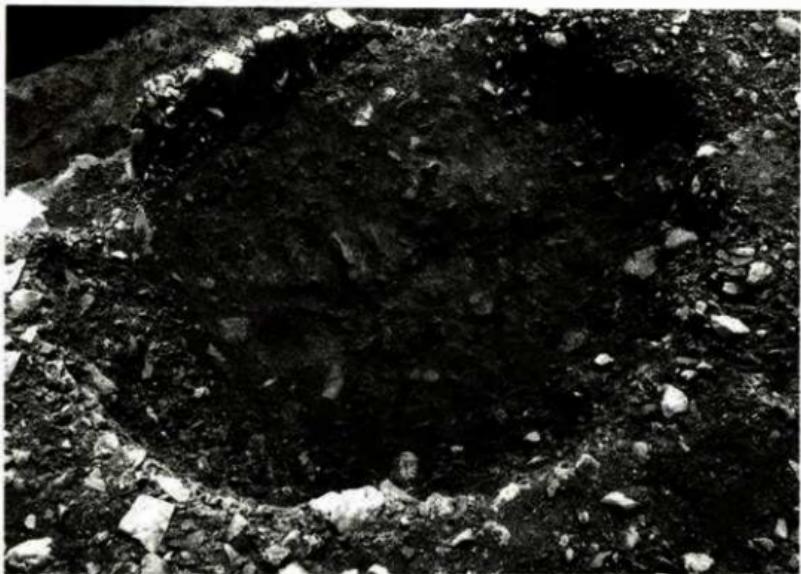
SX 1-3



SK 1



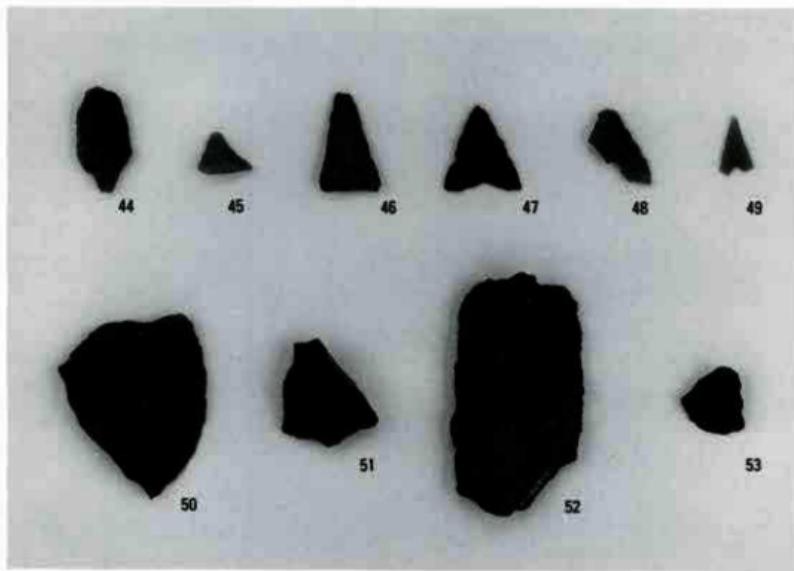
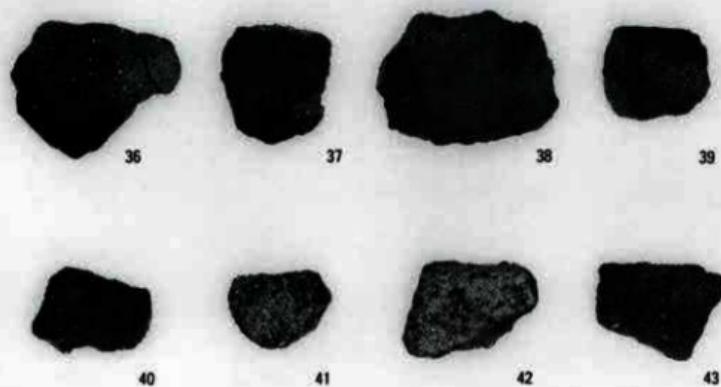
SK 2



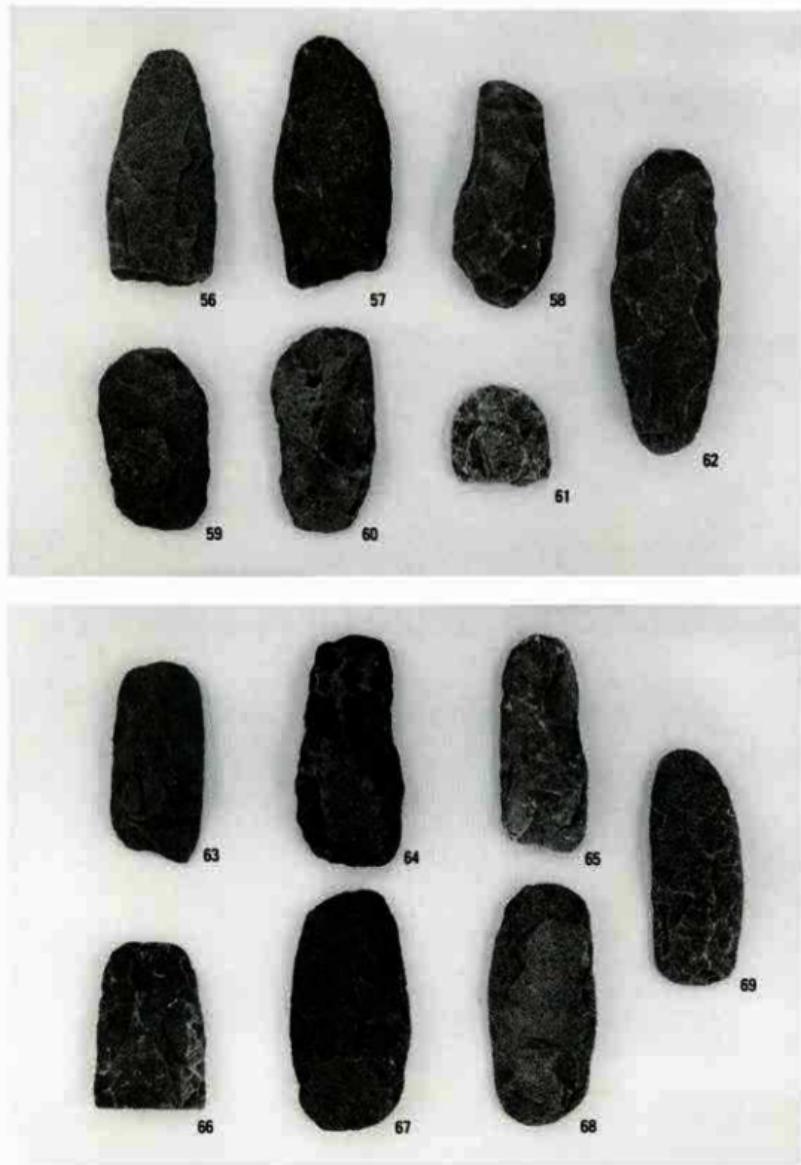
SK 3



SK 4



土器(上) 石器(下) (深)<sup>4</sup>道跡



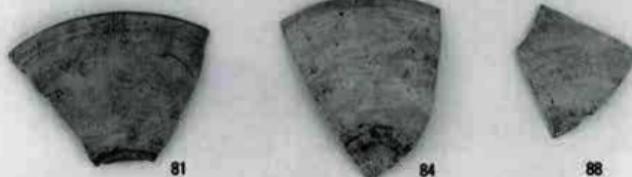
打製石斧（深戶遺跡）



71

75

76



81

84

88



89

90

91



93

94

96

山茶碗(深川遺跡)



100



101



102



103



70



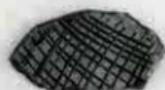
104



105



106



107



92



110



112



97



113



115



116



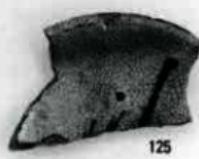
117



118



124



125



119



126



120



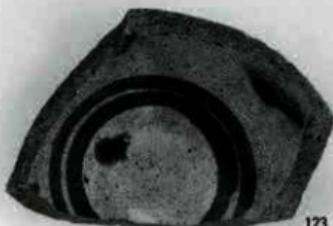
121



122



128



123

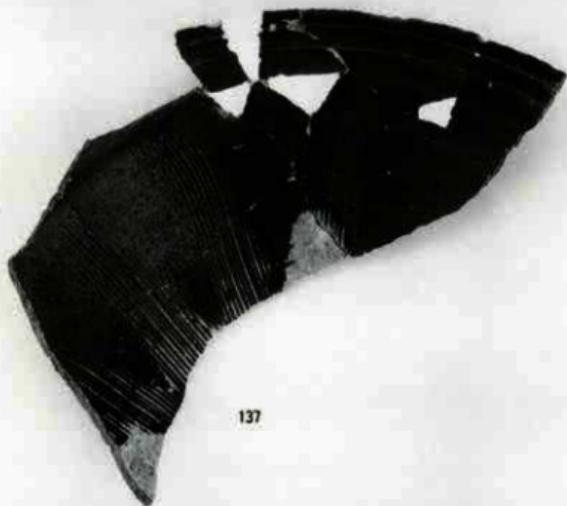
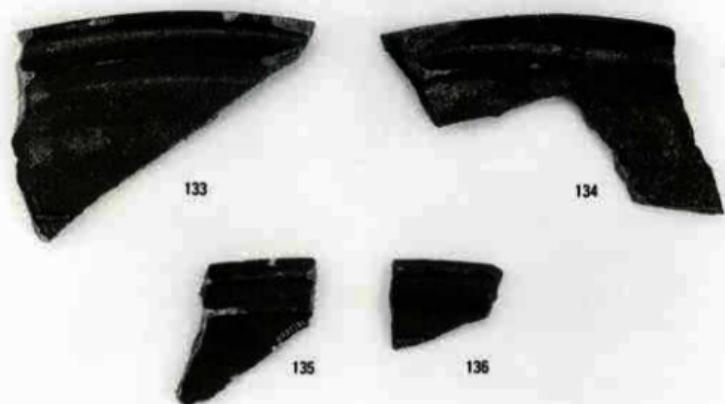


129

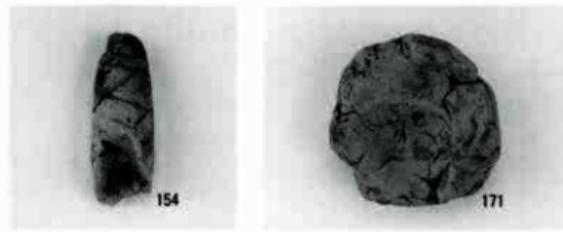
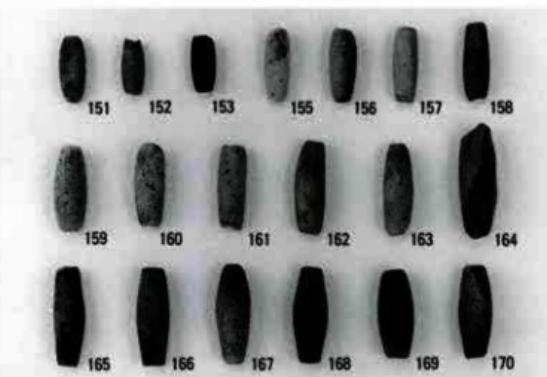
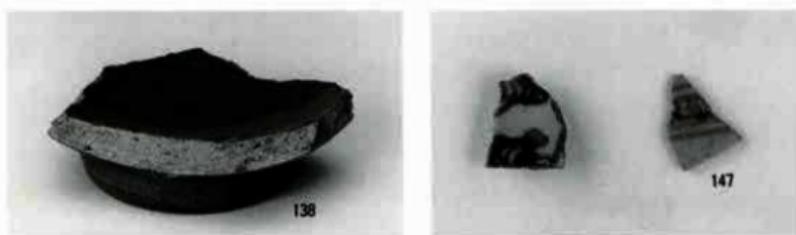
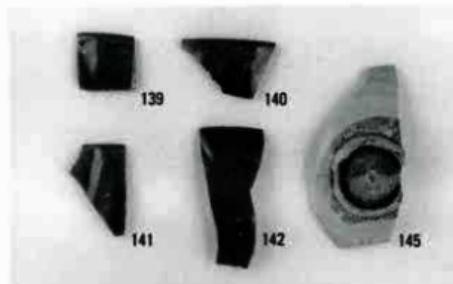


130

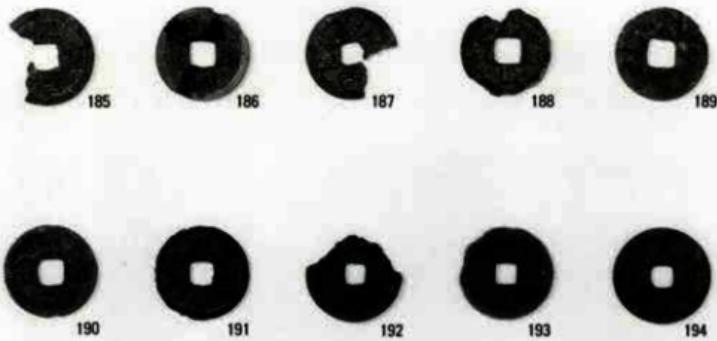
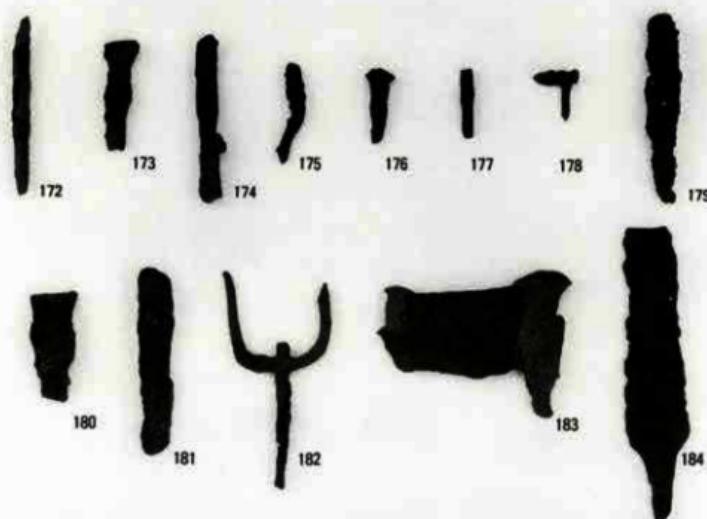
131



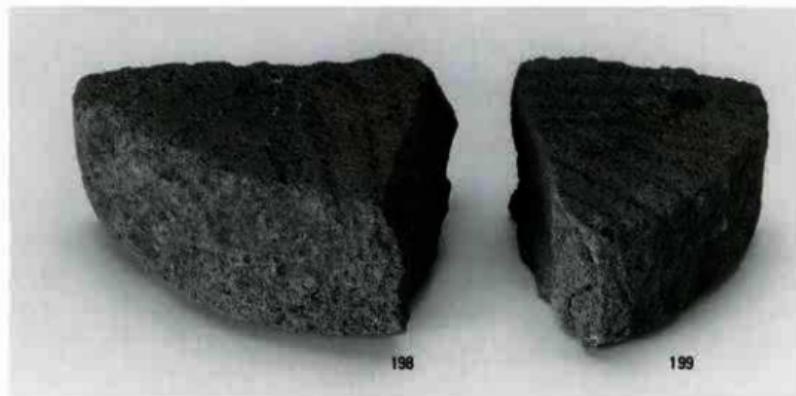
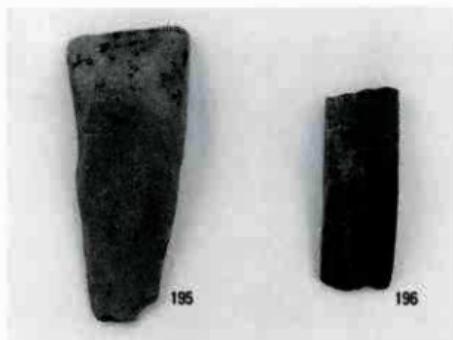
瀬戸美濃陶器（深戸遺跡）



中国陶磁・土錫・土製品（深戸遺跡）



金屬製品・銅錢（深戶遺跡）



石臼・石臼（深井道路）

文献データシート

書名	岐阜県文化財保護センター調査報告書 第6集 鶴尾山城跡・深戸遺跡		
執筆者	川部 誠 各務 光洋 長屋 幸二		
発行所	財團法人岐阜県文化財保護センター	発行年月	1993年3月
調査原因	東海北陸自動車道建設に伴う		
遺跡名	鶴尾山城跡	深戸遺跡	
読み	つるおやま	ふかど	
所在地	岐阜県郡上郡美並村白山	岐阜県郡上郡美並村三戸	
種別	城跡	散布地 土壙跡	
時代	中世(戦国)	中世・近世	

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第6集

## 鶴尾山城跡・深戸遺跡

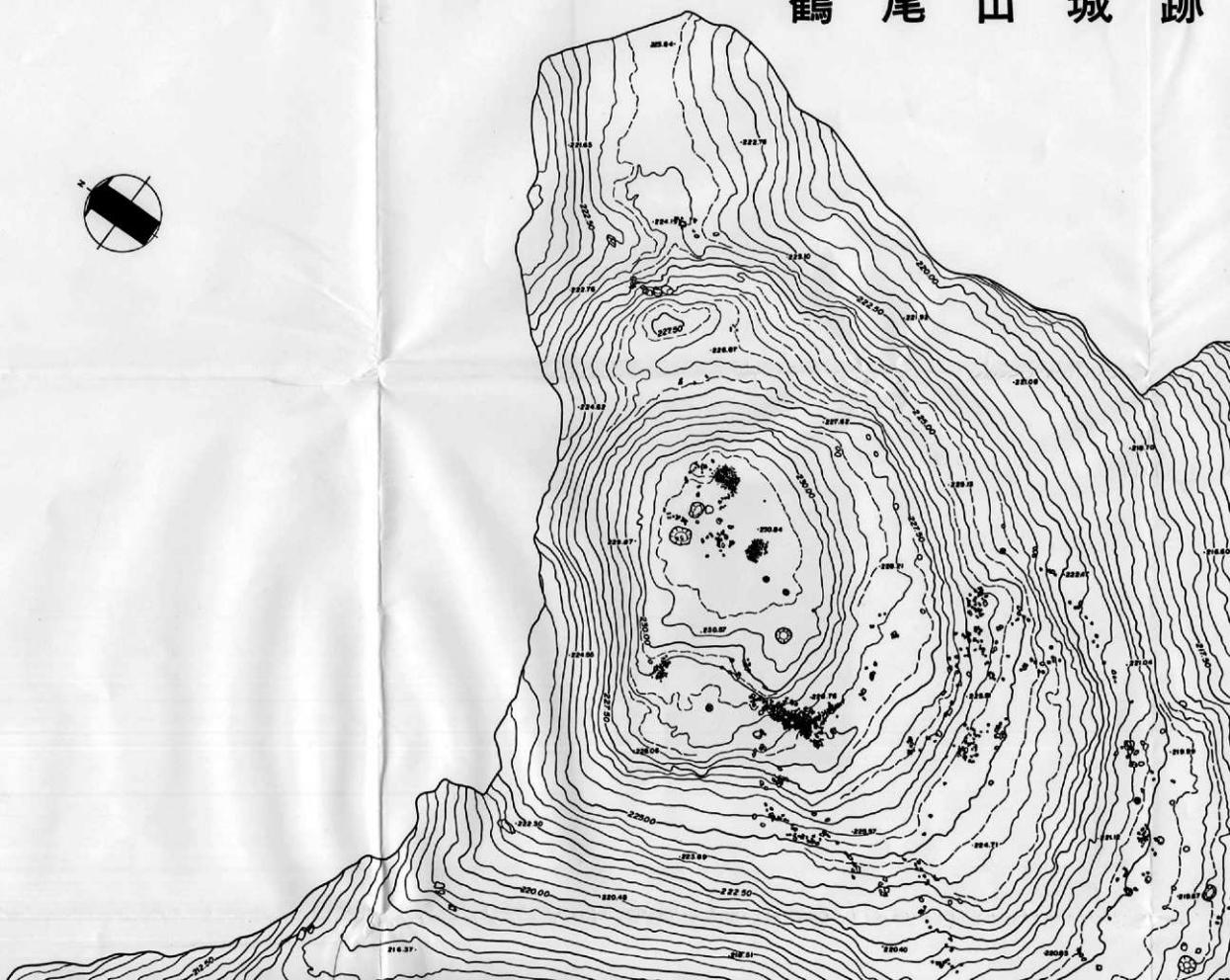
1993年3月25日 印刷

1993年3月31日 刊行

編集・発行 財團法人 岐阜県文化財保護センター  
岐阜県本巣郡穗積町牛牧宮下395

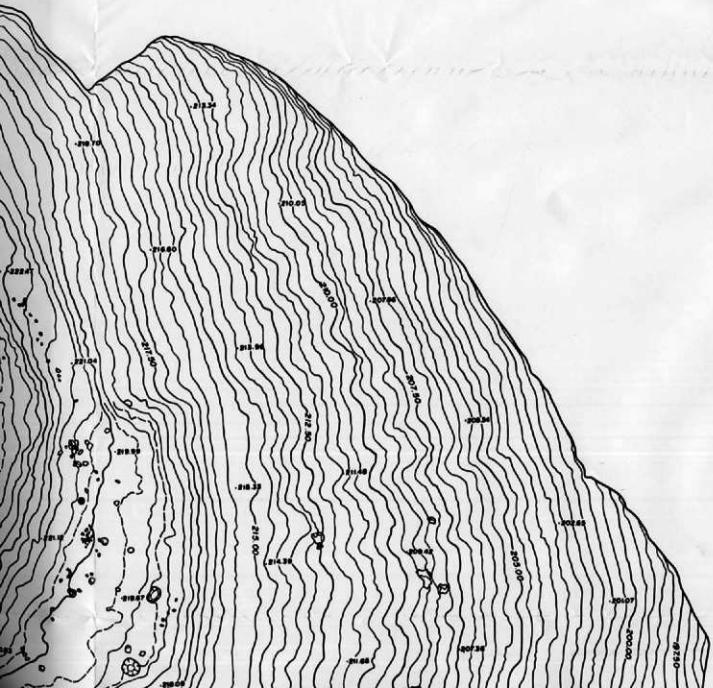
印 刷 昭 和 印 刷

# 鶴尾山城跡



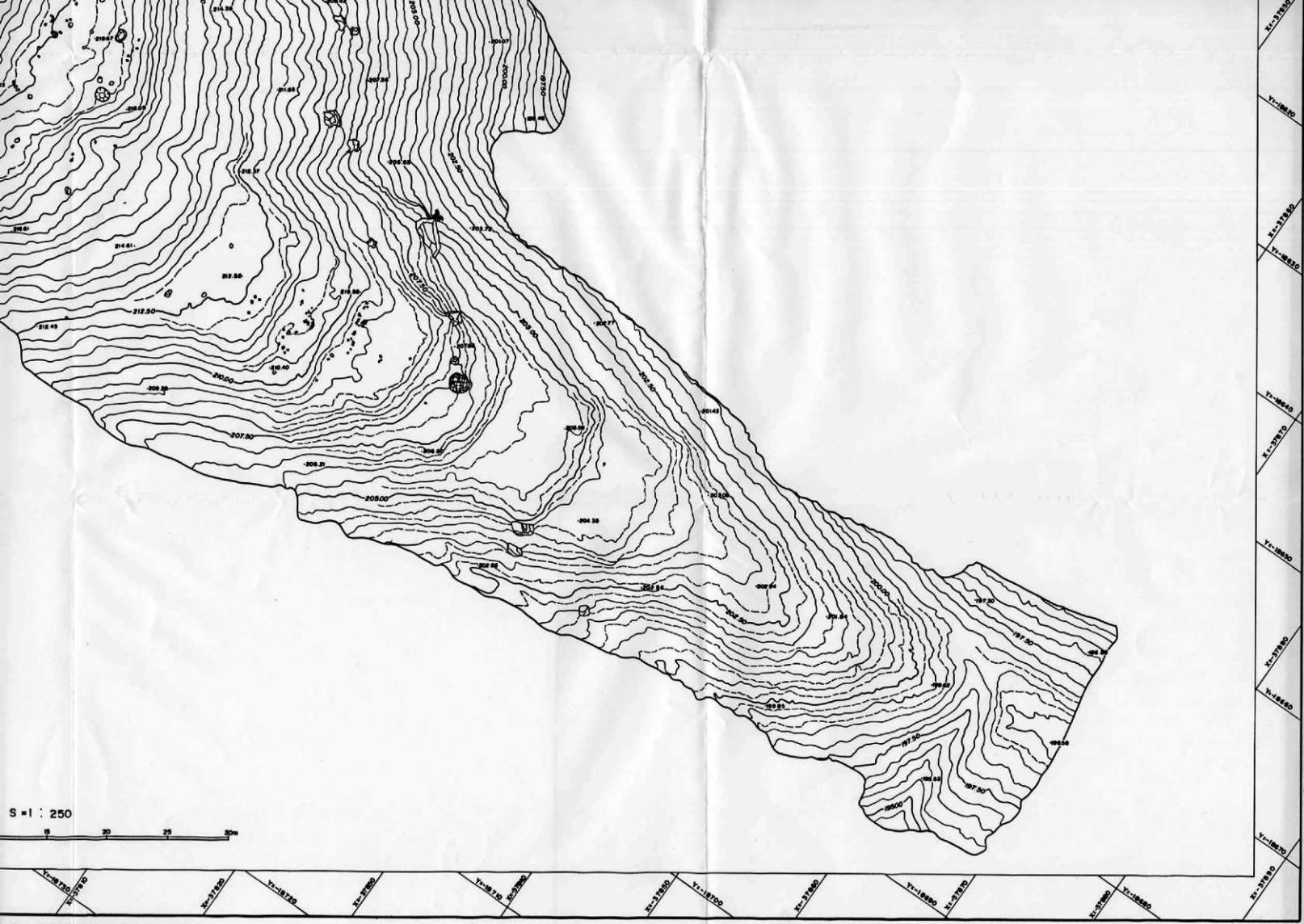
城 跡 発 掘 調 査 平 面 図 S=1:250

S=1:250





付図 鶴尾山城跡発掘調査



尾山城跡発掘調査平面図